福岡市埋蔵文化財調査報告書第826集

三宅廃寺 2

－三宅Ａ遺跡・三宅廃寺推定地の第２次調査報告－

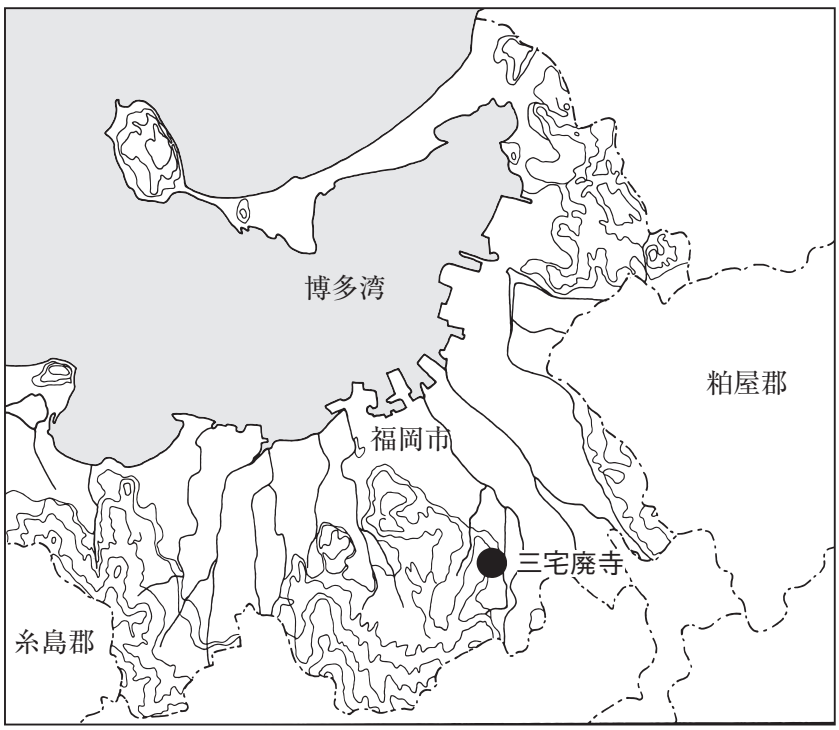
２００４

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第826集

三宅廃寺（みやけはいじ） 2

－三宅Ａ遺跡・三宅廃寺推定地の第２次調査報告－



遺跡略号　　ＭＫＧ-２
遺跡調査番号　　０１５０

２００４
福岡市教育委員会

序

西日本屈指の都市として今も発展を続ける福岡市は、古くより大陸文化の受け入れ口の役目を果たし、豊富な文化財が今なお地下に眠る街でもあります。都市の発展と埋蔵文化財の保護は相容れないことが常ですが、両者が共存する歴史豊かな住みよい街づくりを心がけ、これを子供たちに伝えていくことが現代を生きる我々のつとめであると言えましょう。

福岡市教育委員会では埋蔵文化財を保護するとともに、開発によってやむなく破壊される場合には事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。本書は宅地分譲造成工事にともない実施した三宅廃寺第２次調査について報告するものです。調査では、奈良時代から平安時代初頭にかけての大型掘立柱建物群や溝などの遺構を確認し、「寺」と記された土器が出土するなど、古代寺院の存在を示すに充分な知見が得られました。

調査に際し、事業主である福岡県住宅供給公社をはじめ、地元住民の皆様方にご理解とご協力を頂き、調査を円滑に進めることができましたことをお礼申し上げます。

調査に関わられた全ての方々に対し、深く感謝申し上げますとともに、この報告書が広く活用され、文化財保護の理解を深める一助とならんことを願います。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　生　田　征　生

例　言

1．本書は平成14年(2002)1月15日から同年５月27日に福岡市教育委員会が行った、南区南大橋１丁目1157外所在の三宅Ａ遺跡・三宅廃寺推定地の第２次発掘調査の報告書である。
2．書名を「三宅廃寺」と題したが、古代以外の遺構・遺物の報告も含んでおり、三宅Ａ遺跡の名称がよりふさわしいと考える。しかし、第１次調査との整合性をはかる意味から、あえてこの遺跡名を選択したことを断っておく。
3．発掘調査は県営アパート跡地の分譲住宅造成に伴う受託調査として行った。
4．本書に使用した遺構実測図は、吉武　学、桑野愛子（福岡大学）が作製した。
5．本書に使用した遺物実測図の作製は、吉武、田中克子が行った。
6．本書に使用した写真は、吉武が撮影した。
7．本書に使用した図の製図は吉武、田中が行った。
8．本書に使用した方位は全て磁北である。
9．本書の執筆は吉武と田中が行った。
10．本書の編集は吉武が行った。
11．出土した柱根の年輪年代法による測定を光谷拓実氏に依頼し、玉稿を賜った。
12．本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。なお、登録に際して使用した遺跡名は「三宅廃寺第２次」である。

遺跡調査番号	０１５０		遺跡略号	ＭＫＧ－２	
調査地地籍	南区南大橋１丁目1157外（県公社大橋住宅跡）			分布地図番号	３９　三宅　０１４４
開発面積	４４５７.８９㎡	調査対象面積	８５５㎡	調査面積	１０２３.５㎡
調査期間	2002年(平成14年）１月15日～2002年(平成14年）５月27日				

※調査区壁の勾配法面のため、調査（掘削）面積が調査対象面積を上回る。

本文目次

第一章　はじめに……1
　1．調査に至る経過……1
　2．調査の組織……1
　3．発掘調査地点の位置と周辺遺跡……2
第二章　発掘調査の記録……6
　1．発掘調査の方法と経過……6
　2．基本層序……6
　3．発掘調査の概要……8
　4．古墳時代の遺構と出土遺物……9
　5．古代の遺構と出土遺物……11
　(1)掘立柱建物……11
　(2)溝……19
　(3)土坑……27
　6．その他の出土遺物……38
　(1)報告から漏れた遺構の出土土器……38
　(2)包含層・整地層の出土土器……38
　(3)瓦……44
　(4)石器……51
第三章　おわりに……54

付1．柱根の樹種と年輪年代法による柱根の年代測定　独立行政法人奈良文化財研究所　光谷拓実‥57
付2．三宅廃寺第2次調査における樹種同定　株式会社 古環境研究所……58
付3．三宅廃寺出土丸瓦の製作技法再考　福岡市埋蔵文化財センター　瀧本正志……63

挿図目次

Fig. 1　関連遺跡と古代官道の推定線（1/50,000）…… 3
Fig. 2　周辺の地形と近隣遺跡の調査地点（1/5,000）…… 4
Fig. 3　第１～５次調査区の位置（1/600）…… 5
Fig. 4　Ⅰ区南壁東半部土層（1/60）…… 7
Fig. 5　遺構の配置（1/200）……（折り込み）
Fig. 6　SD-01（1/200）…… 9
Fig. 7　SD-01土層断面・遺物出土状況（1/40）……10
Fig. 8　SD-01出土土器（1/3）……10
Fig. 9　SB-02（1/60）……11
Fig.10　SB-02の柱根（SP-1003）（1/6）……12
Fig.11　SB-20・SD-21（1/60）……13
Fig.12　SB-30（1/60）と柱穴SP-1020（1/40）……14
Fig.13　SB-30の柱根（SP-1025・1026）（1/6）……15
Fig.14　SB-40（1/60）……16
Fig.15　SB-50（1/60）……17
Fig.16　SB-65（1/60）……18
Fig.17　SP-1079（1/40）……18
Fig.18　SP-1079の柱根（1/6）……18
Fig.19　掘立柱建物の出土土器（1/3）……19
Fig.20　SD-14（1/40）……20
Fig.21　SD-15南壁土層（1/40）……20
Fig.22　SD-27・31・32（1/40）……21
Fig.23　SD-39（1/40）……23
Fig.24　SD-60（1/40）……24
Fig.25　SD-69・70（1/40）……25
Fig.26　溝の出土土器（1/3）……26
Fig.27　SK-05・06（1/40）……27
Fig.28　SK-07～09（1/20）……28
Fig.29　SK-10・16～19・29・33（1/40）……30
Fig.30　SK-35・41～47・53（1/40）……32
Fig.31　SK-54・55・57・58・62・64・67（1/40）……34
Fig.32　SK-61（1/30）……35
Fig.33　土坑の出土土器Ⅰ（1/3）……36
Fig.34　土坑の出土土器Ⅱ（1/3）……37
Fig.35　その他の遺構出土土器（1/3）……38
Fig.36　包含層・整地層の範囲（1/500）……39
Fig.37　包含層a～c出土土器（1/3）……40

Fig.38　整地層ｄ出土土器（1/3）……41
Fig.39　包含層ｅ出土土器（1/3）……42
Fig.40　攪乱坑・試掘出土土器（1/3）……43
Fig.41　軒瓦・道具瓦・平瓦（1/4）……45
Fig.42　平瓦Ⅰ（1/4）……46
Fig.43　平瓦Ⅱ（1/4）……47
Fig.44　丸瓦（1/4）……48
Fig.45　叩き目の分類（1/2）……50
Fig.46　石器Ⅰ（1/2）……52
Fig.47　石器Ⅱ（1/1）……53
Fig.48　上層と下層の遺構配置（1/400）……55
Fig.49　区画溝の推定線と8世紀代の建物（1/500）……56

図版目次

PL.1　1．Ⅰ区調査前（西から）　2．Ⅰ区調査風景（南西から）
PL.2　1．Ⅰ区東半部（上方が東）　2．Ⅰ区西半部（上方が東）
PL.3　1．Ⅰ区全景（北東から）　2．Ⅰ区南辺部（東から）
3．Ⅰ区西辺部（北東から）
PL.4　1．Ⅰ区東辺部（東から）　2．Ⅰ区北辺部（東から）
3．Ⅱ区全景（北東から）
PL.5　1．Ⅰ区南壁中央部の土層（北西から）　2．Ⅰ区南壁中央部の土層（北東から）
PL.6　1．SD-01全景（北から）　2．SD-01ｅ区完掘後（北東から）
PL.7　1．SD-01ｃ区北壁土層断面（南から）　2．SD-01ｅ区南壁土層断面（北から）
3．SD-01ｅ区遺物出土状況（南から）
PL.8　1．SB-02（東から）　2．SB-02の柱穴SP-1002（西から）
3．SB-02の柱穴SP-1003（北から）　4．SB-02の柱穴SP-1080（北から）
5．SB-02の柱穴SP-1081（北から）
PL.9　1．SB-20・SD-21（北から）　2．SB-30（東から）
PL.10　1．SB-30の柱穴SP-1020（南から）　2．SB-30の柱穴SP-1020柱根（西から）
3．SB-30の柱穴SP-1020礎板（南から）　4．SB-30の柱穴SP-1022（北西から）
5．SB-30の柱穴SP-1023（北から）　6．SB-30の柱穴SP-1023（西から）
7．SB-30の柱穴SP-1025（南から）　8．SB-30の柱穴SP-1026（南から）
PL.11　SB-30の柱穴SP-1020根固め石の接合状態
PL.12　1．SB-50（東から）　2．SB-50の柱穴SP-1043（東から）
PL.13　1．SD-14南半部（北から）　2．SD-15南壁土層（北から）
PL.14　1．SD-60（東から）　2．SD-60土層断面（東から）
PL.15　1．SD-27・31・32（東から）　2．SD-69・70（北東から）

PL.16　１．SK-０６～０９（北西から）　２．SK-０５（北から）
　　３．SK-０７（東から）　４．SK-０８（北西から）
　　５．SK-０９（南東から）
PL.17　１．SK-１０（南から）　２．SK-１９（北から）
PL.18　１．Ⅰ区南東隅の土坑群（北東から）　２．SK-５５（東から）
PL.19　１．SK-６１全景（南西から）　２．SK-６１遺物出土状況（西から）
PL.20　溝・土坑出土土器（縮尺不同）
PL.21　土坑出土土器（縮尺不同）
PL.22　その他の遺構・包含層・整地層出土土器（縮尺不同）
PL.23　整地層・包含層・試掘出土土器（縮尺不同）
PL.24　軒瓦・瓦の叩き目（縮尺不同）

表目次

Tab.１　遺構別出土瓦の叩き目分類（個数）……51

第一章　はじめに

1．調査に至る経過

福岡市南区南大橋１丁目1157外４筆の県営アパート跡において、福岡県住宅供給公社（以下「県公社」）による専用住宅地の販売を目的とする（仮称）南大橋宅地分譲造成が計画され、平成13年３月12日付で福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（以下「埋文課」）に埋蔵文化財の事前調査依頼があった。申請地は福岡市文化財分布地図では三宅廃寺、三宅Ａ遺跡に含まれ、かつ東側の隣接地で昭和52年11月24日～昭和53年３月27日に実施した三宅廃寺第１次発掘調査では、掘立柱建物や溝、瓦溜等の遺構や、黄銅製匙・箸、石帯、木簡、瓦などの特殊な遺物、「造寺」「寺」「佛」「堂」等の文字を記した土器など、古記録や伝承に残る「三宅寺」に関連すると推定される遺構や遺物を発見しており、これらが申請地内に広がることは確実とみられた。このため、埋文課では平成13年５月２、16、23日に試掘調査を実施し、申請地内に設けた10本のトレンチのうち７本において遺構・遺物を確認し、東側の一部を除く範囲に遺跡が存在すると判断した。

試掘の結果を踏まえ、埋文課では遺跡の保存について県公社と協議をもったが、計画変更は困難な状況にあり、やむなく記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。計画は、申請地内に道路を巡らせて15の宅地分譲部分と１つの緑地部分とに区画し、宅地は販売し、道路と緑地は福岡市へ寄付するというものであった。このため、調査が必要な範囲の内、売却前に行う道路工事予定部分のみを今回の対象とし、宅地については売却後の工事により地下に影響が生ずる場合に別個に対応することとなった。後に、このうち３ヶ所について調査が必要となり第３～５次調査を実施した。

発掘調査は平成14年（2002）１月15日から同年５月27日の２ヶ年度にまたがって埋文課が受託事業として実施し、同じく整理報告書作成は平成15年度に行った。

2．調査の組織

調査にあたり、福岡県住宅供給公社並びに地元住民の皆様にご理解とご協力を頂いた。また、出土した柱根の年輪年代測定を独立行政法人奈良文化財研究所の光谷拓実氏にお願いし、福岡市埋蔵文化財センターの山口譲治所長にご協力頂いた。記して感謝申しあげたい。調査は以下の組織で行った。

調査委託　福岡県住宅供給公社
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　生田征生
調査総括　埋蔵文化財課長　山崎純男
　　埋蔵文化財課調査第２係長　力武卓治（前任）、田中壽夫（現任）
調査庶務　文化財整備課管理係　御手洗　清
調査担当　埋蔵文化財課事前審査係　瀧本正志（試掘担当）
　　埋蔵文化財課調査第２係　吉武　学（本調査担当）
調査協力　金子二三枝、川崎　良、木村文子、桑野愛子（福岡大学）、幸田信乃、佐藤俊治、嶋　ヒサ子、清水　明、薗部保寿、塚本よし子、中野祐子、長田嘉造、西田文子、能丸勢津子、野口ミヨ、野田淳一、平川正夫、松永重子、宮本　碧、持丸玲子、森田祐子、山内　恵、山崎光一、渡辺淑子（五十音順、敬省略）
整理調査員　田中克子
整理協力　上塘貴代子、下山慎子、萩尾朱美、森　寿恵（五十音順、敬省略）

3. 発掘調査地点の位置と周辺遺跡　Fig.1～3

福岡平野を北西に流れる御笠川と那珂川の周囲には開析の進んだ丘陵や段丘が多数残されているが、当遺跡は那珂川西岸に位置し、背振山系の片縄山から派生する花崗岩基盤の丘陵が開析されてできた残丘の直下に形成された沖積地上に立地する。大正末～昭和初期の地形図では南東に開く谷の開口部に位置しており、北側及び西側を比高9～13mの低い丘陵に囲まれている。

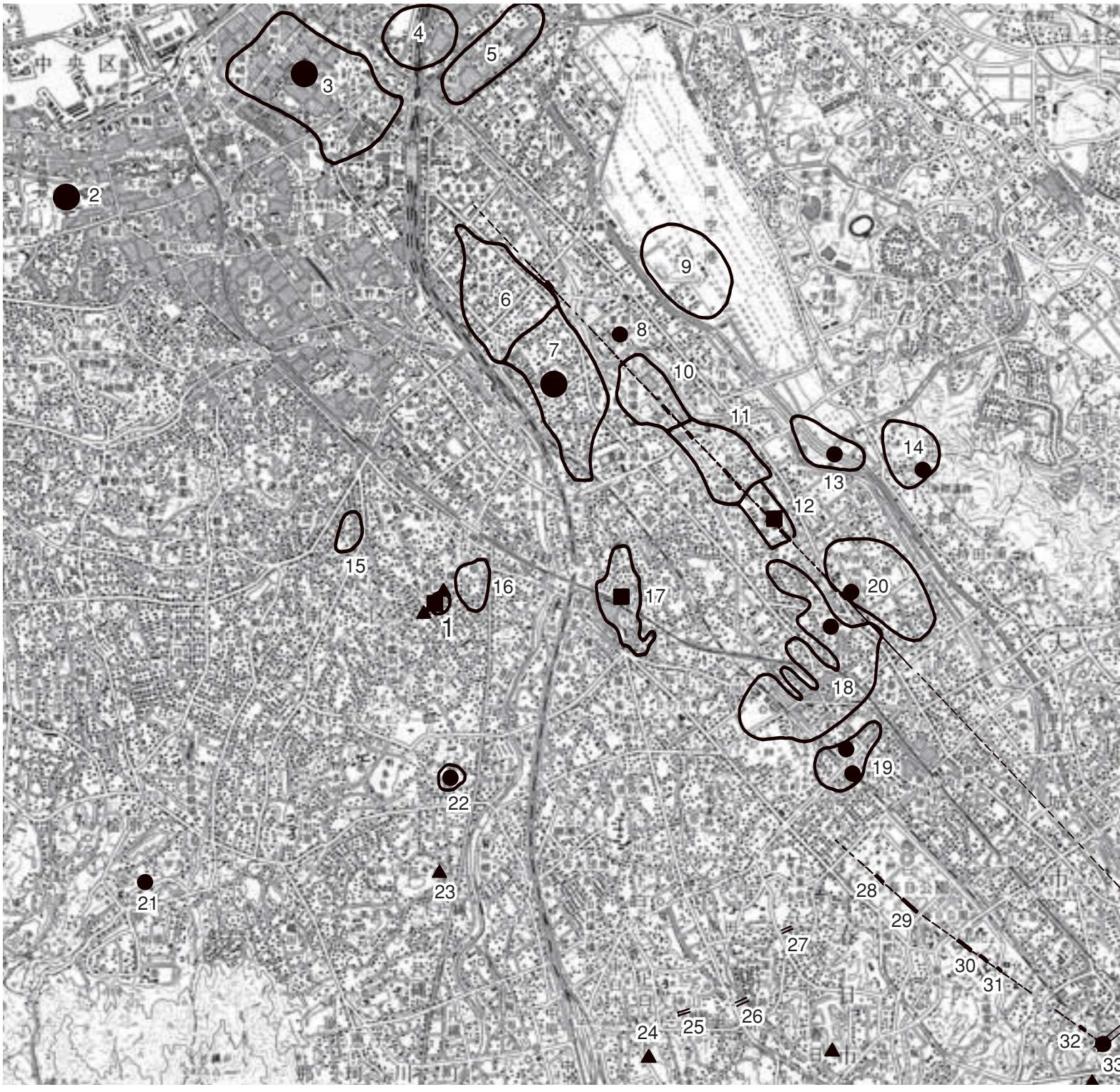
当遺跡は大宰府から水城西門を経て鴻臚館に至る古代官道沿いに位置するものと想定され、実際に水城北側では春日公園内遺跡を始めとして官道と考えられる遺構が相次いで検出されている[註1]が、福岡市内では検出例がなくその正確な通過位置はなお不明である。一方、水城東門から博多遺跡群方面へ伸びる官道は高畑遺跡第18次調査[註2]等で確認され、おおまかな通過位置が判明しつつある。成立時期は後者がやや遅れるようであるが、この2本の官道沿いには古代那珂郡の主要遺跡が多数展開している。例えば大型掘立柱建物や多数の竪穴住居跡を主体とする麦野・雑餉隈遺跡群、掘立柱建物群からなる井相田C遺跡、古代寺院の可能性がある高畑遺跡と井尻B遺跡、郡衙推定地である那珂遺跡群などである。これらは一部を除いて8世紀代に遺構・遺物が質・量ともピークに達して9世紀のうちには激減する傾向にあり、当時の政治的情勢を反映したものと考えられる。

当遺跡の北東側には大橋E遺跡が位置し、現在までに実施された計9次の調査では主として近世の遺構が多いが、第5次調査[註3]（報告書では第4次と誤報）では7世紀代の道路と推定される遺構を確認しており、官道と三宅廃寺を接続する道路の可能性もある。この他にも第2次調査[註4]で新羅系土器が出土し、他でも瓦等の古代遺物が散見されるなど、官衙の存在も指摘されている。

当遺跡は今回を含めて第5次調査まで遺跡名を「三宅廃寺」としたが、本来は三宅廃寺推定地として三宅A遺跡に含めるべきと思われる。現在までに三宅廃寺として計5次が、三宅A遺跡として計1次の調査を経ているが、将来の混乱を避けるためにも次回調査からは三宅A遺跡で統一すべきと考える。三宅廃寺の研究史については第1次調査報告書[註5]に詳しい記述があるので参照されたい。なお、報告書所収の藤野志ヅ恵氏所蔵遺物はその後福岡市博物館に寄贈されたことを付記しておく。

第1次調査後、那珂郡内で寺院跡の可能性が指摘された遺構がいくつか確認されたので、比較のため概要を列記しておく。高畑遺跡では、台地東縁を北流する溝から瓦・塼・文字資料をはじめとする諸遺物が出土し、かつて台地上に礎石らしい大石群があったという伝聞から8世紀中葉を遡る創建の高畑廃寺の存在が想定され、「幅3.3m、深さ1.2mのしっかりした溝」が南限を画する方1町半程度の寺域が示された[註6]。那珂郡内に三宅廃寺と高畑廃寺の二寺が建立されていたことになるが、三宅廃寺は那珂川中流域を本貫とする氏族の氏寺的な性格、高畑廃寺は那珂郡衙推定地に近いことから郡寺的な性格を持っていた可能性があるという。井尻B遺跡第3次調査では真北方向を指向する直線溝から百済系単弁瓦を中心とする瓦が出土し、この溝を寺の区画と考えて中山平次郎らの調査記録などから方一町の寺院域を想定し、「井尻廃寺」と仮称した[註7]。瓦の特徴から7世紀後半から8世紀前半に存続したとみられ、廃絶後は竪穴住居跡が作られ一般集落に変貌している。北に200m離れた第11次調査では表裏に「寺」と刻んだ土器が出土し寺院説を補強した[註8]。その後の調査でも古代の条溝が多数検出されており、更に空間的な広がりを持つようである。これら寺院推定遺跡は、遺構・遺物を相互に検討して初めて寺院跡の可能性や各々の歴史的位置付けに触れ得るものと考えるが、現段階では充分な情報が得られているとは言い難い。

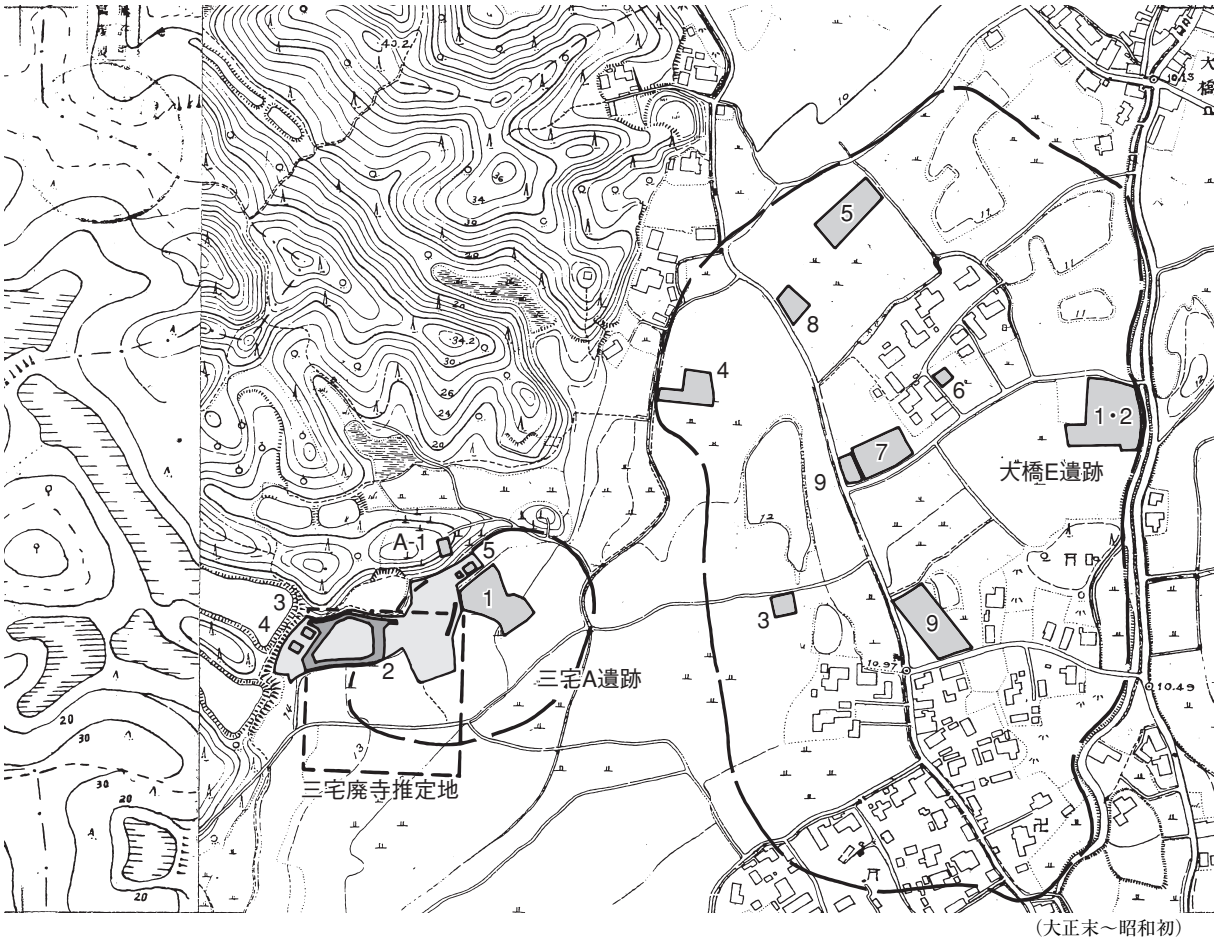
註　1)『春日市史』他、2)市報699集、3)市報511集、4)市報220集、5)市報50集、6)市報98集、7)市報411集、8)市報644集（「市報」は「福岡市埋蔵文化財調査報告書」の略）



1.三宅A遺跡・三宅廃寺・三宅瓦窯跡、2.筑紫館・鴻臚館跡、3.博多遺跡群、4.堅粕遺跡、
5.吉塚遺跡、6.比恵遺跡群、7.那珂遺跡群、8.東那珂遺跡、9.雀居遺跡、10.那珂君休遺跡、
11.板付遺跡、12.高畑遺跡・高畑廃寺、13.立花寺B遺跡、14.立花寺遺跡、15.中村町遺跡、
16.大橋E遺跡、17.井尻B遺跡・井尻廃寺、18.麦野遺跡群、19.雑餉隈遺跡群、
20.井相田C遺跡・仲島遺跡、21.柏原M遺跡、22.野多目C遺跡、23.老司瓦窯跡、
24.ウト口瓦窯跡、25.天神山水城跡、26.大土居水城跡、27.小倉水城跡、28.先ノ原遺跡、
29.春日公園内遺跡、30.九州大学春日キャンパス内遺跡、31.池田・池ノ上遺跡、
32.谷川遺跡、33.水城西門

Fig.1　関連遺跡と古代官道の推定線（1/50,000）

数字は各遺跡の調査次数（A-1は三宅A遺跡１次）



（大正末～昭和初）

Fig.2　周辺地形と近隣遺跡の調査地点（1/5,000）

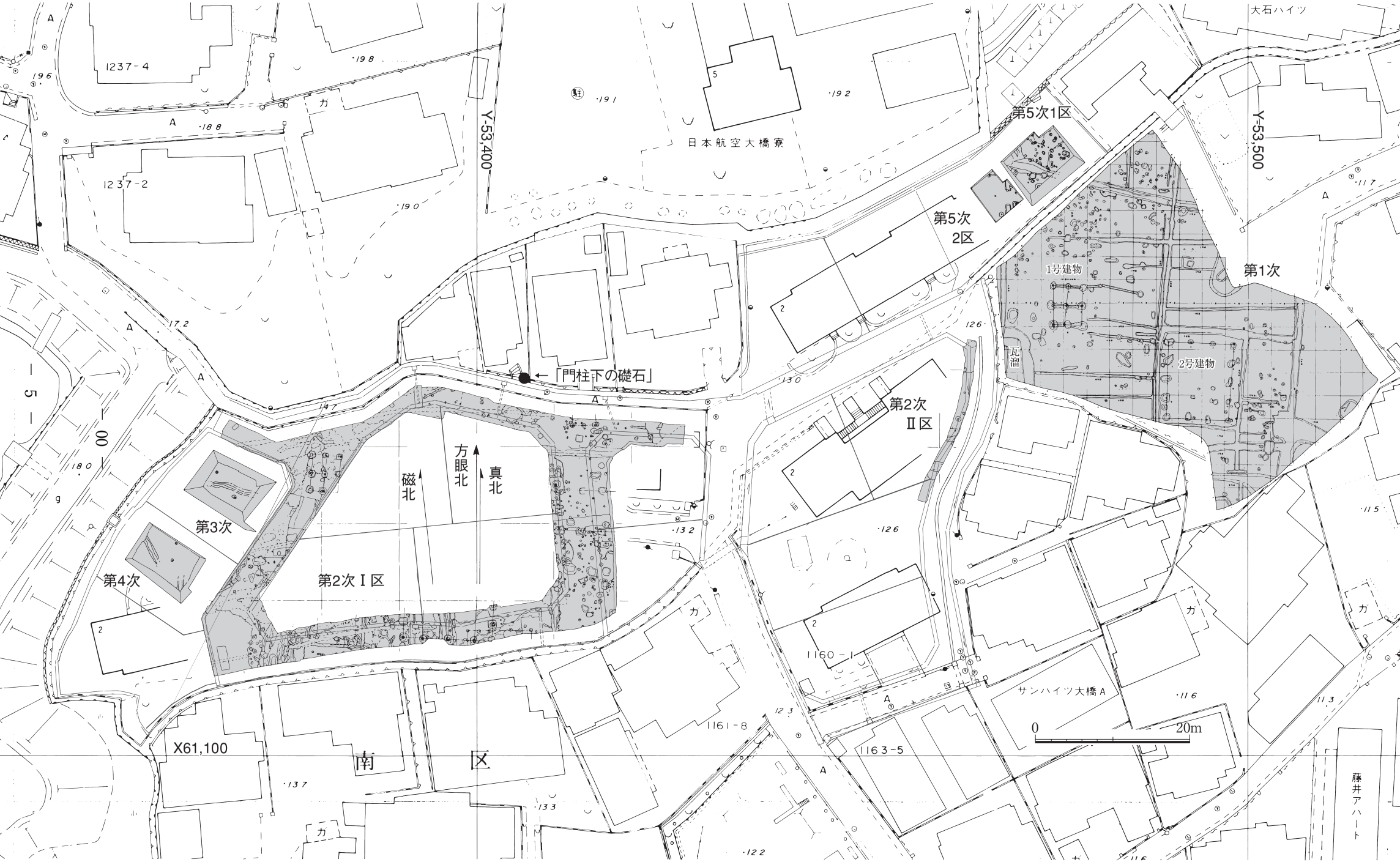


Fig.3　第1～5次調査区の位置（1/600）

座標系は昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系

第二章　発掘調査の記録

1．発掘調査の方法と経過

今回の調査は道路建設予定部分のみを対象としており、申請地全体に対して幅広のトレンチ調査を行ったものとも言える。試掘結果から申請地の一部は調査対象外となったため、調査区は東西に分かれ、西をⅠ区、東をⅡ区とした。試掘ではⅠ～Ⅱ区間とⅡ区南側では遺構が確認できなかったが、後に述べるようにⅠ～Ⅱ区間には溝が残っている可能性が強い。また、調査対象に含まれる既設道路については、水路や下水が埋設されていたことに加え生活道となっており調査不可能であった。このようにして設定した調査区は、西側Ⅰ区は幅２～８ｍでドーナツ状に取り囲む不整な形状をなし、東側Ⅱ区は道路沿いを幅1.2mでトレンチ状に掘る形状をとる。また、道路建設予定幅いっぱいを実質調査対象範囲とし、遺構面の深いところでは法面勾配をとって掘削したため、調査区の上端では予定面積を大幅に上回ることとなった。

調査に際し、国土座標（第Ⅱ系）上に遺構実測図を位置づける目的で、測量業務委託を実施したが、予算処理の関係でやや遅れた。このため、遺構実測は調査区の形状に合わせて任意に基準線を設置して行い、後に座標上に位置づけた。測量業務委託作業は写測エンジニアリング株式会社が受注し、その成果は「三宅廃寺発掘調査に伴うメッシュ杭計測業務委託　成果簿」として平成14年５月に埋蔵文化財課に納品された。また、全景撮影のための空中写真撮影業務を空中写真企画に、出土した柱根の樹種同定業務を古環境研究所に委託した。これら委託業務成果の全てもしくは一部を本報告書に収録している。また、標高は筑紫丘小学校内設置の福岡市下水道局水準点（標高22.012m）より引用した。

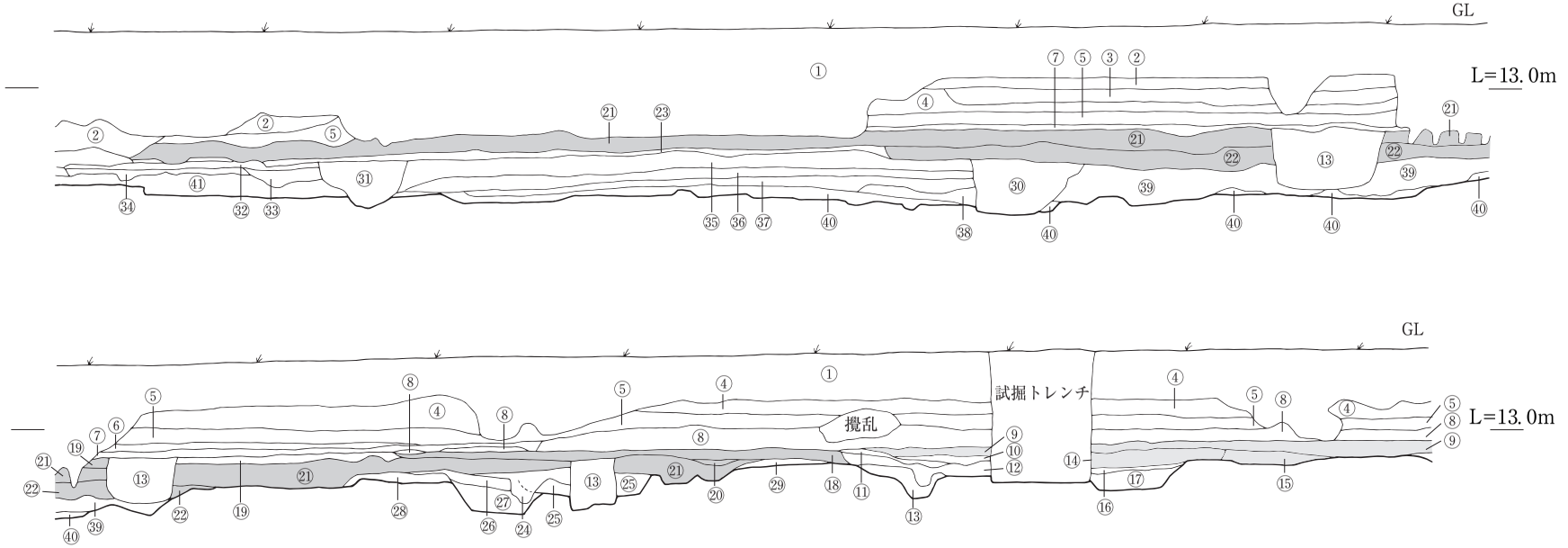
調査は２カ年度にまたがり、西側から順次着手した。平成14年１月15日にⅠ区北西部から表土の除去を開始し、翌16日に人力を投入した。期間中は雨天が多く、ことに調査も終盤を迎えた４月には雨が断続的に続いた。このため全景撮影の準備も繰り返しを余儀なくされ、期間の制約もあって、空中写真撮影は結局雨中で実施せざるを得なかった。さらに調査区がたびたび冠水したことにより、基盤土である沖積層が溶け出し遺構が崩壊するなど記録作製にも苦渋を強いられた。なお、調査期間中の平成14年４月16日～17日には福岡市新規採用職員職場体験のための研修生１名を受け入れた。

寺院跡の推定地という重要性から、当初は現状保存も念頭においての調査開始であったが、区画溝を除いては第１次調査成果を上回るような遺構がなく、際立った遺物も出土しなかったこと等から結局記録保存に終始した。

2．基本層序　Fig.4、PL.5

Ⅱ区はトレンチ調査に過ぎないため、層序はⅠ区について述べる。地表面の標高は海抜12.5～14.0ｍである。遺構面は地表から0.4m～1.2mの深さで、調査区の北西で浅く、南東へ向かって深くなる。中世～近世の水田造営による削平や近年の県営アパート建設による破壊を受けているが、南側では古代の整地層が残っていた。基盤土は北西では削平された丘陵の花崗岩バイラン土が露呈するが、他は全て粘質土、シルト、砂等からなる沖積土で、概ね北西→南東の方向に堆積している。基盤土の標高は11.5～13.2mである。

Ⅰ区の南東部では、古代整地層の下部は南側へ急激に落ち込んでいる。この部分では、(1) 全く遺物が出土しない層（㉟～㊶層）、(2) 古代の遺物を含む層（⑱、⑲、㉑～㉓層）、(3) 中世の遺物を含む層（⑨層）が順に堆積している。(1) 層は古代以前に埋没ないし埋められた自然流路である。(2) 層は複数



①盛土
②灰褐色砂質土（耕作土）
③黄褐色砂質土（床土）
④灰黒色砂質土（耕作土）
⑤灰褐色砂質土（床土）
⑥灰褐色砂質土
⑦黄褐色砂質土（床土）
⑧灰褐色砂質土
⑨暗灰褐色砂質土（包含層c）
⑩暗褐色粘質土
⑪灰褐色砂質土　SK-28
⑫灰褐色砂質土（黄褐色粘質土塊含）
⑬SB-30柱穴
⑭灰褐色砂質土（黒・黄褐色粘質土粒含）
⑮灰褐色砂質土（包含層c又はe）
⑯黒褐色砂質土（黄褐色粘土塊含）
⑰黒褐色砂質土
⑱黄褐色砂質土
⑲灰褐色砂質土（鉄分を多量に含）　（包含層e）
⑳黄褐色粘質土
㉑灰褐色砂質土
㉒灰褐色砂質土+黄褐色砂質土　（包含層e）
㉓黄褐色砂質土
㉔灰色砂質土
㉕暗灰褐色砂質土（暗黄褐色粘質土塊含）
㉖灰褐色砂質土（黄褐色粘質土塊含）
㉗黒色粘質土（黄褐色砂質土・粘質土塊含）
㉘灰色～暗褐色砂質土
㉙黒褐色砂質土
㉚黄褐色粘質土（灰褐色砂質土塊含、土抗？）
㉛黒褐色砂質土（SD-39）
㉜灰色砂質土
㉝黒褐色粘質土
㉞黒褐色砂質土
㉟灰褐色砂質土（黄褐色・黒色粘土粒含）
㊱黄褐色砂質土
㊲黄褐色粘質土（黒色粘土粒含）
㊳黄褐色粘質土
㊴灰黒色砂質土（黒色粘土塊含）
㊵黒色粘質土（黄褐色粘土塊多量に含）
㊶淡黄褐色粘土+灰色砂塊

Fig.4　Ⅰ区南壁東半部土層（1/60）

に分かれ、土層観察によると複数の層から切り込む遺構の存在が観察でき、古代に行われた整地層と考えられる。調査時には覆土の違いから最低二つの遺構面の存在を想定したが、このような重層的な遺構面の広がりはⅠ区南東隅に限定されていたため、調査上の制約などもあり面的に区別して調査することはしなかった。しかし、覆土の観察や遺構の切り合いからみて、遺構は更に複数の時期に細分できると考えられる。(3)層は中世以降の水田造営に際して形成された層とみられ、南辺部に薄く堆積しており、包含層ｃ（⑨層）と包含層e（⑱層）がこれに該当する。

3．発掘調査の概要 Fig.5、PL.1～4

調査地点は那珂川西岸の沖積地上にあり、北側と西側を低丘陵に囲まれた谷部に立地する。第1次調査地点の西隣にあたり、その報告書で位置が示されている三宅廃寺推定地の北半部に相当する。調査区は2ヶ所に分かれ、西側をⅠ区、東側をⅡ区とした。

Ⅰ区の検出遺構

調査面積は調査区上端で943.7㎡、下端で717㎡。調査区の北西で浅く、南東へ向かって深い。中世～近世の水田造営や近年の県営アパート建設によって削平されているが、南東部では古代の整地層が残っていた。基盤土は北西の一部が花崗岩バイラン土で、他は全て沖積層である。古墳時代前期の大溝1条、古代（8～9世紀）の掘立柱建物6棟、区画溝1条の他、土坑、溝、ピット多数を検出した。掘立柱建物は9世紀初頭頃の整地層の上下に検出でき、その配置や覆土からも数時期の建て替えが想定できる。谷部のためか柱根が残る柱穴が多い。

Ⅱ区の検出遺構

調査面積は調査区上端で79.8㎡、下端で25.8㎡。調査予定範囲のほとんどが今も使用されている生活道路と重複しており、トレンチ状の調査に限定された。遺構面は地表から1.1mで、遺構検出面の標高は11.5m。基盤土は沖積層である。土坑、溝、柱穴を検出し、柱穴のひとつには柱根が残る。Ⅱ区の南端では基盤土が砂に変わり、遺構・遺物が全くみられなくなる。湧水が著しく絶えず水没する。

出土遺物

出土遺物は瓦の小片が大半を占め、須恵器・土師器等の日常土器は少ない。土器類がコンテナ17箱、瓦が85箱、石器その他が3箱である。特筆すべき遺物として「寺」銘墨書・刻書土器各1点、老司Ⅰ式軒平瓦がある。土器は小片にいたるまで図化可能なものは掲載した。瓦は瓦当や道具瓦、残りの良いものを図化し、他は叩き目を分類して示した。なお、瓦と石器は後ろにまとめて報告した。

まとめ

特筆すべき遺構として、Ⅰ区東辺に検出した8世紀前半～中頃の溝SD-60がある。東西方向に直線的に伸びる溝で、現況で幅1m強、深さ1m弱の断面逆台形状をなし、Ⅱ区検出の溝SD-70と連続していると想定すると、東西長70m以上の規模となる。またⅠ区西辺へは伸びないため、Ⅰ区南辺の溝SD-27もしくはSD-29に連続すると仮定すると、南北長26m以上の区画溝となる。9世紀初頭頃には大規模な整地を行ってこの区画溝を埋めており、盛土した上に掘立柱建物を建てている。区画の拡張があったことを示すものであろう。この整地層によって遺構を上下に分けることができ、掘立柱建物は時期が古いと考えられる一群では柱痕跡の径が小さく、新しいと考えられる一群では径が大きく柱根が残っているものが多いことが分かった。また、瓦を礎板に使ったり、抜き跡に瓦を投げ入れたものもあるが、古い時期の柱穴にはそれがない。礎石は一切確認できなかったが、かつて存在したとしても、検出した柱穴等の深さから見る限り削平消滅しているものと考えざるを得ない。

Ⅰ区（西側）

Ⅱ区（東側）

座標は国土座標（第Ⅱ系）
一点鎖線は撹乱

Fig.5　遺構の配置（1/200）

４．古墳時代の遺構と出土遺物

ＳＤ－０１　Fig.６・７、PL.６・７

Ⅰ区の北西隅と南西隅に検出した溝状遺構で、方向や形状、覆土から一連の遺構と思われる。調査区内で31ｍの長さを確認した。溝の北端は丘陵が南へせり出した部分へとぶつかり、丘陵裾に取り付くように設けられ、底がせり上がって削平消滅している。南へ幅を広げながら下り、南側は調査区外へと伸びる。最大幅3.8m、検出面からの深さ0.5m強を測る。北からａ～ｅの５区画に区分して調査したが、遺物はｅ区から古式土師器が数点出土し、ａ・ｃ区からは全く出土しなかったため、古代の遺構群が切り込むｂ・ｄ区は掘削しなかった。またｅ区では溝上層に９世紀初頭までの土器を含む遺物包含層がレンズ状に堆積しており、この溝が古代には窪みとなっており、整地を受けたことを示している。溝の覆土は上流側土層断面（Ａ－Ｂ）では下層に厚い砂の堆積が認められるが、下流側土層断面（Ｃ－Ｄ）では粘質土主体である。谷筋を横断して掘られていること、古墳時代前期の遺構は唯一これのみで遺物も他には全く出土していないことなどからみて、水田水利に関わる溝と考えるが確証はない。

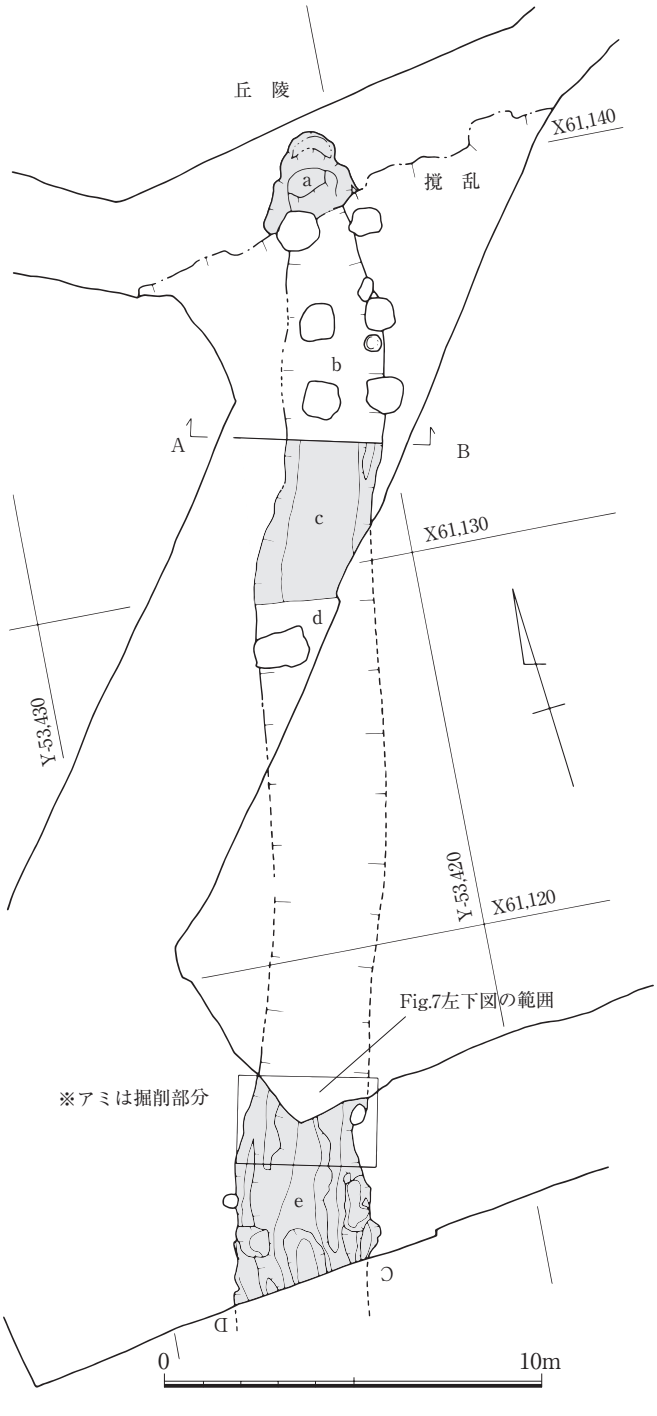


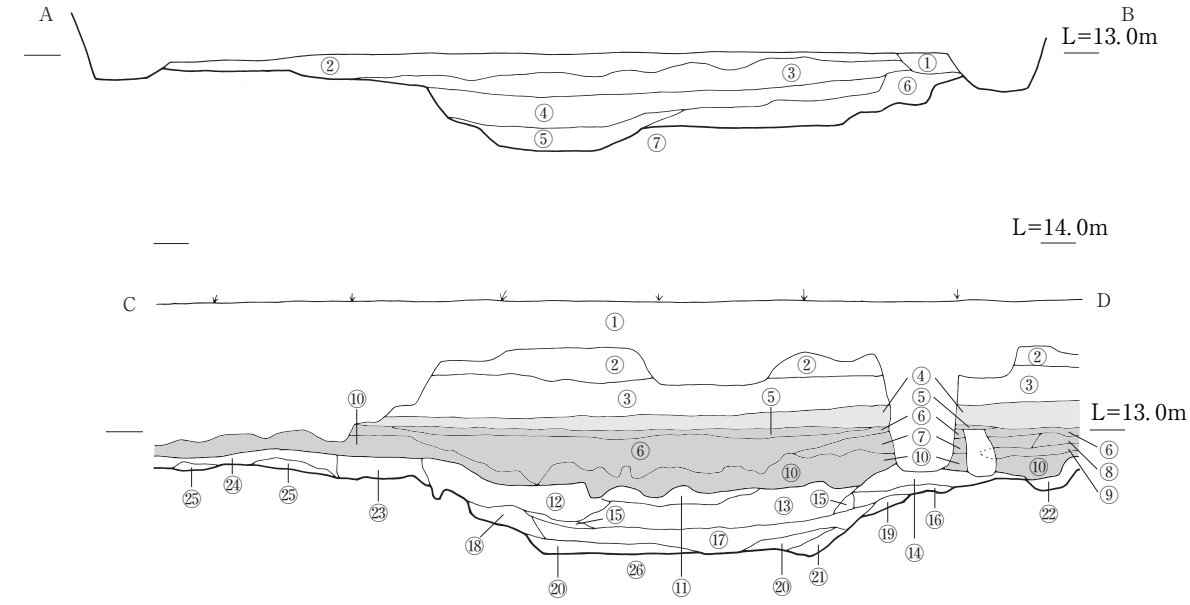
Fig.6　SD-01（1/200）

ＳＤ－０１出土遺物　Fig.８、PL.20

古式土師器と石器が少量出土した。

１・２は古式土師器甕の口縁部片で、Fig.７に図示した位置から出土した。１は口縁が内湾し、端部を面取りする。ローリングが著しいが、胴部外面に縦の刷毛目、内面にヘラ削りを施し、口縁を横ナデする。口径16.6cmに復元できる。２は１より薄手で、残りが悪いが端部は尖り気味に丸いようである。摩滅して調整は不明である。１・２の色調と胎土に差異はなく、ともに細砂粒を多量に含み、焼成は良好である。なお、出土した石器は別項（第二章-６-(4)）にまとめた。

出土遺物が少なく、溝の掘削時期は明らかにし難いが、遅くとも古墳時代前期には埋没を始めており、９世紀初頭頃には窪地となっていたと考えられる。



A－B
① 黒褐色砂質土（攪乱）
② 黒褐色砂質土
③ 深黒色粘質土（粗砂含）
④ 黒褐色砂泥（粘性強い）
⑤ 暗褐色砂
⑥ 灰褐色砂
⑦ 灰色砂（地山）

C－D
① 盛土
② 暗褐色砂質土（耕作土）
③ 暗黄褐色砂質土（床土）
④ 灰褐色砂質土（**中世包含層ｃ**）
⑤ 灰色砂
⑥ 灰褐色砂質土
⑦ 灰褐色砂質土（黄褐色粘質土塊少量含）
⑧ 黄褐色粘質土（灰褐色砂質土塊含）
⑨ 灰色砂質土（黄褐色粘質土塊少量含）
⑩ 黄褐色粘質土（灰褐色砂質土塊含）
⑪ 深黒色粘質土（灰色粘質土塊含）
⑫ 灰黒色粘質土（砂含）
（**古代整地層ｄ**）
⑬ 深黒色粘質土（砂少量含）
⑭ 暗灰褐色砂質土
⑮ 黒色砂質土
⑯ 暗黄褐色砂質土
⑰ 深黒色粘質土
⑱ 黒色砂質土
⑲ 灰黒色砂質土
⑳ 黒色粘質土
㉑ 灰黒色砂
㉒ 暗灰褐色砂質土（黄褐色・黒色粘土粒含）
㉓ 灰黒色粘質土
㉔ 暗褐色粘質土
㉕ 暗灰色砂
㉖ 灰青色粘質土（地山）

Fig.7　SD-01土層断面・遺物出土状況（1/40）

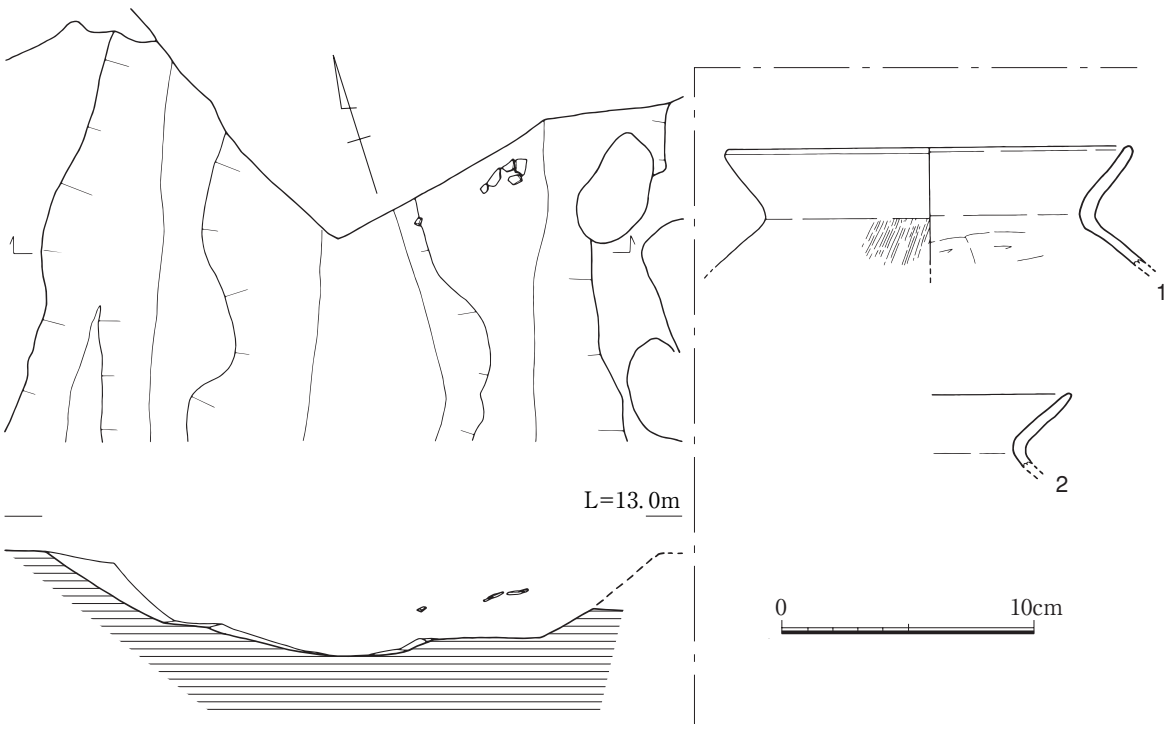


Fig.8　SD-01出土土器（1/3）

５．古代の遺構と出土遺物

古代の遺構は、掘立柱建物６、溝８、土坑29、ピット多数がある。遺構は整地層の上下に検出でき、覆土は上層が灰色系の砂質土、下層が黒色系の粘質土を主体とする。このため整地層が存在しない部分でも上下の区分が可能な遺構があり、明確に判断し得るものは上層遺構、下層遺構と明記した。

（１）掘立柱建物

掘立柱建物は６棟を復元した。なお、柱穴から出土した柱根は分析・図化後、廃棄した。

ＳＢ－０２　Fig. 9 、PL. 8

Ⅰ区北西部で検出した。アパート解体時に破壊を受けており、遺構の残りは良くない。古墳時代前

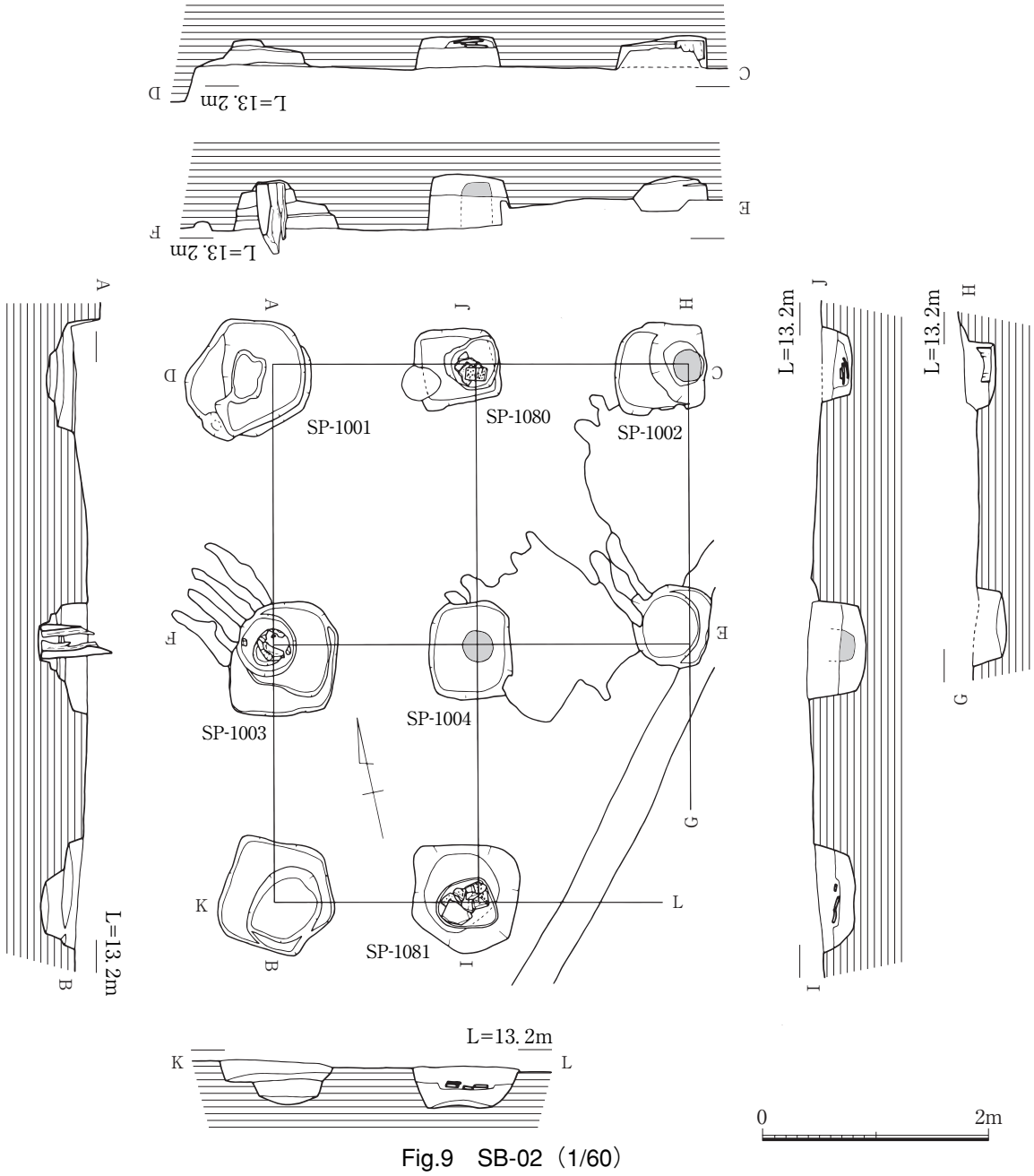


Fig.9　SB-02（1/60）

期の溝SD-01の埋没後に掘り込まれており、基盤土は黒色粘質土である。南北にやや長い２間×２間の総柱建物と考えられるが、南東隅の柱穴は調査区外にある。南北方向の柱筋が通らず、北側がやや開く柱穴配置をとるが、中央柱列から建物の主軸方位をN-12°-Eに復元した。南北長は4.74ｍで、柱間は北から2.47ｍ、2.27ｍ、東西長は３.66ｍで、柱間は東から１.87ｍ、１.79ｍである。柱穴は隅丸方形を基調とするプランで、規模は最も大きいSP-1001で112×104cm、最小のSP-1080で74×67cmを測る。深さ22～48cmと削平により浅い。二つの柱穴に柱根が残っており、いずれも柱穴底面を一段掘り窪めた中に柱を据えている。SP-1002は径25～28cmを測るが、柱の外表が残っていたのみで樹種不明である。SP-1003の柱根はFig.10に図示した。心材を除く1/2周程が残るが、表面の残りが悪く加工痕は不明である。最大径32cmで、樹種はカヤである。SP-1004には径27cmの柱痕跡が認められ、柱穴底面よりやや浮いた状態にある。SP-1080・1081は割った平瓦を平坦に並べて礎板としており、SP-1081の礎板は柱穴底面からやや浮いた状態にある。SP-1080の瓦はFig.42-149に図示した。

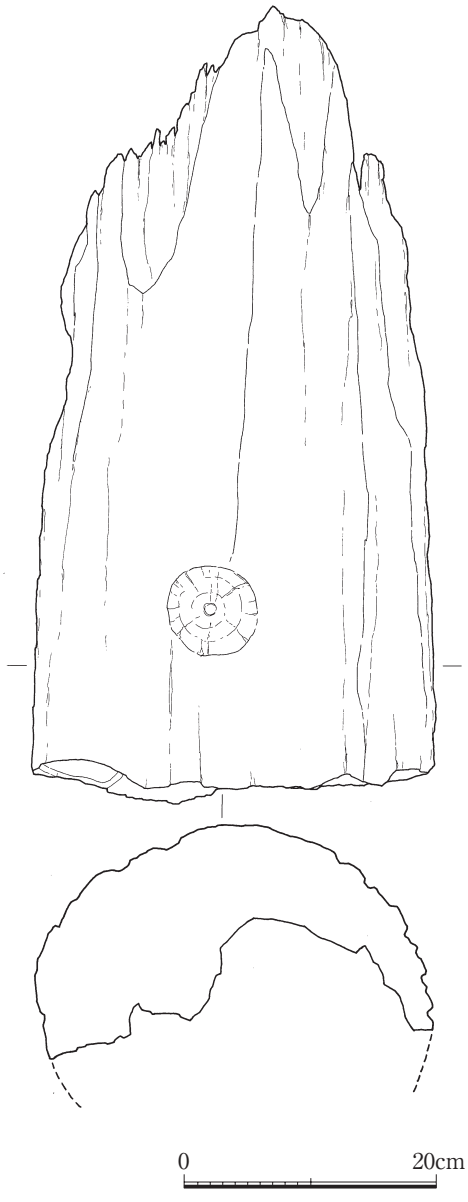


Fig.10　SB-02の柱根（SP-1003）（1/6）

ＳＢ－０２出土土器　Fig.19

須恵器、土師器、瓦が少量出土した。

３は土師器甕で、図示し得る土器はこれのみである。摩滅が著しく調整不明だが外面に刷毛目が僅かに残る。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好。口径25.6ｃｍ。SP-1004の掘り方から出土した。

古代の建物だが、出土土器から詳細時期は決め難い。

ＳＢ－２０・ＳＤ－２１　Fig.11、PL. 9

Ｉ区南西部で検出した。水道管埋設によって一部破壊を受けている。比較的安定した黄褐色粘質土を基盤土とする。東西２間、南北１間以上の建物で、北側が調査区外へ伸びており全容は不明である。建物の主軸方位は磁北から９°東偏する。南北の柱間は2.65ｍ、東西の全長は５ｍで、柱間は2.5ｍの等間である。柱穴は円ないし隅丸方形プランで、長径60～86cm、短径54～80cm、深さ30～56cmである。覆土は黒褐色粘質土で、柱痕跡・礎板等は確認できなかった。下層遺構であろう。

この掘立柱建物SB-20の周りを囲むように小さな溝SD-21が巡っており、主軸方位や配置、覆土などから見て、建物に付随する雨落ち溝である可能性が強い。この場合、軒の出は１ｍ前後であったとみられるが、調査できたのが建物の一部であるためやや信憑性に欠ける。SD-21は幅0.3～0.5ｍで、横断面形は浅皿状をなし、深さは0.1ｍ弱と極めて浅く、覆土は粘質土で、下層遺構である。

このように周囲に溝を巡らせた掘立柱建物は第１次調査にも類例があり、８世紀後半と報告された２号掘立柱建物は、SB-20と主軸方位も合致する。

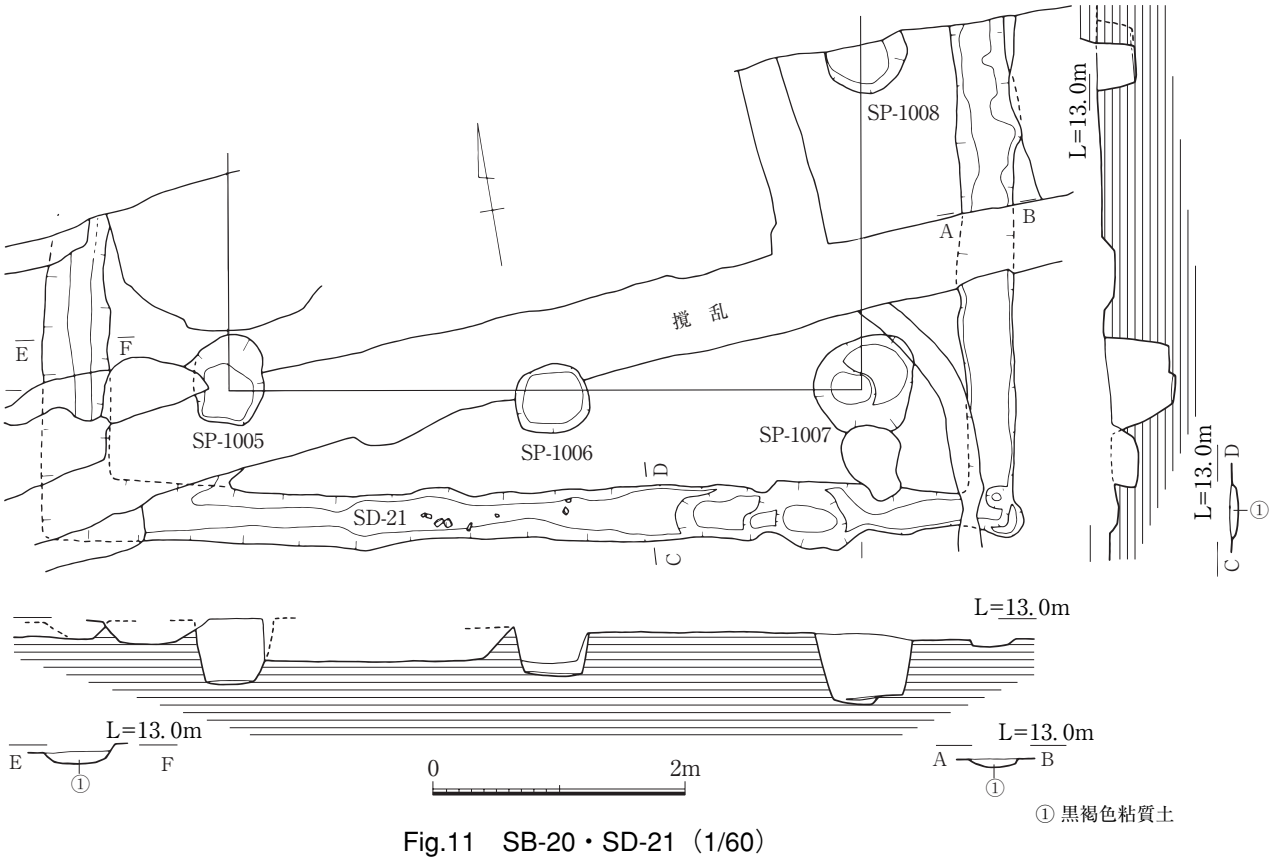


Fig.11　SB-20・SD-21（1/60）

ＳＢ－２０・ＳＤ－２１出土土器　Fig.19

須恵器、土師器、瓦が少量出土した。

4 は須恵器皿で、外底は回転ヘラ削りを施す。胎土に砂粒を少量含み、焼成が悪く赤焼けである。口径15.8cm、器高1.5cm。SB-20の柱穴SP-1005から出土した。5 ～ 7 は須恵器坏蓋で、SD-21から出土した。いずれも天井部外面に回転ヘラ削りを施す。5 は口縁端部がやや内傾気味に垂れ、断面三角形を呈する。口径11.6cm。6 は鈕と口縁端部を欠失する。7 は口縁端部がやや長めに垂直に折れ、内面に明瞭な稜を有する。5 ～ 7 は胎土に砂粒を僅かに含み、焼成は 6 が不良、他は良好である。

8 世紀代の遺構であるが、出土遺物が少ないため詳細時期不明である。

ＳＢ－３０　Fig.12・13、PL. 9 ～11

Ⅰ区南東部で検出した。古代整地層上面から掘り込まれた遺構であるため遺構検出が困難で、東側は遺構検出面を下げ過ぎた。柱間からみて東西に庇をもつ桁行 2 間以上、梁行 2 間の南北に長い建物であろう。主軸方位は磁北から 9° 東偏する。調査区内で桁行4.73m、柱間は北から2.5m、2.23m、梁行全長は6.7mで、柱間は3.35mの等間である。庇の出は東側で2.27m、西側で2.53mである。柱穴は円～隅丸方形プランで、柱痕跡の残るものが 5 つ、うち柱根の残るものが 4 つある。柱穴覆土は砂質土で、締まりがない。SP-1019は124×93cmの隅丸方形プランで、深さ43cmである。SP-1020は径123～126cmの円形プランで、深さ57cm。柱痕跡が残り、柱根が輪状に残存するが心材も外皮も残っていない。樹種はスギである。柱根の下には板材 2 枚を並べて敷くが、板材は残りが悪く取り上げられなかった。扁平礫を礎板に据えており、礫は径40～53cmで厚みが12cmの花崗岩転石で二人抱えほどの重量がある。礎板の下には掘り方底面に接して割石を配し、根固めとする。根固め石は 3 個の花崗

Fig.12　SB-30（1/60）と柱穴SP-1020（1/40）

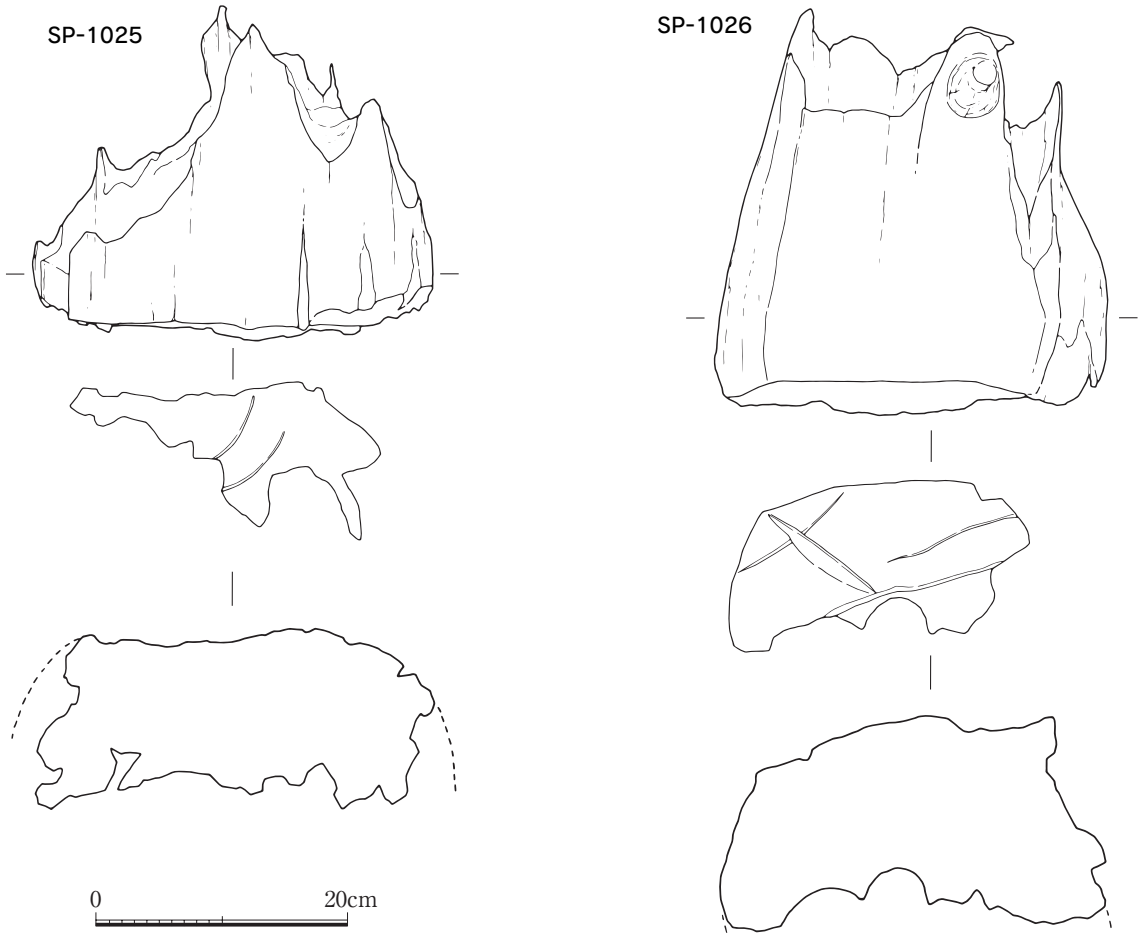


Fig.13　SB-30の柱根（SP-1025・1026）（1/6）

岩礫に接合できたが、足りない（持ち去られた）パーツもある。3個の礫は人頭大で、概ね3分割してそのまま用いたものと、礎板礫下面の形状に合わせてさらに細分割して用いたものとがある。礎板は現場に放棄し、根固め石は撮影後廃棄した（PL.11）。SP-1021は調査区壁にかかり、試掘トレンチに切られるが、径95cmの隅丸方形プランで、深さ35cm。径36～42cmの柱痕跡がある。SP-1022は108×88cmの隅丸方形プランで、深さ57cm。柱穴底面に径49～54cmの円形の窪みを設け、礫と瓦片を敷いて礎板としているが、やや乱れている。SP-1023は調査区壁にかかるが、105×90cmの隅丸方形プランで、検出面を下げ過ぎており深さは55cm以上である。径44～60cmの柱痕跡があり、柱根が残る。樹種はコウヤマキで、南側へ傾いており、抜き取り時に切り落としたものか。柱穴底面には径50cmほどの円形の掘り込みがあって灰青色粘土が詰まっていたが、柱は掘り込みの底面から大きく浮いている。SP-1024は過半が調査区外にあるが、現況で径88cmの隅丸方形プラン。遺構面を大きく下げ過ぎており、深さ38cm以上。SP-1025は111×105cmの方形プランで、深さ56cm。柱痕跡は径45cmで、柱根の1/2ほどが残っていた。材はヒノキである。柱穴底面に径67～73cmの円形の窪みがあり、柱は窪みの底面から大きく浮いている。SP-1026は調査区壁にかかるため拡張して調査した。方形プランとみられ径は103cm、深さ67cm。径39cmの柱痕跡があり、柱根が一部残り、樹種はヒノキである。柱穴底面に径53cmの掘り込みがあり、灰青色粘土が詰まっていたが、柱はこの底面から大きく浮いている。以上の内、SP-1025・1026の柱根をFig.13に示した。ともにヒノキで1/2周ほどが残り、底面には鉈状のもので粗く加工した

痕跡が残る。年輪年代測定により、700年代以降の伐採材であることが分かった（付.1参照）。他のスギ、コウヤマキについては腐食のため外形を留めていないので図化していない。また、柱穴のうち底面に掘り込みをもつものが計4つあり、例外なく柱が底面より浮いた状態にあるが、土層断面の観察では柱穴の切り合いや掘り直しなどは観察できなかった。SP-1022ではこの部分に礫と瓦を詰めて礎板としており、他の柱穴でも掘り込み部分に何らかの腐食してしまうような礎板を入れていた可能性もある。ただし、調査時にはそのような痕跡は全く確認できなかった。

ＳＢ－３０出土土器　Fig.19

コンテナ2箱の遺物が出土したが大半は瓦で、須恵器、土師器が少量ある。

8・9は須恵器である。8は坏身の口縁部で、胎土は精良、焼成は良好、SP-1025掘り方出土。9は有高台坏身で、低い高台を底部のやや内寄りに貼付する。外底部はヘラ切り離しのまま未調整であろう。胎土に砂粒を僅かに含み、焼成は良好。高台径9.0cm。SP-1025柱痕跡出土。

10・11は土師器坏で、底部ヘラ切り離しだが、器面が荒れて調整は不明である。ともに胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好。SP-1021出土。10は底径7.8cm、11は底径8.0cm。

遺構の時期は9世紀代と思われる。

ＳＢ－４０　Fig.14

SB-30の整地層下に検出した。調査区南外に展開する掘立柱建物と考えた。現況で東西方向に3間分を確認した。主軸方位は磁北から5°東偏する。全長は8.28ｍで、柱間は東から2.67ｍ、2.78ｍ、2.83ｍである。雨水により柱穴の一部が崩壊したが、平面プランは円～隅丸方形で、径38～45㎝、深さ23～51㎝である。柱痕跡や礎板は認められない。他の掘立柱建物に比べると柱穴が小規模である。

柱穴から須恵器、瓦の小片が数点出土したが、図化できるものはない。SB-30に先行する下層遺構で、奈良時代以前に遡るとみられるが、詳細な時期は不明である。

ＳＢ－５０　Fig.15、PL.12

Ⅰ区の東辺で検出した東西に長い建物である。東側は調査区外へ伸び、現況で桁行3間以上、梁行2間である。建物主軸方位は磁北から8°東偏する。桁行全長は5.56ｍで、柱間は東から2.6ｍ、2.96ｍ、梁行全長は5.28ｍで、柱間は2.64ｍの等間である。柱穴は全て半截掘削したが、相次ぐ降雨により崩壊し、土層を記録できなかったものもある。柱穴は隅丸方形プランを基調とし、計測可能な柱穴では長径105～140cm、短径85～105cm、深さ50～80cmを測る。柱穴覆土は粘質土を主体とする。柱痕跡

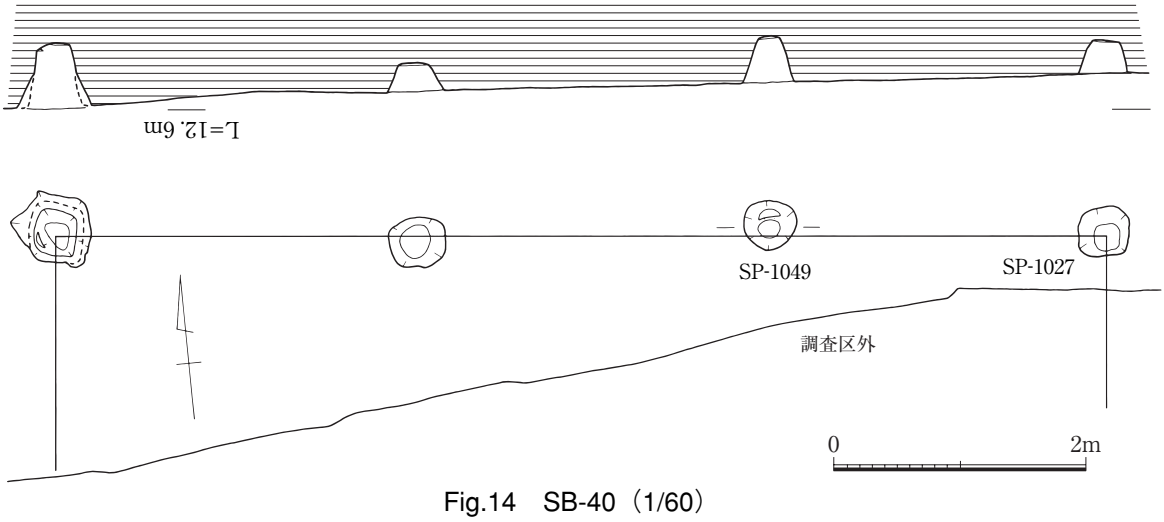
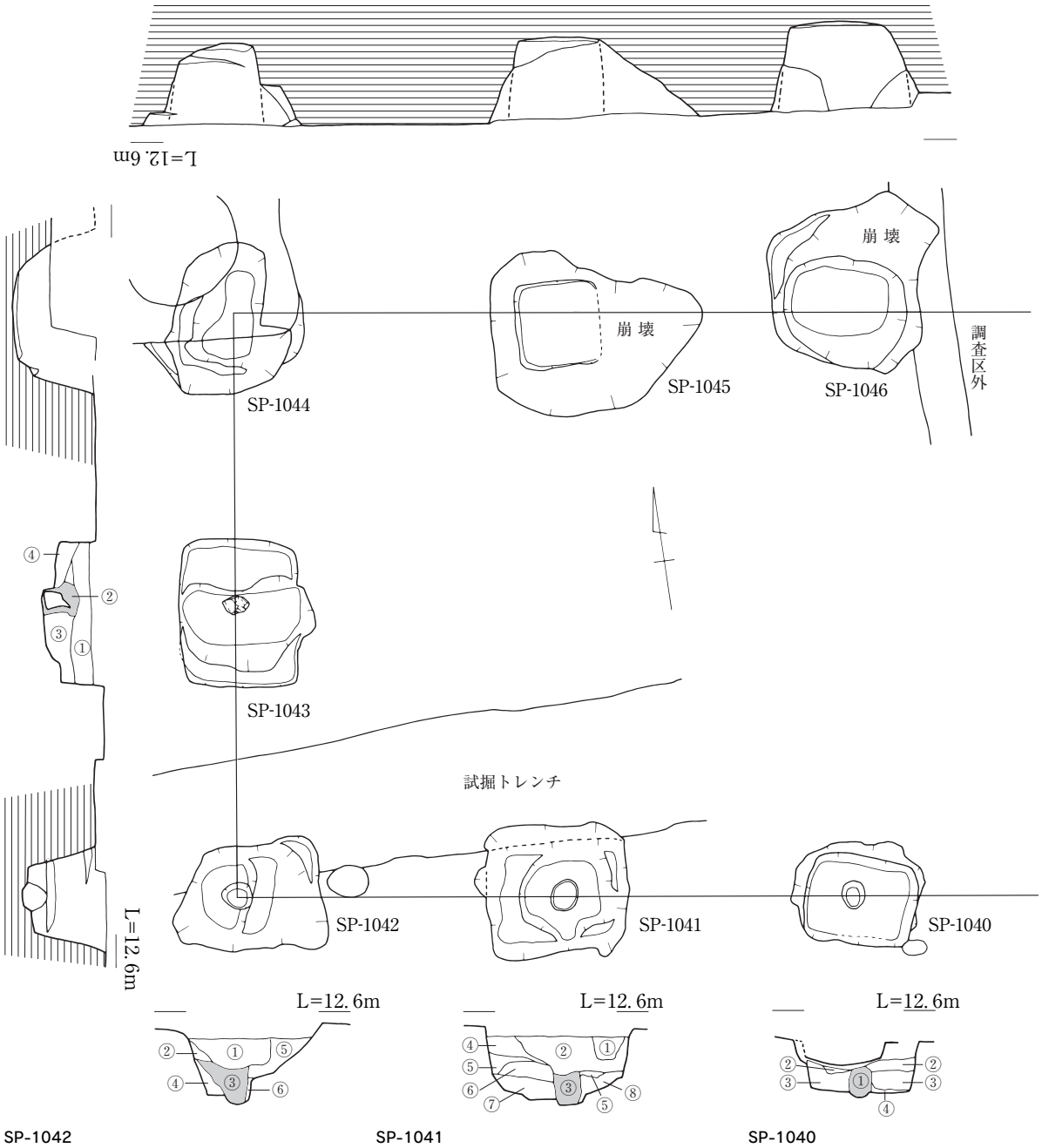


Fig.14　SB-40（1/60）



SP-1042
① 暗褐色粘質土（黄褐色粘質土塊・灰褐色シルト塊含）
② 橙褐色粘質土（鉄分含）
③ 黒褐色粘質土（灰褐色シルト塊含・柱痕跡）
④ ③に近似し、やや暗い
⑤ 黄褐色砂質土（灰褐色シルト塊含）
⑥ ③に近似し、灰褐色シルト塊が多い

SP-1041
① 暗灰褐色砂質土（ピット）
② 暗褐色粘質土（黄褐色粘質土塊・灰褐色シルト塊含）
③ 灰黒色粘質土（灰褐色シルト塊含・柱痕跡）
④ 灰褐色砂質土（黄褐色粘土塊含）
⑤ 暗褐色粘質土（灰褐色シルト塊含）
⑥ 黒色粘質土（黄褐色粘質土塊・灰褐色シルト塊含）
⑦ 灰褐色粗砂＋黄褐色粘土
⑧ 灰褐色シルト（黄褐色粘土塊含）

SP-1040
① 暗褐色粘質土（黄褐色粘土塊含・柱痕跡）
② 黒色粘質土
③ 黄褐色粘質土塊＋灰褐色砂質土塊
④ 黒色粘質土

SP-1043
① 灰褐色砂質土（黒色・黄褐色粘土塊含）
② 灰黒色粘質土（柱痕跡）
③ 黒色粘質土（灰色シルト・黄褐色粘質土塊含）
④ 灰色微砂（淡黄色粘土塊含）

0 2m

Fig.15 SB-50（1/60）

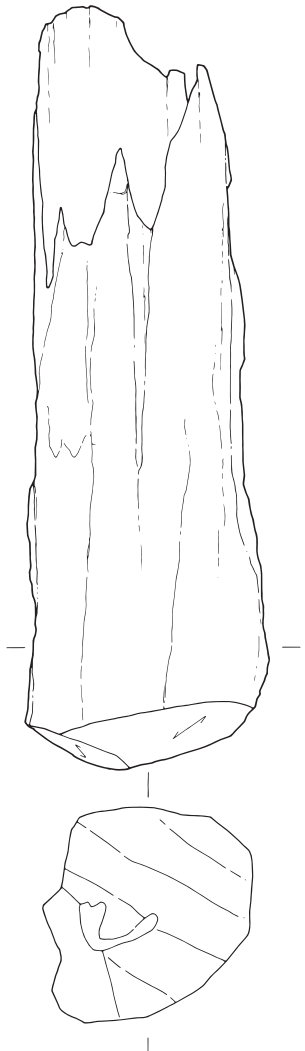
は４つの柱穴に認められ、径20～26cmである。柱痕跡は平面的には検出できず、全て土層断面で確認しており、柱が抜き取られた際に柱穴上層部が攪乱されたことが土層からうかがえる。SP-1043では柱痕跡の中に柱根の一部が残る。保存状態が悪く芯材のみだが、樹種はタブノキである。南列のSP-1040～1042は柱穴の底面中央に径20～30cmの楕円形の浅い窪みがあり、柱の圧痕と考えられる。柱穴掘り方の規模は大きいが、それに比べて用いた柱の径が小さな建物であったと言えよう。

ＳＢ－５０出土土器　Fig.19

須恵器、土師器、瓦がごく少量あるが、大半が柱穴を10cmほど下げた上層から出土し、下層からはほとんど出土しなかった。

12は須恵器で、左側は縦に切り取られており透孔と思われる。円面硯の脚部分であろうか。胎土に砂粒を僅かに含み、焼成は良好である。SP-1046上層から出土した。

出土遺物からは詳細時期が決めがたいが、覆土からみて下層遺構と考えられ、奈良時代に位置づけられよう。



ＳＢ－６５　Fig.16、PL.14

Ⅰ区の北東部に検出した。調査区壁際に柱穴３つが並んでおり、北側へ展開する掘立柱建物と考えた。主軸方位は磁北から４°東偏する。東西全長は2.96ｍ、柱間は東から1.55ｍ、1.41ｍである。雨水により柱穴の一部が崩壊したが、平面プランは隅丸方形で、長径55～57㎝、短径53～56㎝、深さ47～67㎝。ふたつの柱穴に柱痕跡があり、径22～24㎝である。他の掘立柱建物に比べると柱間が狭く、復元に疑問も残る。

瓦片のみがSP-1073・1074柱痕跡から少量出土した。

Ⅱ区の柱穴（SP-1079）　Fig.17・18、PL.15

Ⅱ区で検出した柱穴であるが、調査区が狭いため建物の復元には至らない。基盤土は砂で、著しい湧水のため遺構が崩壊し、柱穴下部は記録できなかった。出土遺物は柱根のみで、Fig.18に図示した。底面には二方向の面取りがあり、鋸引きしたような線が数条認められる。樹種はイスノキである。

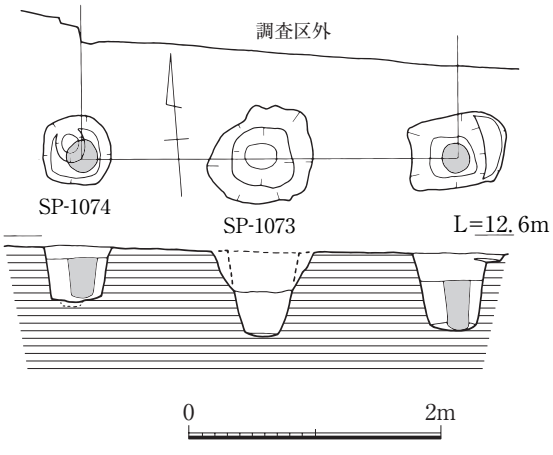


Fig.16　SB-65（1/60）

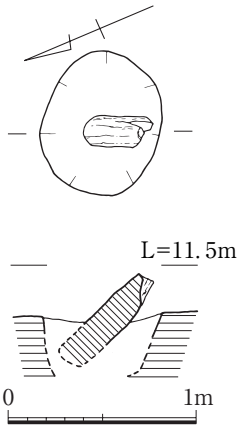


Fig.17　SP-1079（1/40）

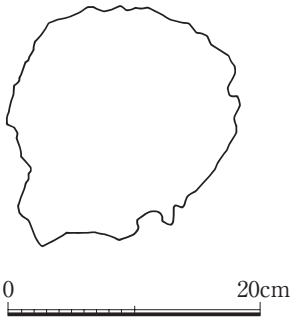


Fig.18　SP-1079の柱根（1/6）

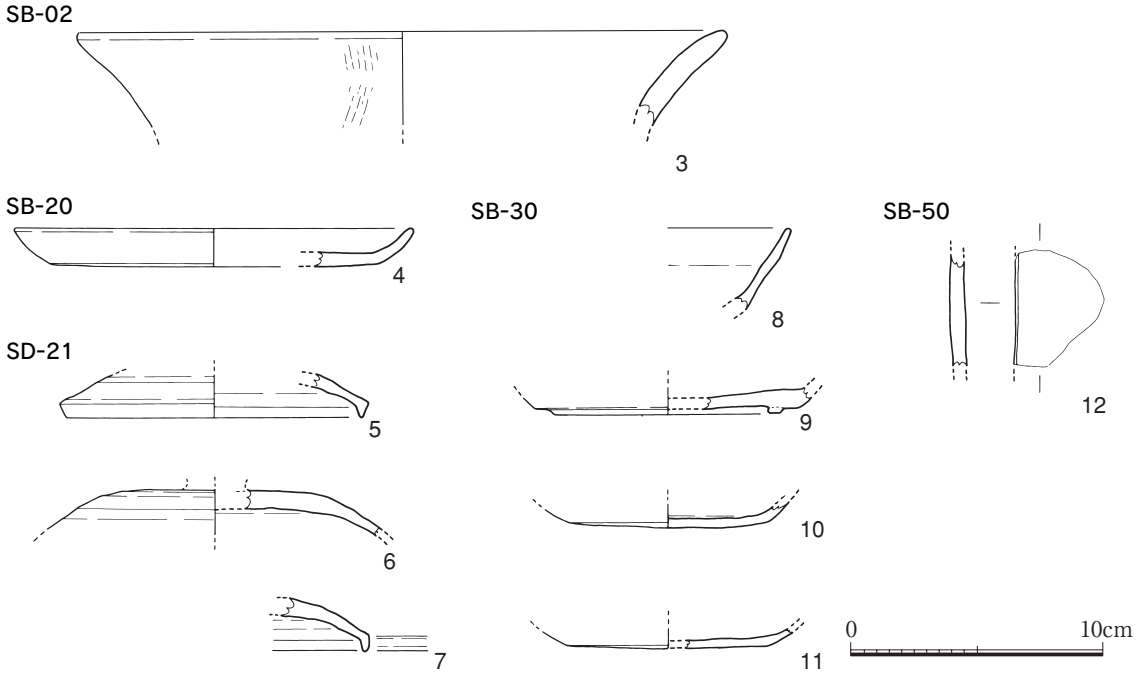


Fig.19　掘立柱建物の出土土器（1/3）

（２）溝

溝は 9 条を報告する。他に時期不明の小溝が 6 条ある。

ＳＤ－１４　Fig.20、PL.13

Ⅰ区南西部に位置し、SD-01を切る。中央を攪乱溝に切られる。調査区の北と南へ伸びており、浅い溝もしくは土坑と考えられるが、全容は不明である。東西幅１ｍ強で、南北長は不明、深さ0.1ｍである。北側ではピット群と切り合うが先後関係は不明。南側では整地層を挟んで、下層に小さな溝状遺構がある。溝は幅0.34～0.6ｍ、深さは0.1ｍに満たない。

ＳＤ－１４出土土器　Fig.26

数点の須恵器・土師器と、十数点の瓦が出土した。

13は須恵器坏蓋である。口縁端部は短く垂れ下がり断面三角形を呈するが、内面の稜はあまい。内面にナデを加え、天井部外面には回転ヘラ削りの痕跡が僅かに残る。胎土に砂粒を僅かに含み、焼成良好である。

古代の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

ＳＤ－１５　Fig.21、PL.13

Ⅰ区南西隅に検出した古河川の一部で、調査地西側に現存する谷の旧流路と考えられ、人為的なものではない。覆土は漆黒色の黒色粘質土で、遺物を何も含まない。上面を古代の遺物包含層に覆われており、 9 世紀初頭頃にSD-01とともに盛土整地されたものと考えられる。

ＳＤ－２７　Fig.22、PL.15

Ⅰ区南辺の中央部に位置する。古代整地層下に検出した下層遺構で、整地層を挟んで上層に掘立柱建物SB-30が重なる。幅1.0～1.2ｍの南北方向の溝で、調査区内で長さ 4 ｍを確認したが南北は区外へ

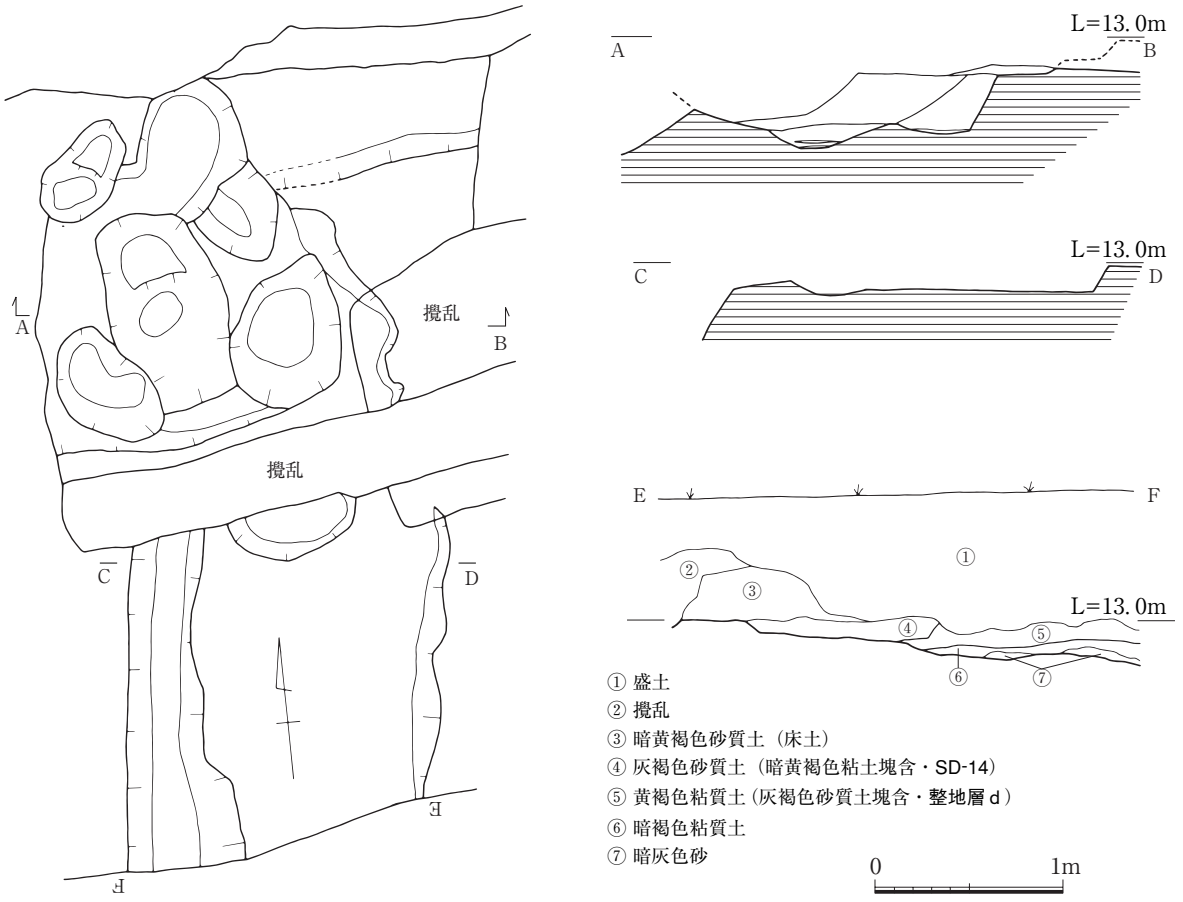


Fig.20　SD-14（1/40）

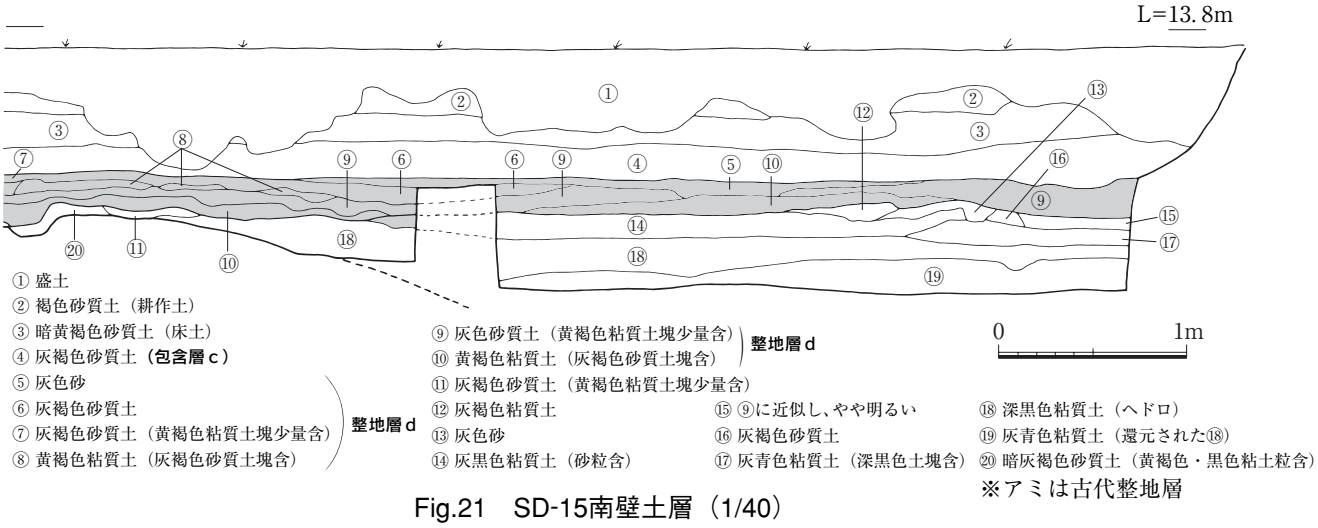
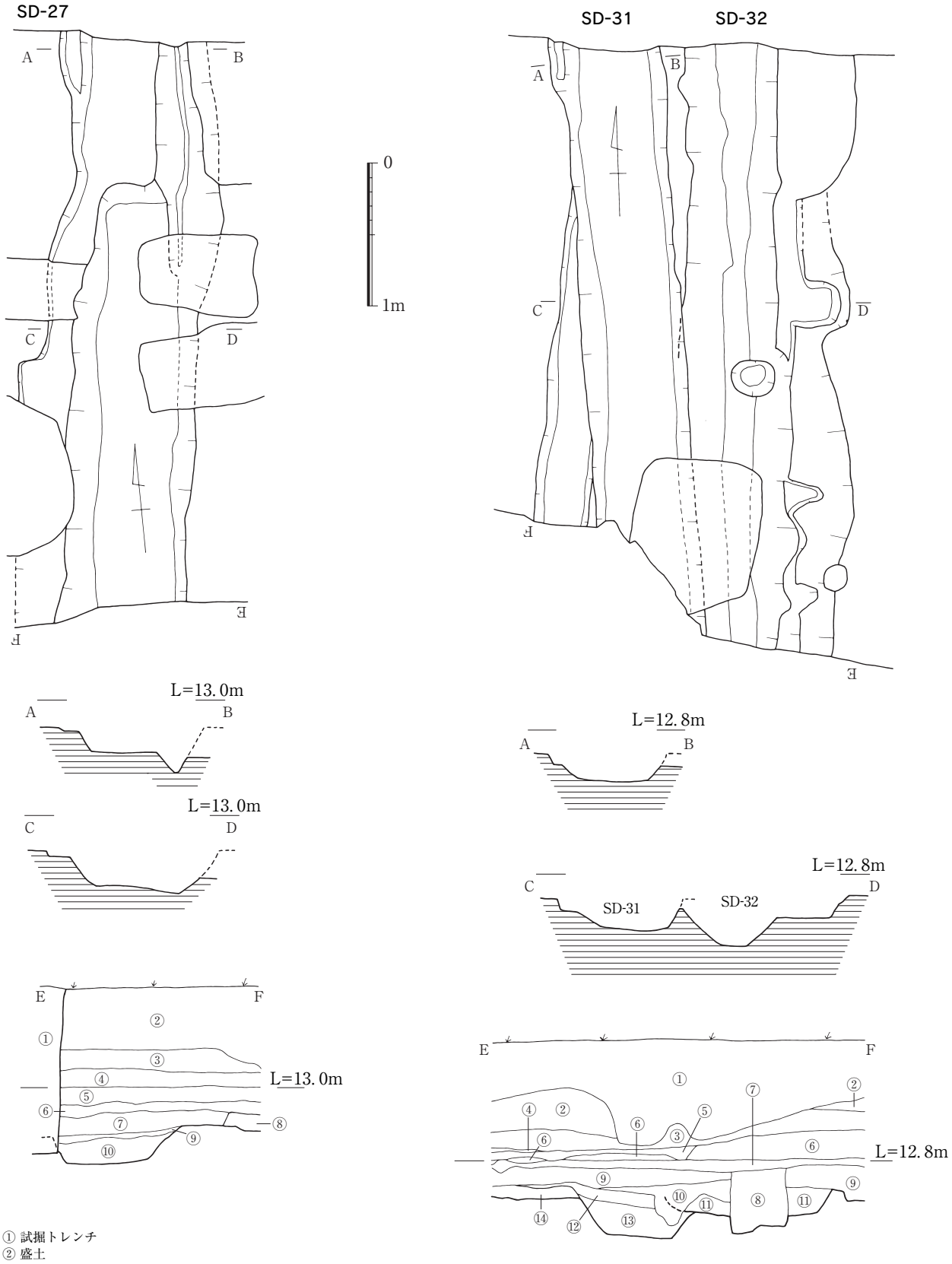


Fig.21　SD-15南壁土層（1/40）

伸展する。主軸方位は磁北から6°東偏する。溝の西辺は段状に落ち、下段の溝は北端からほぼ１ｍのあたりでくびれて凹形をなし、北側が横断面形「Ｖ」字状を呈する幅0.45ｍの細い溝、南側が逆台形状を呈する幅0.9ｍの溝となる。深さは0.3ｍで、南へ緩く下る。溝の細くなっている部分は開渠ないし暗渠の可能性があろう。

数点の土師器小片と瓦片が出土したが、図示できる土器はない。層位と遺構の切り合いから奈良時代の遺構と考えられる。



① 試掘トレンチ
② 盛土
③ 黒色砂質土（耕作土）
④ 灰褐色砂質土（床土）
⑤ 灰褐色砂質土
⑥ 暗灰褐色砂質土（**包含層ｃ**）
⑦ 灰褐色砂質土（黒褐色・黄褐色粘土粒含）
⑧ 灰褐色砂質土（**包含層ｃ**）
⑨ 黒褐色砂質土＋黄褐色粘土塊　**SD-27**
⑩ 黒褐色砂質土

① 盛土
② 灰黒色砂質土（耕作土）
③ 灰褐色砂質土（床土）
④ 灰褐色砂質土
⑤ 黄褐色砂質土（床土）
⑥ 灰褐色砂質土
⑦ 黄褐色砂質土（**包含層ｅ上層**）
⑧ SB-30柱穴
⑨ 灰褐色砂質土（**包含層ｅ**）
⑩ 灰色砂質土
⑪ 暗灰褐色砂質土（暗黄褐色粘質土塊含）**SD-31**
⑫ 灰褐色砂質土（黄褐色粘質土塊含）
⑬ 黒色粘質土（黄褐色砂質土～粘質土塊含）**SD-32**
⑭ 灰色～暗褐色砂質土

Fig.22　SD-27・31・32（1/40）

ＳＤ－３１　Fig.22、PL.15

Ｉ区SD-27の約３ｍ東側に検出した下層遺構である。SD-32を切り、掘立柱建物SB-30の柱穴に切られる。南北方向に直線的に伸びる溝で、横断面は逆台形状を呈し、幅0.7～0.9mで、長さ3.4mを確認したが、更に南北に伸びる。主軸方位は磁北から２°西偏する。深さは0.2mを測り、底面はわずかに南へ傾斜する。

数点の土師器と瓦が出土したが、図化可能な土器はない。遺構の切り合いから奈良時代に位置づけられるが、他の古代の溝とは主軸方位を異にする。

ＳＤ－３２　Fig.22、PL.15

SD-31の東に隣接する下層遺構である。SD-31、掘立柱建物SB-30の柱穴SP-1022、土坑SK-29に切られている。南北方向の溝で、計測可能な部分で幅0.48～0.52mを測る。横断面形は逆台形状を呈するが、東辺は一部が段状に落ちる。長さ2.1mを調査し、南北は調査区外へ伸展する。調査した範囲が狭く正確さに欠けるが、主軸方位は磁北から２°東偏と計測した。深さは0.3ｍ強で、底面は幅が狭く、南へ緩く下っている。

ＳＤ－３２出土土器　Fig.26

数点の須恵器、土師器と瓦が出土した。

14は須恵器坏蓋である。口縁端部は短く垂れ、断面は丸みを帯びた三角形を呈する。胎土に砂粒を僅かに含み、焼成は良好である。

奈良時代の遺構であろう。

ＳＤ－３９　Fig.23

Ｉ区南東部に位置する。整地層下に検出した下層遺構である。南北方向の溝状遺構で、約７ｍを調査した。南側は更に調査区外に伸びるが、北側は延長上に溝を確認できず、西へ折れるか、浅くなって消滅するかのいずれかであろう。主軸は磁北から６°東偏している。直線的な溝ではあるが平面プランはやや不整形をとり、幅0.78～1.56mである。横断面形は逆台形状を呈し、北側で深さ0.2m弱、南側は一段深くなり、南端で0.4mの深さとなる。底面にかなり勾配があることからみて、水流によって生じた抉れと考えられる。北側の溝底には浅い窪みが二つあるが、溝に伴うものかどうか不明である。なお、南端は調査時に一部掘り過ぎている。覆土は砂質土である。

須恵器、土師器、瓦が出土したが量は少なく、図化し得る土器はない。しかし、９世紀初頭の整地層下に検出した遺構であることや瓦の出土から奈良時代に位置づけられよう。

ＳＤ－６０　Fig.24、PL.14

Ｉ区北東部に検出した東西方向の溝である。ピット一つに切られるが、他の切り合いはない。砂質土～シルトからなる地山に掘り込まれており、度重なる降雨の流入と冠水により数カ所で遺構が崩壊し、東端の溝底では地山が溶け出した。長さ10.5mを確認したが、両端はそれぞれ調査区外に伸びている。直線的に掘られた溝で、主軸方位は磁北から82°西偏する。横断面形はおおよそ逆台形状を呈し、溝の上端で幅0.95～1.4m、下端で幅0.22～0.5m、深さ0.7～0.8mを測る。溝底は周辺地形の傾斜と同じく緩く東へ下っており、8.7m離れた東西両端の比高差は0.18mであるが、中央やや東寄りの部分が最も深く、西端とのレベル差0.21mを測る。下流側へ向かって幅が若干広がる形状を示す溝と言えよう。覆土は上層が粘質土、下層が砂質土で、最下層には砂・シルトの堆積が認められることか

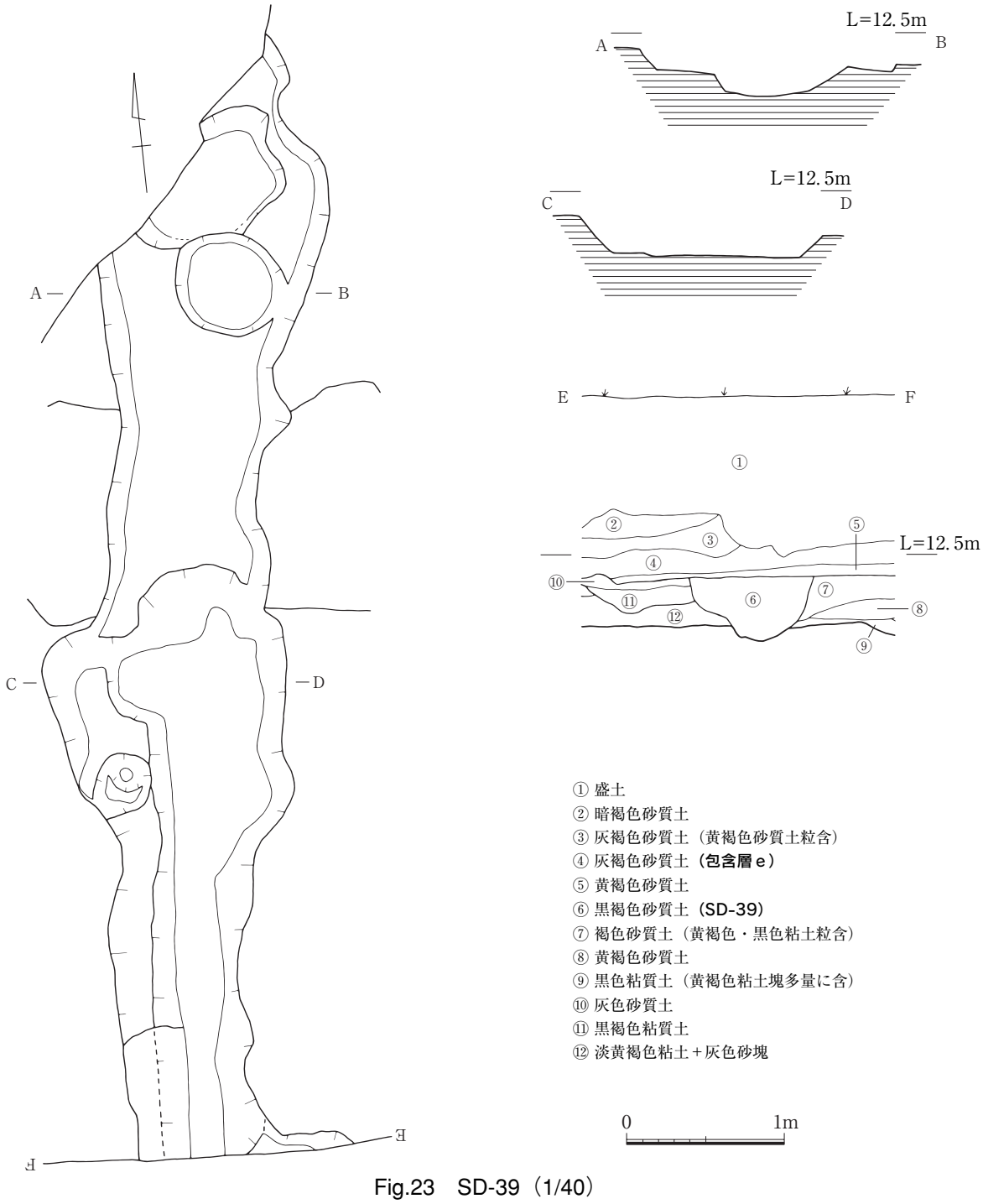


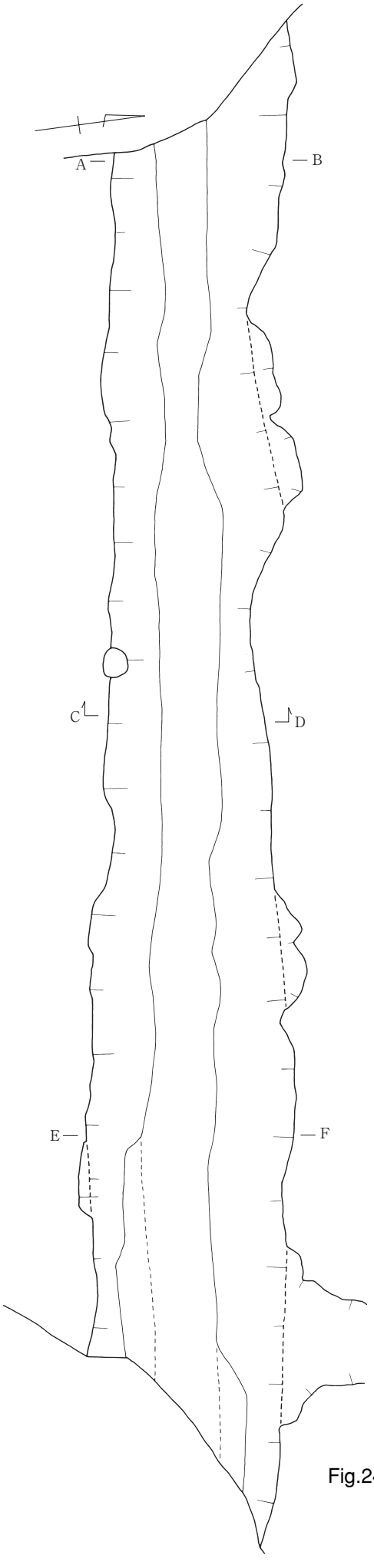
Fig.23　SD-39（1/40）

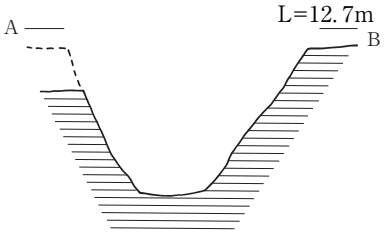
ら弱い水流のあったことを示す。ただし、現在でも湧水がある。

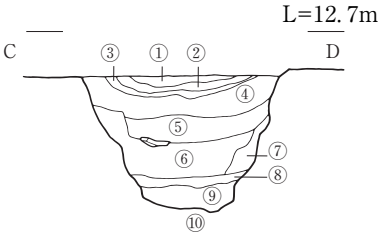
SD-60を真っ直ぐ東へ延長した位置にⅡ区で検出したSD-70が位置しており、これに連結する可能性が強い。逆に、西の延長上には溝が存在せず、かりに直角に折れるとすれば、Ⅰ区南辺で検出したSD-27かSD-32のいずれかに連結すると考えられる。この場合、この一連の溝が方形の区画を取り囲む可能性がでてくる。これらの溝の関係については、主軸方位や時期などを含めて、第三章のまとめで検討したい。

ＳＤ－６０出土土器　Fig.26、PL.20

須恵器、土師器、瓦が、合わせてコンテナ１箱ほど出土した。







① 暗褐色粘質土（黄褐色・黒色粘土塊含）
② 粗砂
③ 暗褐色粘質土（灰色シルト塊含）
④ 灰色砂質土（黄褐色粘土塊含）
⑤ 灰黒色砂質土（黄褐色粘土・灰色シルト塊含）
⑥ 灰黒色砂質土
⑦ 淡灰黒色砂質土（⑥塊含）
⑧ ⑥に近似（灰色砂含）
⑨ 灰色砂～微砂～シルト互層
⑩ 灰色砂質土（地山）

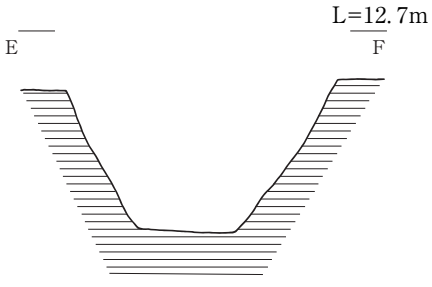


Fig.24　SD-60（1/40）

15は須恵器坏身で、安定の悪い平底から丸みをもって体部が立ち上がり、器高が高い。内底にナデを加える。外底はヘラ切り離しで、体部下半～底部外縁に回転ヘラ削りを施す。外底中央部がやや窪み、ヘラ切りの痕跡が残る。外底にはヘラ記号である二本の平行線を焼成前に刻み、焼成後にはやや縁よりに「寺」の一字を墨書している。墨痕は薄い。胎土に砂粒を僅かに含み、焼成はやや不良である。ほぼ完存し、器形が歪んでいるが口径15.5cm、器高5.7cmを実計測できる。16も須恵器坏身で、蓋受けの立ち上がりが短く内傾する。

17は土師器鉢の底部であろう。不安定な平底で、かなり厚手である。外面は刷毛目、内面は削り気味のヘラナデ、外底部は板状工具によるナデを施すが、いずれも粗い調整である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。18は土師器高台付坏で、高台は低く外方へ踏ん張る。器面が荒れて調整不明である。胎土は精良で、焼成良好である。高台径11.2cm。

以上の土器は、16を除き、８世紀前半～中頃に位置づけられよう。

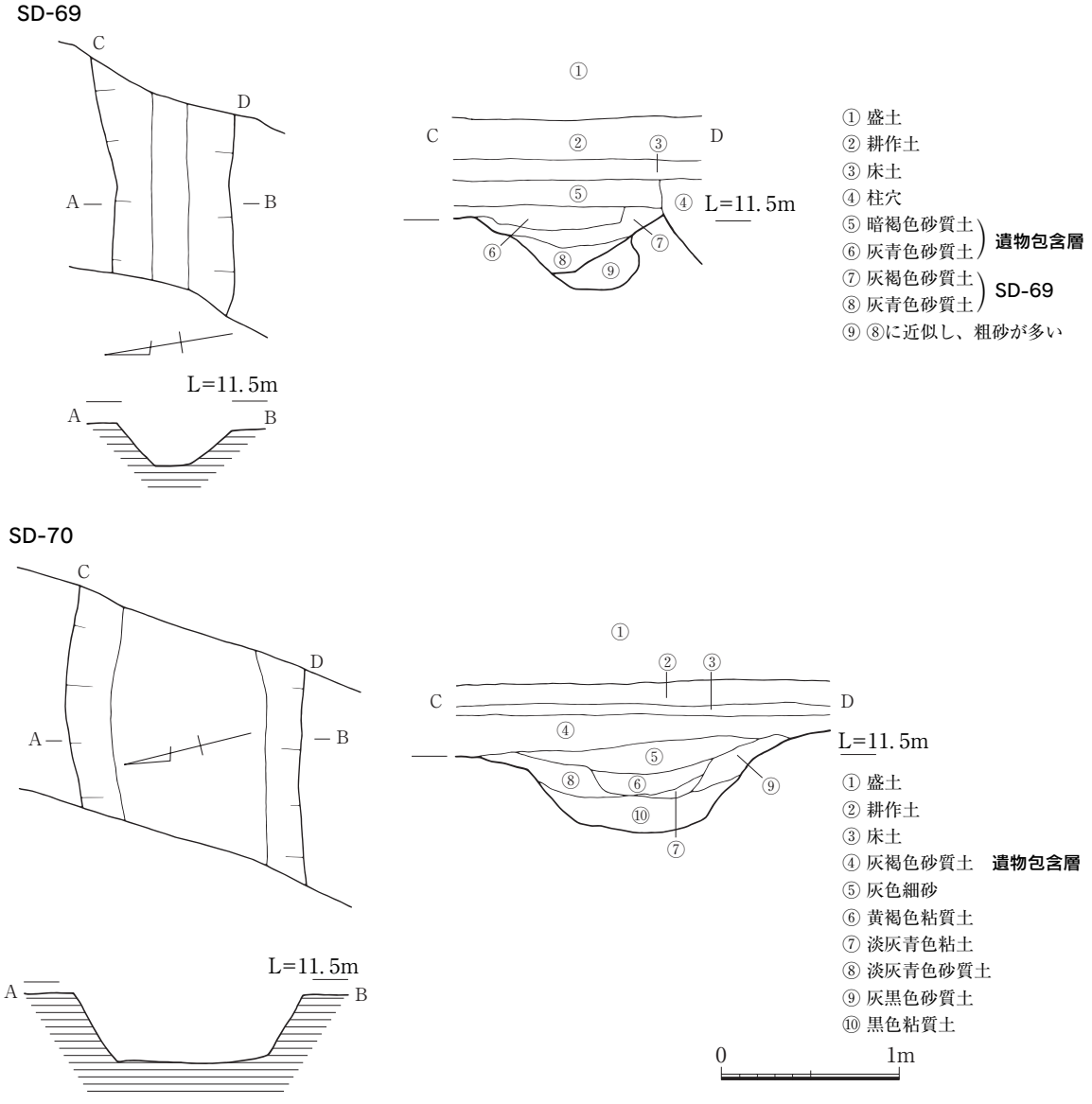


Fig.25　SD-69・70（1/40）

ＳＤ－６９　Fig.25、PL.15

Ⅱ区の中央やや南寄りに検出した。東西方向の溝で、長さ1.2mを調査したが、両端とも調査区外へ伸びる。狭い範囲での計測ながら、主軸方位は磁北から81°西偏する。横断面は逆台形状をなし、上端幅0.6～0.75m、下端幅0.2m、深さ0.3m前後である。土層断面をみると、北側が段状に落ちている。また、南側に抉れがあるが、ピット等の他の遺構であろう。溝底は幅が狭く、東へ緩く下っている。覆土は砂質土で、地山はシルトである。

ＳＤ－６９出土土器　Fig.26

出土遺物は図示した土器１点のみである。

19は須恵器坏蓋で、口縁端部が垂れ下がり、断面三角形を呈し、内面には明瞭な稜がある。胎土に砂粒を僅かに含み、焼成はやや不良である。

８世紀代の遺構か。

ＳＤ－７０　Fig.25、PL.15

Ⅱ区の南寄りに、SD-69と2.7mの間を置いて位置する。地山はシルトで、この溝より南側では基盤土が砂となり遺構が認められない。東西方向の溝で、両端とも調査区外へ伸びている。長さ1.25mを調査したに過ぎず、不確実ながら主軸方位は磁北から76°西に偏する。横断面形はおおよそ逆台形状を呈し、上端幅1.2～1.3m、下端幅0.8m前後で、深さ0.5mを測る。溝底は幅が広く、中央がやや窪み、東西方向の勾配はほとんどない。覆土は黒色粘質土で、澱んだ状況下で埋没したことを示している。土層断面をみると、中央に切り込んだような窪みが認められ、上層に細砂が堆積していることから、掘り直しを受けた可能性がある。

ＳＤ－７０出土土器　Fig.26、PL.20

須恵器・土師器と瓦が数点ずつ出土した。

20・21はともに須恵器坏蓋である。20は扁平な宝珠状鈕が付き、口縁端部は内傾気味に下方に折れるが内面の稜は丸みを持つ。天井部の内面にナデ、外面に回転ヘラ削りを加える。胎土に大粒の砂粒を僅かに含み、焼成はやや不良である。口径15.8cm、器高2.0cm。21は口縁端部が下方に垂れて断面三角形を呈し、内面に稜が入る。天井部の内面にナデ、外面に回転ヘラ削りを加える。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好である。内面全体に墨痕が良く残っている。転用硯として使用するために、天井部外面の宝珠状鈕を意図的に打ち欠いたものと考えられる。口径14.2cm。

８世紀前半～中頃の遺構とみるが、後半代まで下る可能性もある。

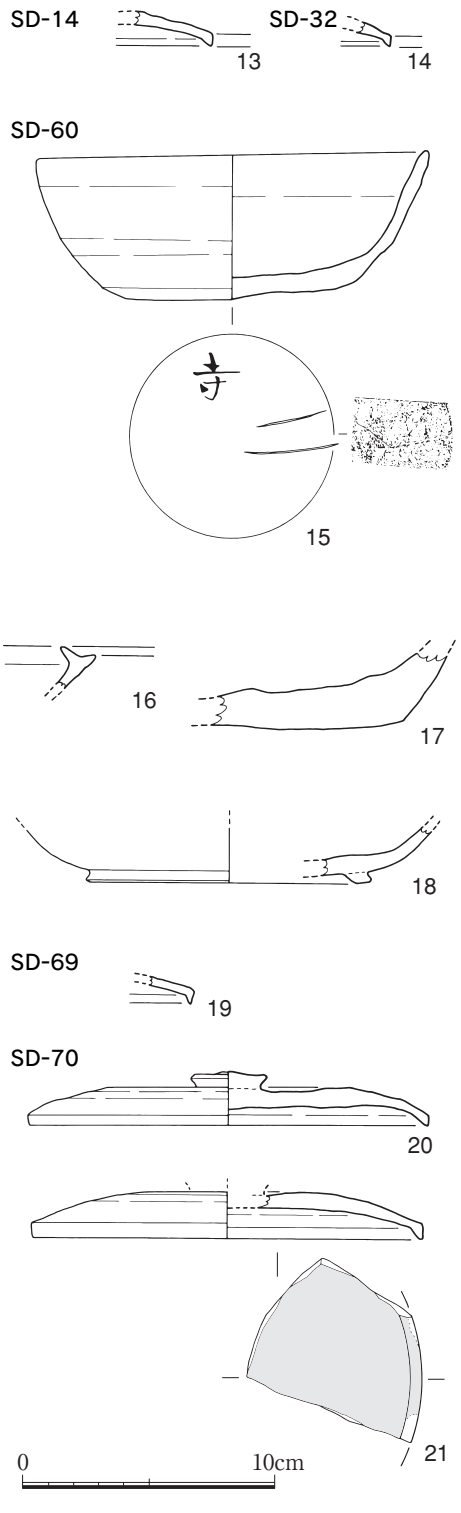


Fig.26　溝の出土土器（1/3）

（３）土坑

ＳＫ－０５　Fig.27

SK-05～09は後述の包含層aを除去した下面で検出した。SK-05はⅠ区西辺に位置する土坑で、県営アパートの基礎で北側が破壊されている。不整な隅丸長方形プランを呈し、東西に長い。長径1.84m、短径1.15m、深さ0.26mを測る。南西側は段状に掘り下げる。覆土は黒色砂質土である。

ＳＫ－０５出土土器　Fig.33、PL.20

須恵器、土師器、瓦が数点出土した。22～26は須恵器である。22～25は坏蓋である。22は内面に短い返りが付く。胎土に砂粒を僅かに含み、焼成は良好。23は口縁端部が短く垂直に折れ、断面は鋭利な三角形をなす。天井部の内面にナデ、外面に回転ヘラ削りを加える。胎土に砂粒を僅かに含み、焼成はやや不良。内面に墨痕が僅かに残っており、転用硯である。口径10.4cm、器高1.5㎝。24・25は口縁端部が鈍角に折れ下がり、断面は丸みを帯びた三角形を呈する。胎土は24が精良、25が砂粒を少量含み、焼成はともに良好。26は無高台坏身である。器高は低く、外底はヘラ切り離しのまま未調整。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好。27・28は土師器高台付坏である。高台は低く、断面三角形を呈する。摩滅が著しく調整は不明である。27は胎土に砂粒を僅かに含み、焼成は良好で、高台径10.8㎝。28は胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好、小片のため法量不明。９世紀初頭頃の土坑であろう。

ＳＫ－０６　Fig.27、PL.16

SK-05のすぐ南西側に検出した土坑である。いびつな隅丸長方形プランを呈し、長径0.7m、短径0.45m、深さ0.05mを測る。底面南寄りに径20cm、深6cmのピットがある。覆土は灰褐色砂質土。

ＳＫ－０６出土土器　Fig.33、PL.20

図示した土器のみが出土した。29は土師器把手付甕で、特異な器形をなす。底部は丸く、胴部が内傾して立ち、口縁は短く外反する。胴部下位に把手が付くが、先端を欠く。器面が荒れて調整不明だが、胴部外面には縦方向の指ナデが認められる。胎土に細砂粒を多量に含み、焼成はやや不良。底部を欠いているが、小形の甑か。口径12.2cm、器高8.5cm。

ＳＫ－０７　Fig.28、PL.16

SK-05のすぐ南側に位置する土坑である。径0.5～0.8mの不整形プランで極めて浅い。南側に径22cm、深さ12cmのピットがある。遺物が浮いており、本来包含層中に掘り込み面があったのであろう。覆土はSK-06に近似する。

ＳＫ－０７出土土器　Fig.33、PL.20

主に瓦が出土した。他に須恵器が数点ある。30は須恵器坏蓋で、器高は高めで、口縁端部は垂直に短く折れ、断面は丸味のある三角形である。天井部内面ナデ、外面回転ヘラ削りを加える。胎土に砂粒を僅かに含み、焼成は良好。内面に僅かに墨痕が残り、転用硯に用いる際に鈕を除去したのであろう。口径15.0cm。

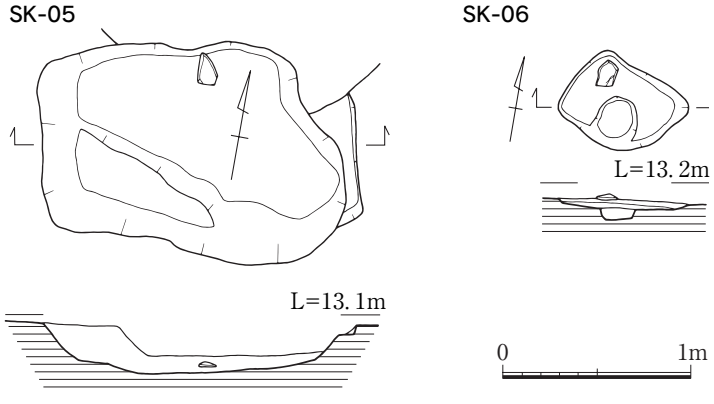


Fig.27　SK-05・06（1/40）

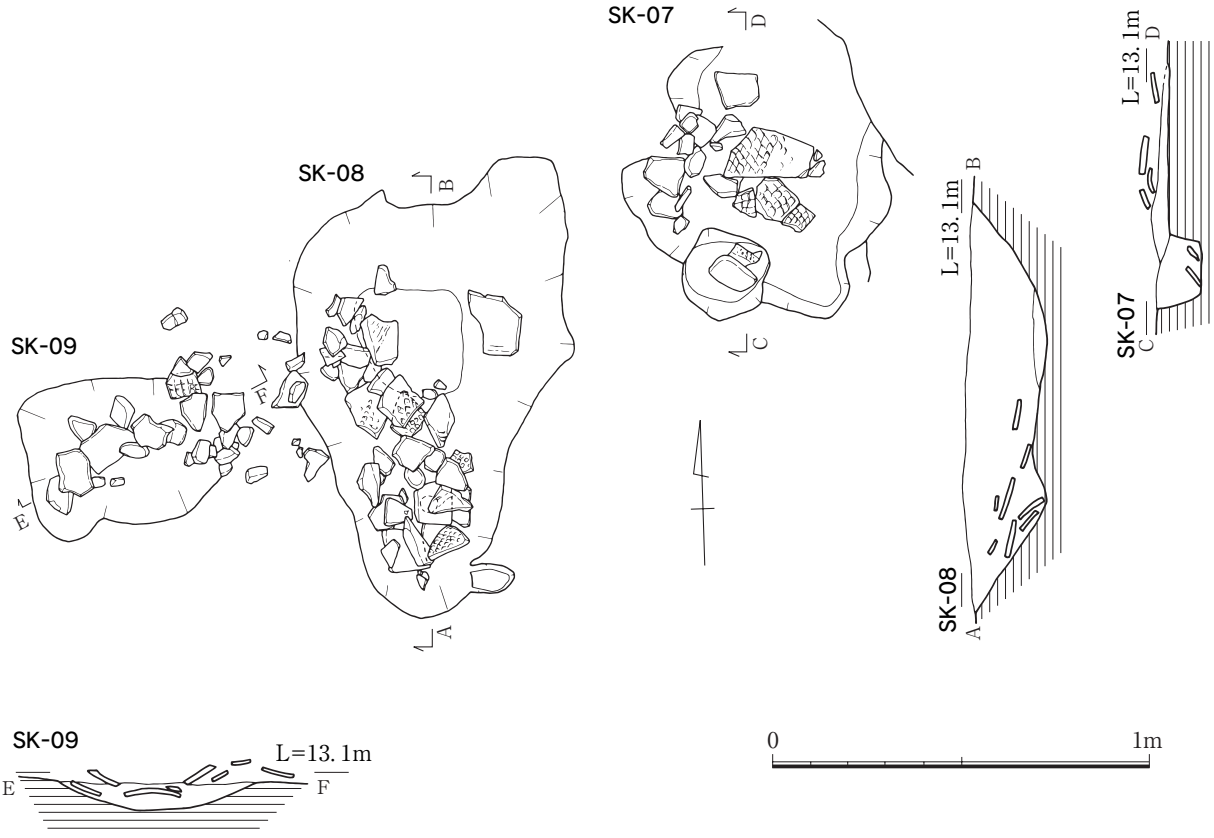


Fig.28　SK-07～09（1/20）

ＳＫ－０８　Fig.28、PL.16

SK-07の南西側に位置する。平面プランは南北に長い不整な楕円形を呈し、長径1.1m、短径0.7mを測る。断面形はほぼ逆台形状をなし、深さ0.2m。覆土は灰褐色砂質土である。出土遺物の大半は瓦の小片で、南西側から投げ入れた状況を示している。

ＳＫ－０８出土土器　Fig.33

瓦以外に須恵器、土師器が数片出土した。31・32は須恵器坏蓋の小片で、天井部はかなり扁平となろう。ともに天井部内面ナデ、外面回転ヘラ削りを加える。31は口縁端部が垂直に折れ、断面三角形を呈し、外面が沈線状に窪む。胎土に砂粒を僅かに含むが精良で、焼成はやや不良。外面に自然釉がかかる。32は口縁端部が短く折れ、断面三角形となる。胎土に砂粒をやや多めに含み、焼成良好。

ＳＫ－０９　Fig.28、PL.16

SK-08の西に隣接する。東西に長い不整楕円形プランで、長径0.6m、短径0.4m。断面形は浅皿状を呈し、深さ0.07m。覆土は灰褐色砂質土。遺物が浮いており、包含層中から掘り込まれた遺構か。出土遺物は瓦が大半を占め、他に須恵器、土師器片が数点あるが図示できるものはない。

ＳＫ－１０　Fig.29、PL.17

Ⅰ区南西部に位置する。北は調査区外に伸び、東は攪乱坑に破壊される。現況で平面プランは隅丸方形を呈し、東西長3.3m、深さ0.2m。覆土は暗褐色砂質土で、上層遺構である。出土遺物は瓦が大半を占めており、他に須恵器、土師器片があるが図示できる土器はない。

ＳＫ－１６　Fig.29

SK-10の東側に検出した。北側が調査区壁にかかり、東西を攪乱溝に切られる。現況で隅丸方形プランをなすが全容不明。深さ0.7m。覆土はSK-10と同じ暗褐色砂質土で、上層遺構である。

ＳＫ－１６出土土器　Fig.33

土師器、瓦が十数点出土した。33は土師器坏である。底部ヘラ切り離しで、体部との境は比較的シャープである。摩滅のため調整は不明。胎土に砂粒を少量含むが精良で、焼成は良好。

ＳＫ－１７　Fig.29

SK-16の２m東に位置する。北は調査区壁にかかり、南は攪乱溝に切られるが、隅丸長方形プランとなろう。長径2.5m、短径1.5m以上。断面形は浅い逆台形状をなし、深さ0.1m前後。底面はほぼ平坦で、中央北寄りに不整方形の浅い窪みがある。覆土は灰褐色砂質土で、上層遺構である。

ＳＫ－１７出土土器　Fig.33

須恵器、土師器、瓦が出土した。34～38は土師器である。34～36は坏で、いずれも油煙が付着しており灯明皿である。34は底部ヘラ切り離しで、体部との境が明瞭である。摩滅して調整は不明。胎土に大粒の砂粒を含み、焼成は良好。口径13.2cm、器高3.0cm。35は胎土に大粒の砂粒を含み、焼成はやや不良。口径12.6cm。36は摩滅して調整は不明。胎土に細砂粒を含み、焼成はやや不良。口径13.2cm。37も坏か。底部ヘラ切り離しで、調整不明、胎土に細砂粒を含み、焼成は不良。38は椀で、著しく摩滅する。高台径は不明だが、小さめである。胎土に砂粒を少量含み、焼成はやや不良。

９世紀初頭頃の土師器坏が多いが、SK-19出土遺物との接合資料（Fig.34－46）や38から、遺構の時期は９世紀中頃から後半に下ろう。

ＳＫ－１８　Fig.29

SK-17の南に位置する。北を攪乱溝に破壊される。東西に長い隅丸長方形プランで、長径1.04m、短径0.75m。断面逆台形を呈し、深さ0.15m。底面は平坦で、北東隅が浅く窪む。数点の須恵器・土師器小片と、十数点の瓦片が出土したが、図示できる土器はない。

ＳＫ－１９　Fig.29、PL.17

SK-18の南に隣接し、これに切られ、北西を攪乱坑に破壊される。検出時は一つの土坑とみたが、結果として西の小土坑と、東の大きめの土坑に分かれた。いずれも南北に長い土坑とみられるが調査区壁にかかり長径は不明。西土坑は短径0.6m、深さ0.1m。東土坑は短径2.0m、深さ0.1m。断面浅皿形をなし、西土坑は底面が東へ傾斜する。覆土は灰褐色砂質土で、炭化物を含む。上層遺構である。

ＳＫ－１９出土土器　Fig.34、PL.21

須恵器、土師器、瓦がコンテナ１箱分出土した。須恵器は数点あるが小片で図示できない。39～54は土師器坏である。底部は全てヘラ切り離しで、体部との境は丸味を帯びる。いずれも摩滅して器面の残りが悪い。39～41、45～47、49は内面に油煙が付着しており、灯明皿に用いている。51は外底に墨痕らしきものがあるが判然としない。胎土は40～42・44が精良、45が砂粒を多量に含み、他は砂粒を少量含む。焼成は39が不良、43・44・46・51～54がやや不良、他は良好である。法量の分かる39～47の平均値は、口径11.76cm、器高3.36cmである。55は黒色土器Ａ類の高台付坏である。断面三角形の低い高台を貼り付ける。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好。高台径8.4cm。

９世紀中頃～後半の土坑であろう。

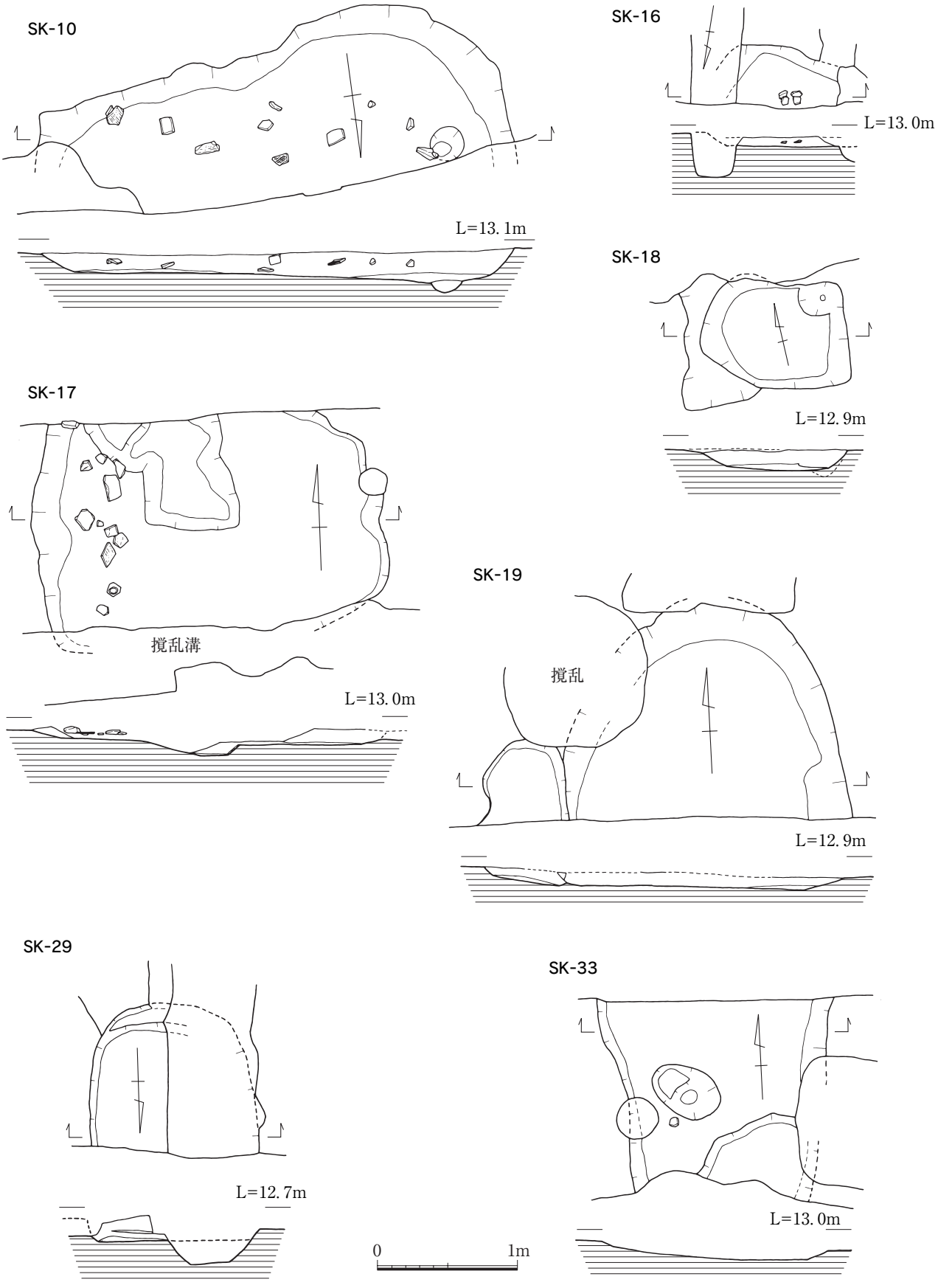


Fig.29　SK-10・16～19・29・33（1/40）

ＳＫ－２９　Fig.29

Ｉ区南辺の中央部に検出した。SD-32の上層に位置しこれを切るが、相次ぐ降雨のため遺構が崩壊した。北側が調査区壁にかかるが、隅丸方形プランとみられ、径1.18m、深さ0.18m。

ＳＫ－２９出土土器　Fig.34

須恵器、土師器、瓦が数点ずつ出土した。図示し得る土器は56の土師器甕のみである。球形の胴部に短く外反する口縁が付く。内面はヘラ削りを施すが、他は調整不明。胎土に粗砂粒を多量に含み、焼成は良好。口径17.1cm。古墳時代後期の土器だが、遺構は９世紀以降に下ろう。

ＳＫ－３３　Fig.29

SK-17のすぐ東側に位置する。北は調査区壁にかかり、南は攪乱溝に破壊され、東は掘立柱建物SB-30の柱穴SP-1019に切られる。東西長1.68m、深さ0.1m。底面は東に傾斜する。覆土は灰褐色砂質土で、上層遺構である。土師器、瓦が数点出土したが、図示できる土器はない。

ＳＫ－３５　Fig.30、PL.18

Ｉ区南東隅に検出した。一部を調査したのみで、平面プランは不明。東側は底面が一段下がっており、二つの遺構の切り合いか。深さは西側が0.25m、東側が0.42m。覆土は黒褐色粘質土で、下層遺構である。須恵器甕片が数点出土したが図化できない。

ＳＫ－４１　Fig.30

SK-35の西約２mに位置する。東側をピットに切られる。東西に長い楕円形プランで、長径0.97m、短径0.65m、深さ0.05m。上層遺構である。土師器片が数点出土したが図示できない。

ＳＫ－４２　Fig.30、PL.18

SK-41の北に隣接する。平面形は南に膨れた卵形を呈する。長径1.14m、短径0.9m、深さ0.2m。断面逆台形状で、中央がやや深い。覆土は灰褐色砂質土を主体としており、上層遺構である。土師器片、瓦が数点ずつ出土したが、図示できる土器はない。

ＳＫ－４３　Fig.30、PL.18

SK-42の北3.5mに位置する。隅丸長方形プランで、長径0.9m、短径0.53m、深さ0.55mを測る。断面逆台形状を呈するが、北西側は段をなして落ちる。覆土は灰褐色砂質土を主体としており、上層遺構である。土坑の中層から土師器皿、下層から瓦片が出土した。

ＳＫ－４３出土土器　Fig.34、PL.21

土師器、瓦が数点ずつ出土した。57は土師器皿である。底部は回転ヘラ削りを加えるが、一部にヘラ切り離し痕を残す。器面が荒れて他の調整は不明。赤褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好。ほぼ完存し、口径17.0cm、器高1.9cm、底径13.2cmを測る。８世紀後半～末の土器だが、覆土からみて９世紀に下る遺構であろう。

ＳＫ－４４　Fig.30、PL.18

SK-43の北に隣接する土坑である。不整な隅丸長方形プランで、東西に長い。長径1.4m、短径1.1m、深さ0.45m。断面逆台形状で、底面は平坦である。覆土は灰褐色砂質土で、上層遺構である。

ＳＫ－４４出土土器　Fig.34

須恵器、土師器、瓦が十数点出土した。58は須恵器坏蓋である。天井部と口縁部は明瞭な境をもたず、口縁端部は丸い。天井部外面の1/2の範囲に成形時と逆回転のヘラ削りを加える。天井部中央にヘラ記号の一部がみえる。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好。口径12.6cm、器高3.9cm。古墳時代後期の須恵器はこれ１点のみで、他は古代の遺物で占められる。

ＳＫ－４５　Fig.30、PL.18

SK-44の西側に1.3m離れて検出した。東西に長い隅丸長方形プランで、長径1.7m、短径1.5m、深さ

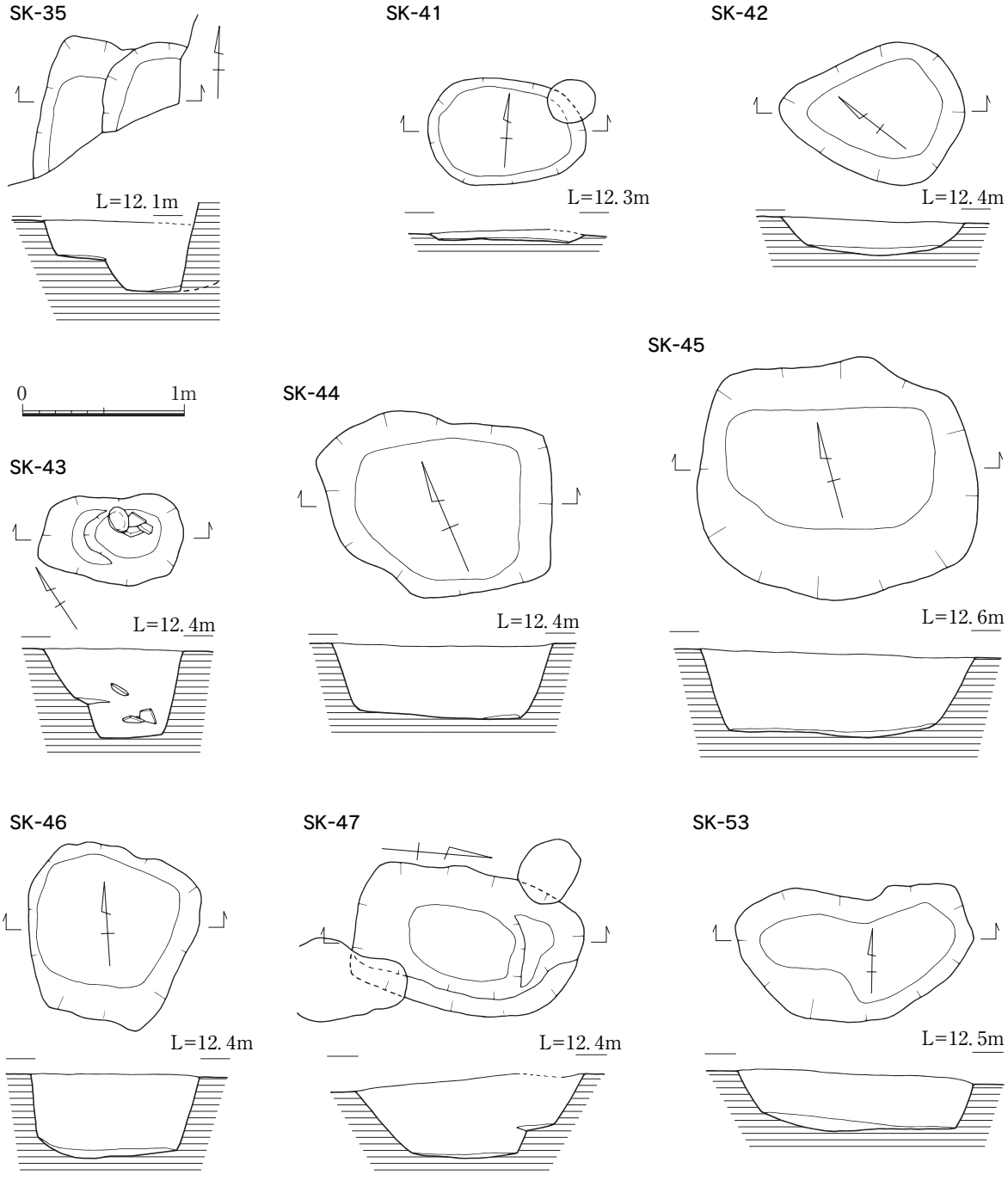


Fig.30　SK-35・41～47・53（1/40）

0.5m。断面逆台形で、底面は平坦。覆土は暗褐色砂質土で上層遺構である。瓦が数点出土した。

ＳＫ－４６ Fig.30、PL.18

SK-44の東側１m弱に位置する。平面プランはおおよそ隅丸方形で、径1.05m、深さ0.5mである。断面逆台形状をなし、底面は西側にやや深い。覆土は灰褐色砂質土主体で、上層遺構である。土師器片、瓦が数点ずつ出土したが、図示できるものはない。

ＳＫ－４７ Fig.30、PL.18

SK-46の南0.5mに位置する。攪乱坑に２ヶ所を破壊されている。南北に長い隅丸長方形プランを呈し、長径1.4m、短径0.9m、深さ0.5m。断面逆台形状となるが、北側では中位に小さいテラスを持つ。灰褐色砂質土を主体とする覆土であることから、上層遺構である。

ＳＫ－４７出土土器 Fig.34

須恵器、土師器、瓦が数点出土した。59は須恵器坏蓋で、口縁端部は短く内傾して折れ、断面三角形をなすが内面の稜はあまい。天井部は平坦で、外面はヘラ切り離しのまま未調整。胎土に僅かな砂粒と黒色粒子を含み、焼成はやや不良。口径13.0cm、器高1.7cm。９世紀初頭頃の遺構であろう。

ＳＫ－５３ Fig.30

Ｉ区東辺部のSB-50の北隣に位置する。不整な楕円形プランで、東西に長い。長径1.46m、短径0.77m、深さ0.35m。底面はほぼ平らである。土師器片が数点出土したが、図示できるものはない。

ＳＫ－５４ Fig.31

Ｉ区東辺部中央付近に位置し、SB-50と重複する。試掘トレンチで上部を削られている。東西に長い隅丸長方形プランを呈し、長径1.1m、短径0.94m、深さ0.45mを測る。断面逆台形状をなし、底面は平坦である。覆土はSB-50と同様、黒褐色粘質土と灰褐色シルトの混在土で、下層遺構である。

ＳＫ－５４出土土器 Fig.34、PL.21

須恵器片のみ数点出土した。60は須恵器坏蓋である。天井部外面はヘラ切り離しのまま未調整で、ヘラ記号がある。内面はナデを加える。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好である。

ＳＫ－５５ Fig.31、PL.18

掘立柱建物SB-50の北西隅に重複し、これを切る。西側が一部調査区壁にかかり、北辺は土坑SK-62と切り合うが先後関係は不明。２×２m前後のやや歪んだ隅丸方形プランを呈する。断面逆台形状をなし、深さ0.4mで平坦面をつくり、中央に円形の浅い窪みを掘る。窪みは径1.02～1.15m、深さ0.1m強で、瓦片がまとまって出土した。覆土はSB-50柱穴と近似しており、下層遺構である。

ＳＫ－５５出土土器 Fig.34、PL.21

須恵器、土師器、瓦がコンテナ１箱分出土した。61～64は須恵器である。61・62は無高台坏で、いずれも底部ヘラ切り離しである。体部と底部との境は明瞭である。ともに胎土に砂粒を僅かに含み、焼成は良好。61は口径11.9cm、器高2.8cm、62は口径14.2cm、器高3.3cm。63・64は皿で、いずれも外底はヘラ切り離しのまま未調整である。ともに胎土に砂粒を少量含み、焼成は63がやや不良、64は良好。63は口径19.6cm、器高2.8cm。65は土師器甕で、外面にハケ目、内面にヘラ削りを施す。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良。９世紀初頭頃の土坑であろう。

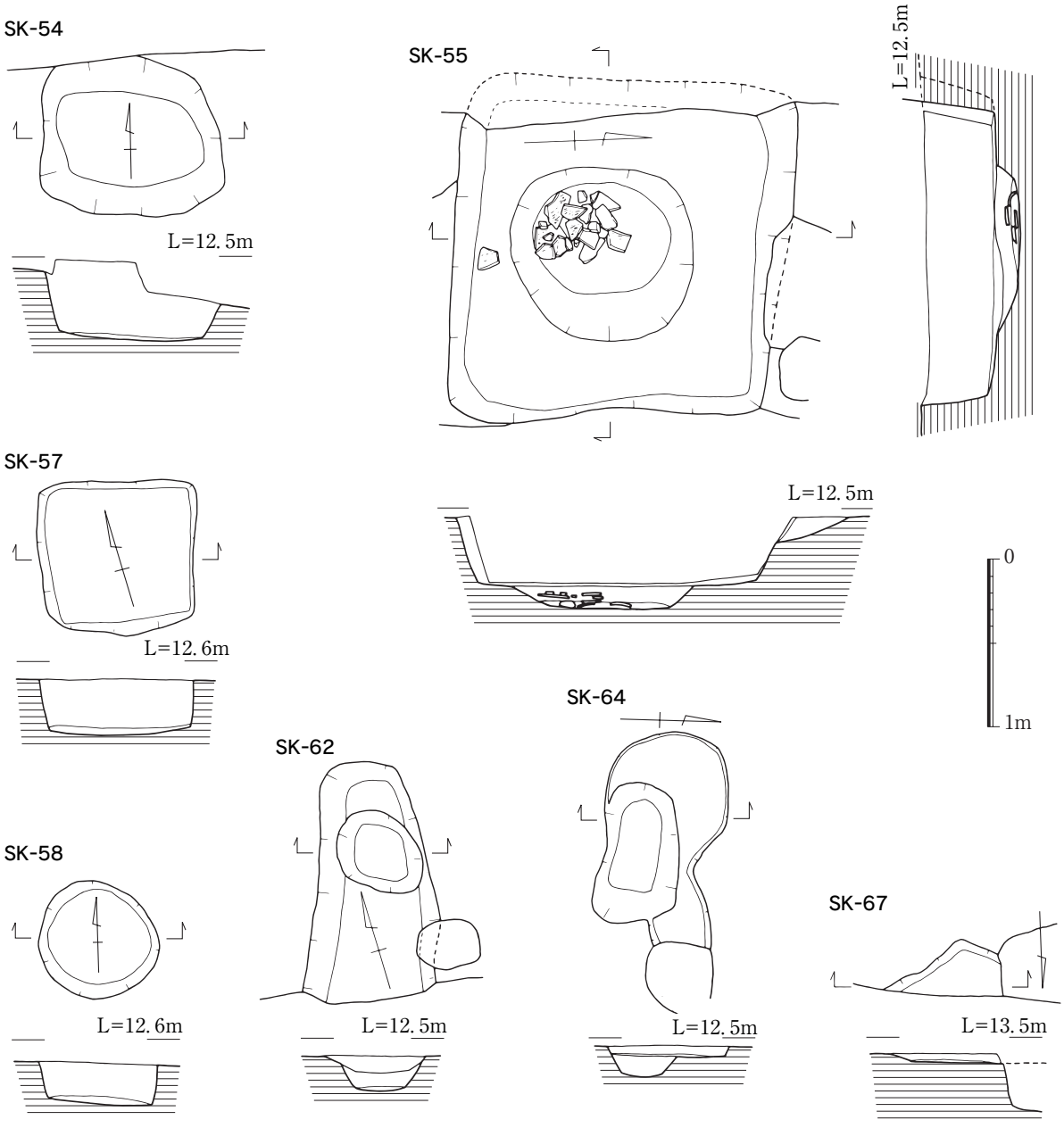


Fig.31　SK-54・55・57・58・62・64・67（1/40）

ＳＫ－５７　Fig.31

Ｉ区北東隅の掘立柱建物SB-65の南約１mに検出した。平面プランは北側が少し開くがほぼ正方形をなし、径0.88～0.93m、深さ0.34mを測る。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦である。覆土は灰褐色砂質土を主体としており、上層遺構である。弥生土器、土師器、瓦が数点出土したが、図示できる土器はない。

ＳＫ－５８　Fig.31

SK-57の東に2.5mを置いて検出した。円形プランで、径0.67～0.71m、深さ0.25m。円筒状に掘り下げており、底面は平坦である。覆土は黒褐色粘質土で、下層遺構である。土師器片が数点出土したが、図示し得るものはない。

ＳＫ－６１　Fig.32、PL.19

Ⅰ区北東隅の掘立柱建物SB-65の西にやや離れて位置する。北は調査区壁にかかり、中央を攪乱溝が貫く。掘り下げ後、土層観察により二つの土坑の切り合いと判明した。西側土坑が新しい。ともに隅丸方形プランとみられるが、西側が南北長2.5mである以外は規模不明。深さは西側が0.27m、東側が0.35m。覆土には瓦片を主体とする遺物に混じって炭化物が多量に含まれていた。

ＳＫ－６１出土土器　Fig.34、PL.21

コンテナ４箱の出土遺物の大半は瓦で、他に須恵器、土師器が少量出土した。66は土師器小皿である。底部ヘラ切り離しで、器面が摩滅して調整は不明。胎土に砂粒を少量含み、焼成良好。内底中央

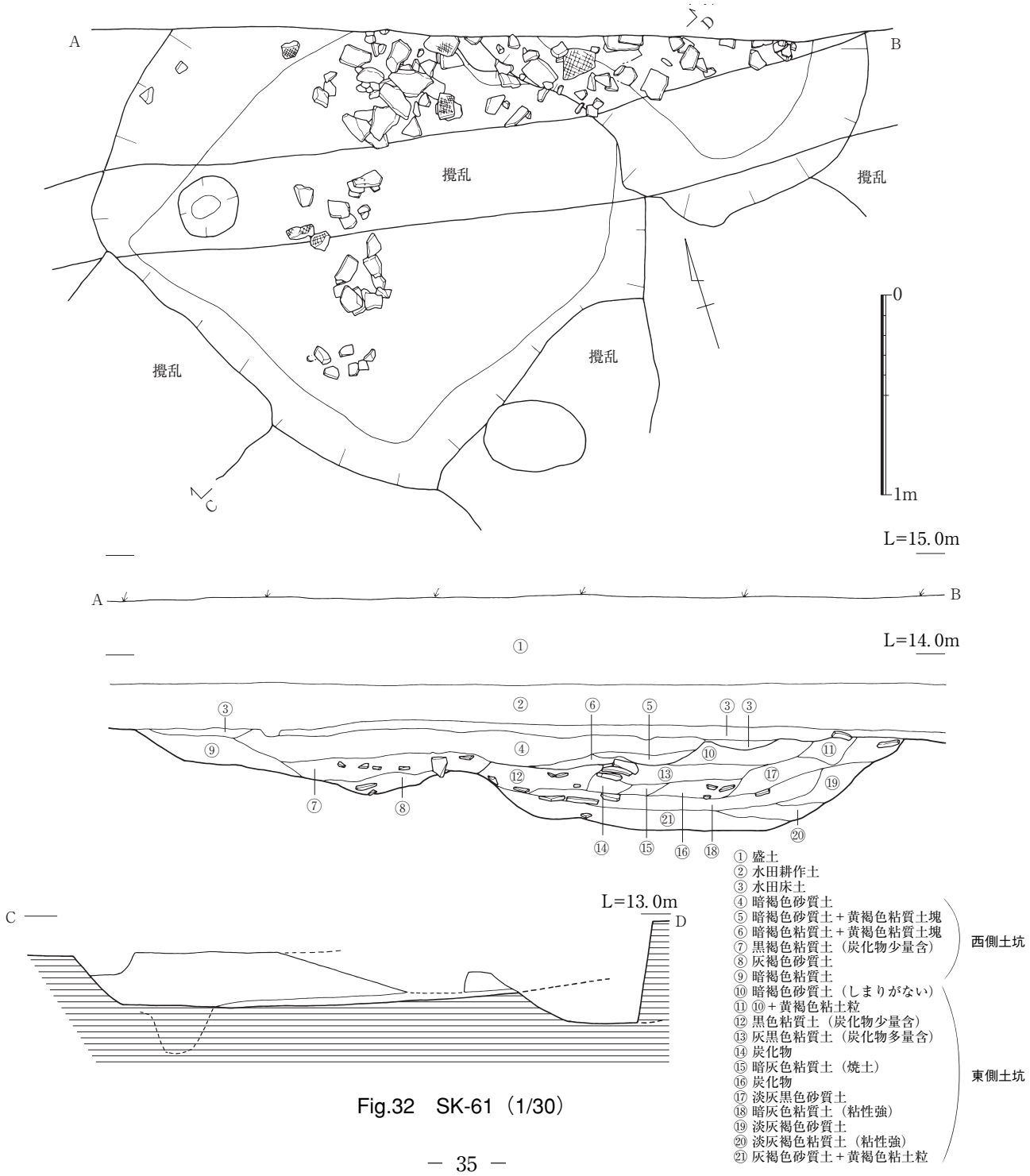


Fig.32　SK-61（1/30）

に油煙が付着しており灯明皿である。口径10.0cm、器高1.1cm。11世紀初頭前後か。

ＳＫ－６２　Fig.31

SK-55の北に隣接し一部重複するが先後関係は把握できなかった。南北に長い楕円形プランで、長径1.43m以上、短径0.78m、深さ0.1m。横断面形は逆台形状をなす。中央に浅い円形のピットがあり、径0.45～0.57m、深さ0.1m。覆土はSK-55に極めて近似する。瓦片が数点出土した。

ＳＫ－６４　Fig.31

掘立柱建物SB-65の南東に検出した。浅い窪みの南に寄せて楕円形プランの土坑を掘る。窪みは長径1.25m以上、短径0.7m、深さ0.05m、土坑は長径0.85m、深さ0.13m。覆土は黒褐色粘質土で下層遺構である。土師器片が数点出土した。

ＳＫ－６７　Fig.31

Ｉ区北辺部のほぼ中央に位置する。削平のため残りが悪く、調査区壁や攪乱坑に阻まれて極く一部を調査できたのみ。平面プランは不明で、深さ0.05m。瓦片のみが十数点出土した。

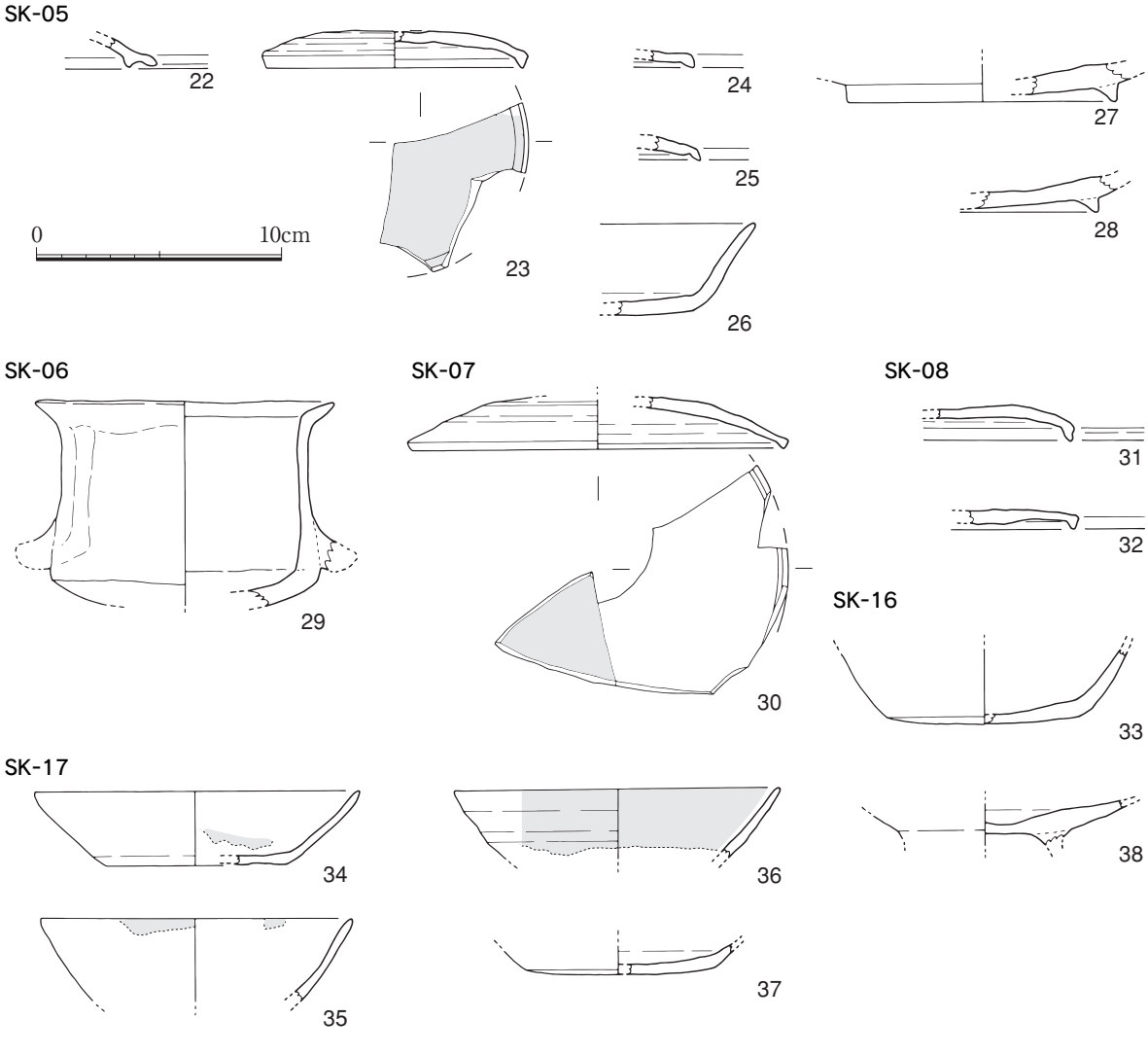


Fig.33　土坑の出土土器Ｉ（1/3）

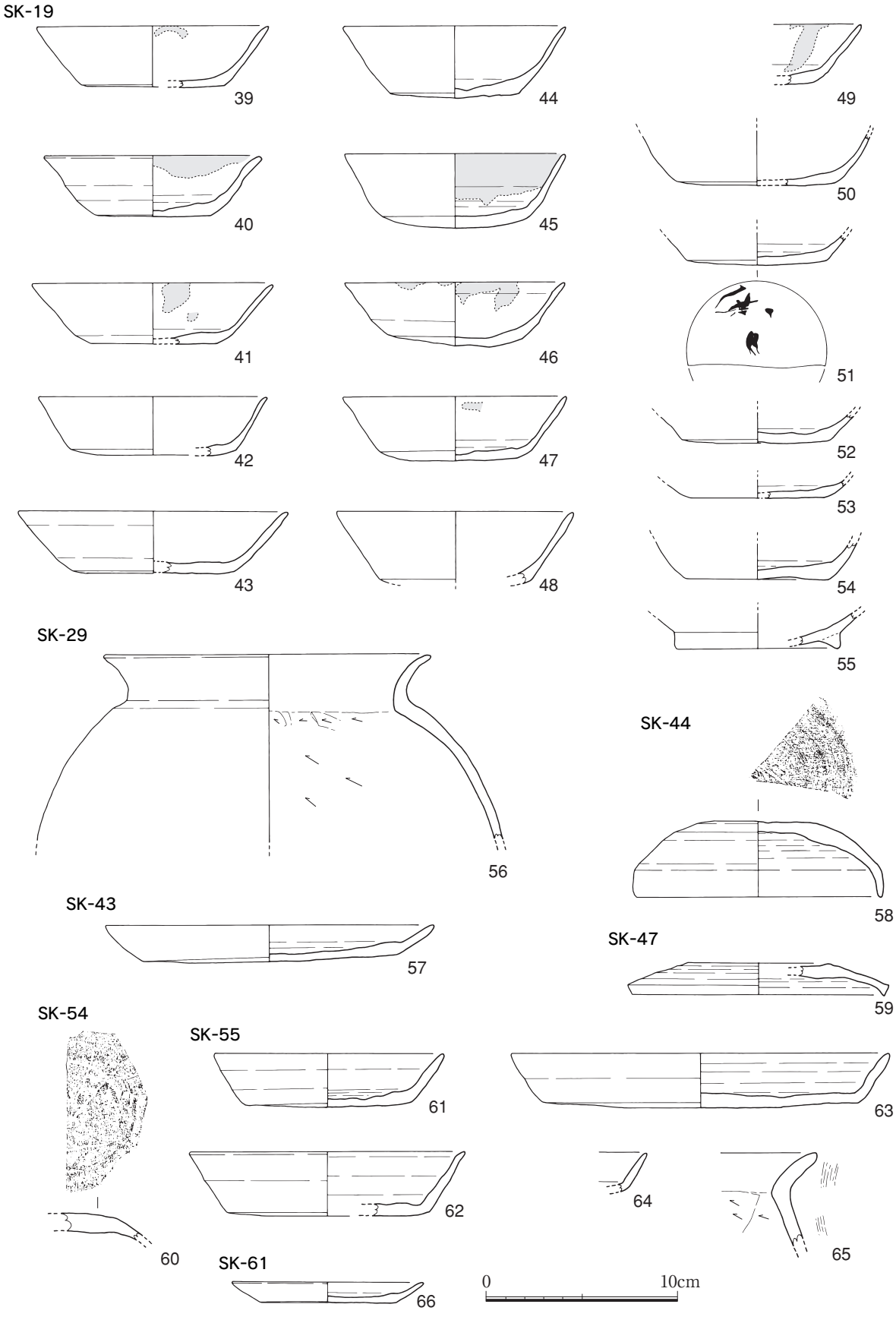


Fig.34　土坑の出土土器Ⅱ（1/3）

6．その他の出土遺物

（1）報告から漏れた遺構の出土土器　Fig.35、PL.22

67～70は須恵器である。67・68は坏蓋である。67は口縁端部がやや外方へ折れ、断面は丸味を帯びる。胎土に砂粒を僅かに含み、焼成良好。小片のため法量は不正確。68は鈕の痕跡があり、天井部外面に回転ヘラ削り、内面にナデを加える。胎土に砂粒を少量含み、焼成はやや不良。69は有高台坏で、高台は低く底部のやや内寄りに貼り付け、底部と体部との境は明瞭である。高台周辺は横ナデ、内底はナデ調整を加える。胎土に細砂粒を多量に含み、焼成はやや不良。口径13.4cm。70は坏身の口縁部片で、胎土は精良、焼成良好、口径11.6cm。

71～74は土師器である。71は坏で、底部ヘラ切り離しで体部との境は丸味を持つ。摩滅しているが、内外面に油煙が残る。胎土に砂粒・カクセン石を少量含み、焼成はやや不良。口径12.4cm。72は有高台坏で、高台は細く高い。胎土に砂粒を少量含むが精良で、焼成は不良。73は皿もしくは坏の高台部で、高台は低い。胎土に砂粒・雲母粒を僅かに含むが精良で、焼成良好。74は土師器甕である。外面に刷毛目、内面に刷毛目とヘラ削りを施す。胎土に砂粒・雲母粒を少量含み、焼成は良好。

75は中国産白磁の碗もしくは皿で、精良な淡灰白色の胎土に僅かに青味を帯びた透明釉がかかる。宋代の製品であろう。SK-28出土。SK-28は降雨により崩壊したが、唯一の中世遺構である。

（2）包含層・整地層の出土土器

開田時の削平や県営アパートの建設・解体などによる破壊を免れたⅠ区南半部分では、古代の遺物包含層が残っていた。これらはFig.36のように攪乱や試掘トレンチを境にしてａ～ｅに区分けして遺物を取り上げた。うち、ｄは自然埋没谷SD-15と古墳時代前期の溝SD-01上面の窪みを９世紀初頭頃に埋めた地業跡とみられ、その上をｃが覆う。ｅはⅠ区南辺中央以東の傾斜面に堆積するが、掘立柱建物SB-30周辺では複数の薄い層からなり、整地層と思われる。東端は削平されている。うちｅの上

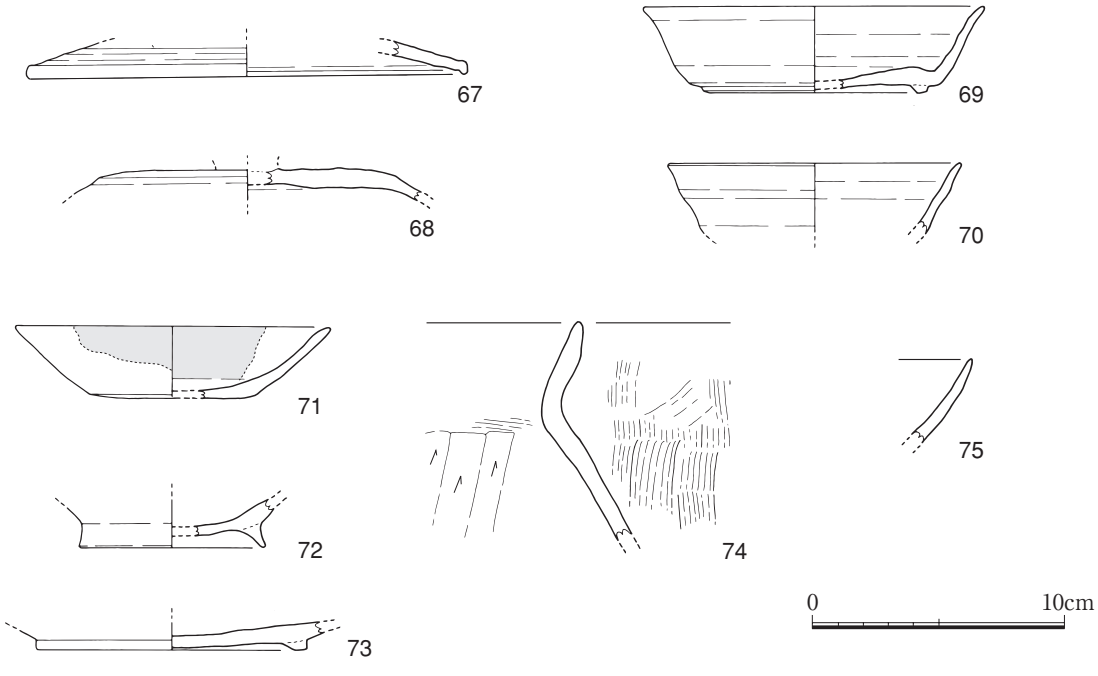


Fig.35　その他の遺構出土土器（1/3）

層とｃからは陶磁器などの中世遺物が数点出土しており、中世に水田化される際に生じた層と考えられる。中世の遺構としては土坑SK-28があるが、ｅ上層がこれに切られ、ｃがこれに被ることから、11世紀後半～12世紀前半の前後に形成された層であろう。

包含層ａ出土土器　Fig.37、PL.22

土師器、須恵器、瓦がコンテナ１箱分出土した。８世紀代の遺物が主体を占める。

76～80は須恵器である。76～78は坏蓋で、いずれも天井部に回転ヘラ削り、内面にナデを施す。76は天井部が平坦で、口縁端部は鈍角気味に折れる。内面にウルシ状の塗膜が付着する。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好。口径11.2cm。77は扁平な器形で、口縁端部は垂直に折れる。小片のため法量は正確ではない。胎土に大粒の砂粒を僅かに含み、焼成は良好。78は口縁端部が短く垂直に折れ、断面三角形を呈する。胎土に砂粒を僅かに含み、焼成は良好。79・80は有高台坏で、高台は低く断面方形をなし底部端に付く。底部はヘラ切り離しのまま未調整で、高台周辺のみ横ナデする。ともに胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好。81は土師器坏である。外面下半から底部に回転ヘラ削りを施すが、他は調整不明。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好。口径14.8cm。

包含層ｂ出土土器　Fig.37

土師器、須恵器、瓦がコンテナ半箱分出土し、他に青磁小片一点を含む。

82は須恵器坏蓋で、口縁端部は短く垂直に折れる。天井部外面に回転ヘラ削りを施す。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好。83は須恵器坏身で、胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好。口径13.4cm。

包含層ｃ出土土器　Fig.37、PL.22

須恵器、土師器、瓦、中国産陶磁器がコンテナ５箱分出土した。数点の中世陶磁器を含む。

84・85は須恵器坏蓋で、天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデを施す。84は器高が高めで、退化した扁平な鈕が付く。口縁端部は短く折れ、断面三角形を呈し内面に稜を有する。口径15.4cm。85は口縁端部が長めに折れる。内面に一部墨痕が残っており、転用硯である。口径18.4cm。

86～89は土師器である。86・87は坏で、底部ヘラ切り離しである。ともに内外面に油煙が付着する。

Fig.36　包含層・整地層の範囲（1/500）

86は胎土に砂粒・雲母粒を少量含むが精良で、焼成は良好。口径12.4cm。87は胎土に砂粒を少量含み、焼成はやや不良で、口径11.8cm。88は小壷で、外底縁辺部にヘラ削りを加えるが、摩滅のため他の調整は不明。胎土に粗砂粒を多量に含み、焼成は良好。口径5.2cm。89は高坏の坏部か。摩滅して調整不明。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好。口径22.7cm。

90・91は越州窯系青磁である。90は円盤状高台を有する粗製品の碗で、灰白色の硬陶質素地に淡青緑色不透明釉がかかる。体外面下半は露胎で、釉下に化粧土を施すと思われる。見込に白色の目土が残る。91は精製品の壷類の底部で、淡灰白色の精良な素地に淡青緑色の半透明釉がかかる。全釉で、外底周縁を雑に釉剥ぎし７ヶ所に白色の目土を置く。92は白磁口禿碗である。93は灰釉陶器の甕で、上端に沈線が巡る。内面には当て具痕が残り、外面は横方向に強くナデ消す。胎土に白色と黒色の砂粒を多量に含み、淡灰褐色を呈する。内外に黄味の強い緑褐色釉を施す。

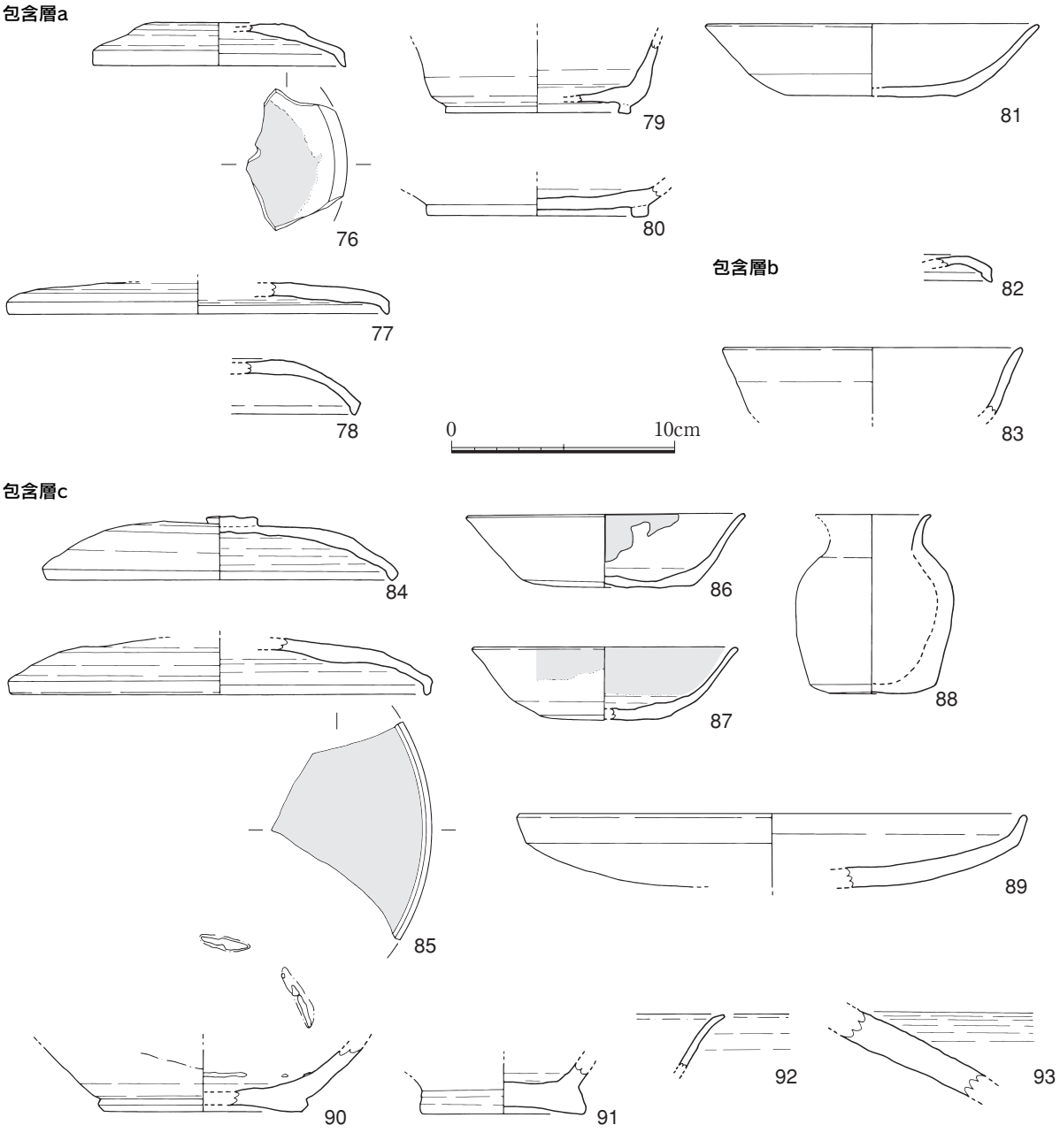


Fig.37　包含層 a ～ c 出土土器（1/3）

整地層ｄ出土土器　Fig.38、PL.22～23

須恵器、土師器、瓦が出土した。8 世紀後半から 9 世紀初頭までの土器に限られる。

94～115は須恵器である。94～108は坏蓋で、94・100・101は扁平な鈕が付き、95・96は鈕が剥がれ、98は鈕が無く、その他は鈕の有無が不明である。口縁端部は全て下方へ短く折れるが、95のみやや鈍角をなす。調整が分かるものでは、天井部内面にナデ、外面に回転ヘラ削りを加える。削りの回転方向は上から見て全て時計回り。胎土に砂粒を少量含むものが大半で、105が赤焼けである以外は焼

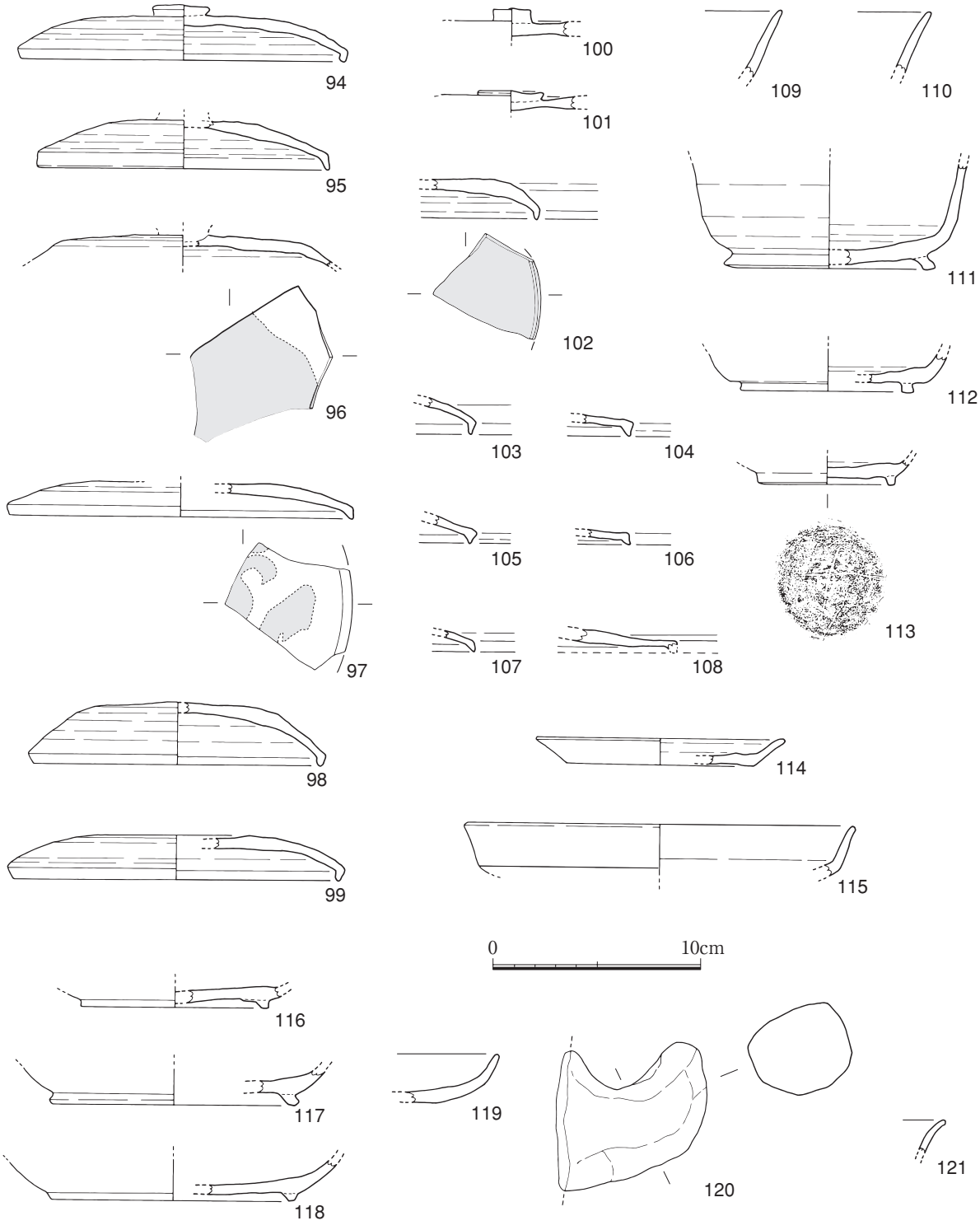


Fig.38　整地層 d 出土土器（1/3）

成良好。96・97・102は内面に墨痕が残っており転用硯である。口径は94が15.4cm、95が13.8cm、97は不正確ながら16.4cm、98は13.6cm、99は15.4cmである。109・110は坏身口縁部片、111～113は同じく底部片である。111は高台が撥形に開き、底部と体部の境が丸味を持つ。内底にナデ、外底に回転ヘラ削りを加え、内面が赤焼けである。112は高台が低く断面台形を呈し、底部のやや内寄りに付く。内底にナデを加え、高台付け根は横ナデする。113は高台が低く痩せており、底部端に付く。内面ナデ、外底はヘラ切りの痕跡が残り、高台貼付後にヘラ記号を刻む。114・115は皿である。114は底部がヘラ切りのままで、口径11.8cm。115は内面赤焼けで、口径は18.6cm前後か。

116～120は土師器である。116～118は高台付坏である。高台はいずれも低いが、116はやや内側に、他２点は底部端に付く。いずれも摩滅が著しく調整は不明で、胎土は116が精良で、他は砂粒を少量含む。119は皿で、外底はヘラ切り離し。調整不明。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。120は甑の把手である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良。二次加熱を受けている。

121は越州窯系青磁精製品碗である。胎土は灰白色精良で、釉はかなりかせている。

包含層ｅ出土土器　Fig.39、PL.23

須恵器、土師器、瓦の他、中国陶磁器が出土した。上層より中世の輸入陶磁器が出土したが、それ

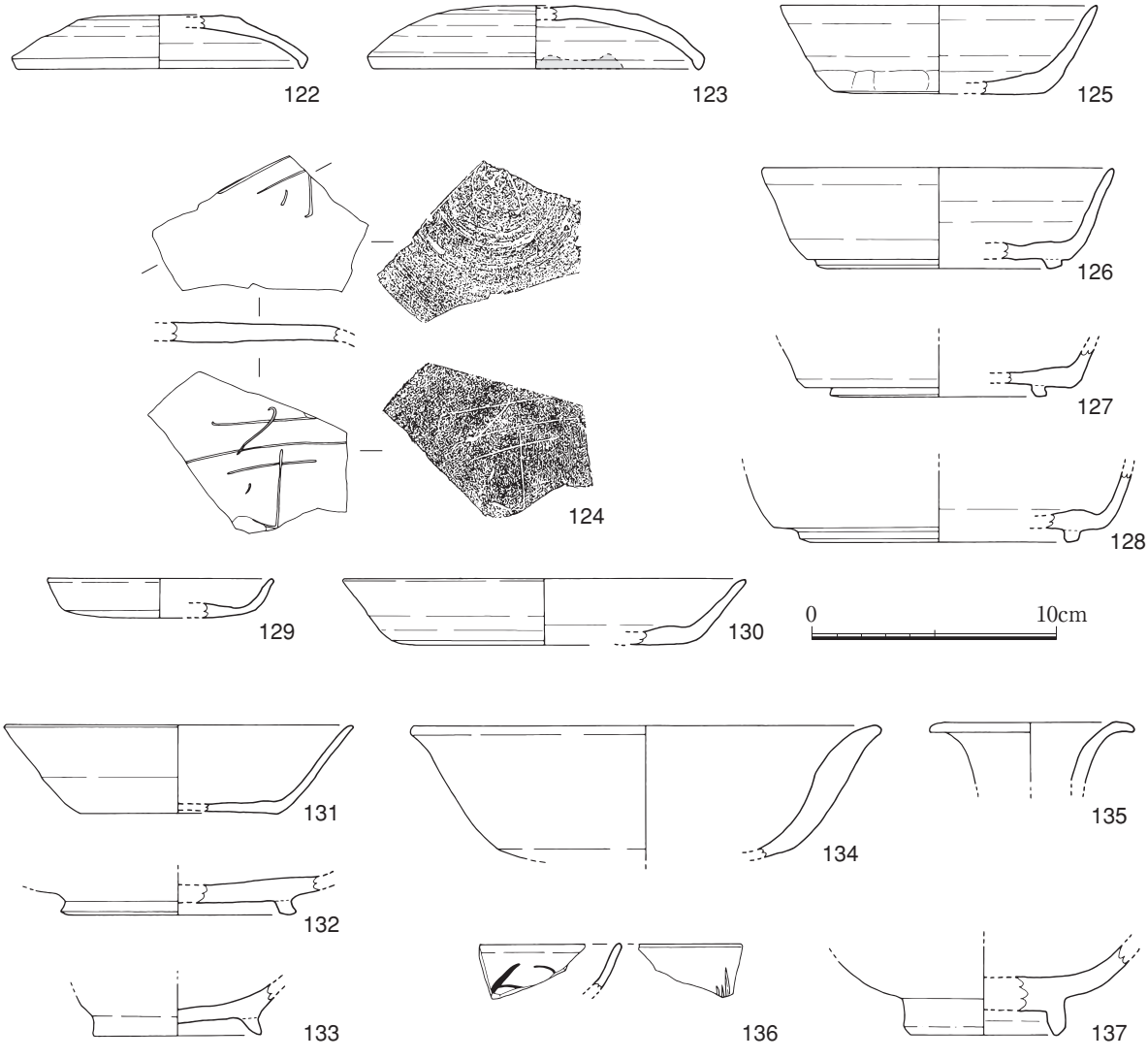


Fig.39　包含層ｅ出土土器（1/3）

を除けば 9 世紀初頭までにおさまる。

122～130は須恵器である。122～124は坏蓋である。122・123は口縁が短く内傾気味に折れ曲がり、端部が断面三角形を呈する。天井部外面はヘラ切り離しのまま未調整である。122は口径11.6cm。123は口縁部内面に墨または漆が付着する。口径13.2cm。124は天井部の破片で、内面にナデ、外面に逆時計回りの回転ヘラ削りを加える。内面にヘラ描きで「寺」の一字を刻み、外面の線刻も同様に「寺」であろう。ともに焼成前のものである。胎土に大粒の砂粒を含み、焼成は良好で、表面に炭素が吸着する。125は無高台坏である。外底はヘラ切りのまま未調整で、体部下端にヘラ削りを加える。胎土に有機質の粒子を含み多孔質である。口径12.8cm。126～128は有高台坏である。いずれも高台が低く断面方形で、底部端より内側に貼り付ける。外底はヘラ切り離しのまま未調整である。ともに胎土は精良で、焼成は126がやや不良、他は良好。126は口径14.2cm。129は小皿で、底部ヘラ切り離し。口径9.2cm。130は皿で、底部ヘラ切り離し。口径16.4cm。

131～134は土師器である。131は坏で、底部ヘラ切り離しであろう。体部とは明瞭な境を持つ。胎土精良、焼成良好。口径14.2cm。132・133は高台付坏である。132は高台が低く断面方形で、底部の内寄りに付く。外底は回転ヘラ削り。胎土精良、焼成良好。133は高台が撥状に開き、胎土に砂粒を含み、焼成やや不良。134は鉢の口縁部か。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好。口径19.2cm。

135は越州窯系青磁水注であろう。粗製品で、灰色の硬陶質素地に、黄味の強い淡オリーブ色不透明釉を施す。釉下には化粧土を施す。口径8.2cm。136は同安系青磁碗である。淡灰褐色の精良な素地に、黄味の強い淡オリーブ色透明釉を施す。内面にヘラ描文、外面に櫛描文を施す。137は明代龍泉窯系青磁碗である。胎土は淡灰白色で、夾雑物は含まないがややざらつきがあり、淡オリーブ色の不透明釉を高台外面途中まで施釉する。

攪乱坑・試掘トレンチ出土土器　Fig.40、PL.23

138は須恵器壷の蓋である。天井部は平坦で宝珠状の鈕が付き、口縁は垂直に折れて長い。天井部外面は回転ヘラ削り、口縁外面から内面にかけて回転ヘラ磨きを施す。焼成不良で赤焼けを呈する。口径10.4cm。139は土師器丸底坏である。摩滅が著しいが、ヘラ切り離しか。口径16.4cm。140は土師器甕である。摩滅して調整は不明。141も土師器甕である。長胴で、口縁が大きく外反する。最大径は口径にある。内面はヘラ削り、外面はナデ調整を施す。二次加熱を受け、内外面に煤が付着する。口径18.0cm。以上のうち、139は12世紀前後、他は 8 世紀代の土器であろう。

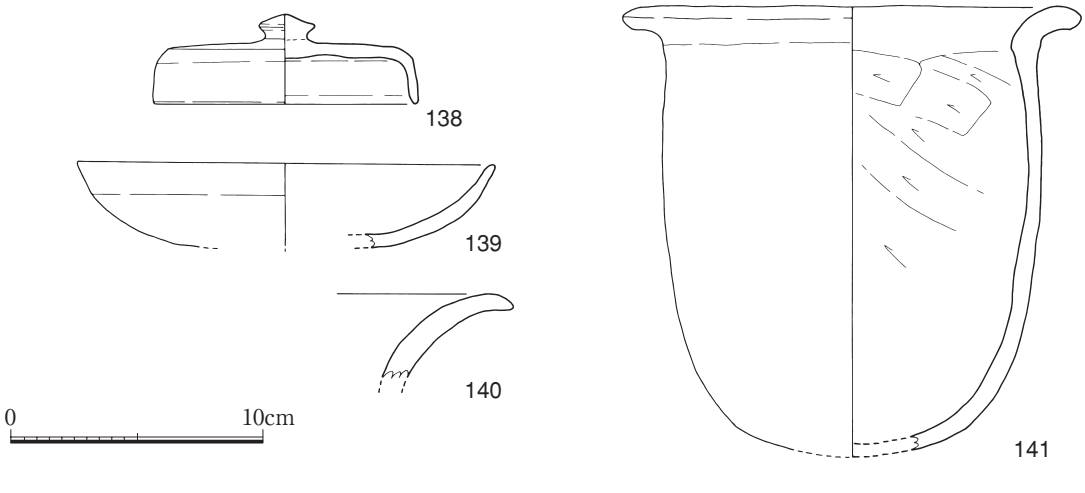


Fig.40　攪乱坑・試掘出土土器（1/3）

（３）瓦　Fig.41～45、PL.24

瓦当は３点のみ出土した。142は軒平瓦で、瓦当内区に扁行唐草文、外区上縁に大きな珠文、下帯と脇区に外向する凸鋸歯文を配する。右脇区の凸鋸歯文が四個半で、下帯へ移行する角に凸鋸歯文があり、老司Ⅰ式である。凸面側に粘土帯を貼り付け、削りを加え短い段顎とする。凹面の布目は板小口でほぼナデ消され、凸面は丁寧にナデられて叩き目は観察できない。胎土に石英粒を含むが精良で、焼成は良好。包含層ａ出土。143も軒平瓦で、残りが悪いが瓦当文様が142に酷似しており老司Ⅰ式であろう。瓦当面以外は器面が剝げ落ちて調整不明。石英粒を多量に含み、焼成はやや不良。Ⅰ区攪乱坑出土。144は軒丸瓦で、残りが悪いが内区に複弁八弁蓮花文を配し、外区の珠文は30個前後に復元できる。珠文帯の外縁には僅かに凸鋸歯文の痕跡が認められ、瓦当径約17.4cmであり、老司Ⅰ式か。胎土に石英粒を少量含むが精良で、焼成は良好で土師質を呈する。SK-18出土。145・146は熨斗瓦で、ともに両側面を丹念に面取りし、145の左側面のみ二面をなす。凹面に布目圧痕があり、145は目が細かく、146は一部をナデ消す。凸面の叩きは正方形の格子叩き目（後述の分類B、以下Bとのみ記す）で、146は帯状に無文部分を残す。ともに胎土は精良で、焼成良好。145はSP-1056、146はSK-10出土。

平瓦・丸瓦には完形品がなく大半が小片である。ここでは形状を窺うことのできる資料を図化し、他は叩き目を分類して示した。製作技法を知り得る資料は少ないが、四枚作りとみられる平瓦（148）、摩滅して不明瞭だが粘土板を切り取る際の糸切り痕を示す平瓦、粘土紐巻き付けの痕跡を示す丸瓦（157）、竹状模骨の痕跡を示す丸瓦（158）を各１点確認した。

147～153は平瓦である。147は狭端面と一側面が残り、側面はヘラ削りとナデにより面取りされ、「く」字形に二面をなす。凹面の布目は縁を残してナデ消し、凸面は正方形の格子叩き目(B)で帯状に無文部を残す。黒色に燻されている。厚さ1.8cm。SK-61出土。148は側面に深さ0.4cm弱の切り込みと破面がある。凹面の布目は浅く不明瞭で、凸面は浅い斜格子叩き(C-1-3)で無文部が多く残る。 須恵質を呈する。厚さ2.2cm。SK-10出土。149は全形を知ることのできる唯一の平瓦で、扇形に若干広がる。四辺を凹面側から切り落とし、側面は更に凹面側を削平するが、左右でその幅が異なる。四隅も斜めにカットする。広端の右で2.0cm、左で2.3cmと左に厚い。狭端は厚さ1.7～1.9cmで、広端に向かって厚みが増す。凹面の布目は一部をヘラでナデ消す。広端付近に紐状の窪みが横走しており布の折り返しを示すものか。凸面は斜格子叩き(C-2)で、ほぼ全面で叩きを重ね打ち、ナデ消しは加えない。左右で長さが異なり、右端が38.1cm、左端が36.9cm。幅は狭端で26cm弱、広端で30.2cmを測る。須恵質。SB-02の柱穴SP-1080の礎板に用いた瓦で、SP-1003の瓦と接合した。150は形状、側面調整、布目、叩き、胎土、焼成、法量などが149に酷似する。凹面には布の合わせ目と考えられる縦走する窪みがある。凸面の叩きは149ほど重複せず無文部分が残り、一部に軽い板ナデを加える。やや歪む。SK-08出土。 151～153は凸面に左撚りの縄目叩き(D-1)を施す。 上下端は凹面からみて鈍角に面取りされ、側面は「く」字形に二面を削り出すが左右で幅の比率が異なる。152・153には凹面に模骨痕が僅かに残り、布目は一部ナデ消す。凸面の縄目はいずれも３cmの中に５個を数えるほどの密度で、側縁に並行もしくは斜めに走る。152はナデ→叩き→ナデで無文部分を残しており、幅5.2cmの叩きの単位が観察される。胎土は152が砂粒を少量ふくむが概ね精良。焼成はいずれも良好で、151は土師質、152は須恵質、153は瓦質。151は包含層ｅ最上層、152はSK-55、153は整地層ｄ出土。

154～158は丸瓦で、154～156は玉縁付、157・158は小片だが行基葺丸瓦と思われる。154は側面を平坦に面取りする。凹面に布目、凸面は摩滅が著しいが縄目をナデ消すようである。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好で土師質を呈する。整地層ｄ出土。155は側面の幅1/4に切り込みがあり、残りは押し割りによる破面をなす。凹面は布目、凸面は横位に強く板ナデする。凸面に沈線状の窪みが横

に走るが、板ナデによって生じたものか。玉縁部分は横ナデする。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好で瓦質、表面に炭素が吸着して黒色を呈する。SK-55出土。156は側面の幅1/3が切り込み、2/3は破面である。凹面には布目と紐圧痕がある。凸面には浅い斜格子叩き（C-1-1）を複数回施している。玉縁は横ナデする。胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良。須恵質を呈する。SK-61出土。157は

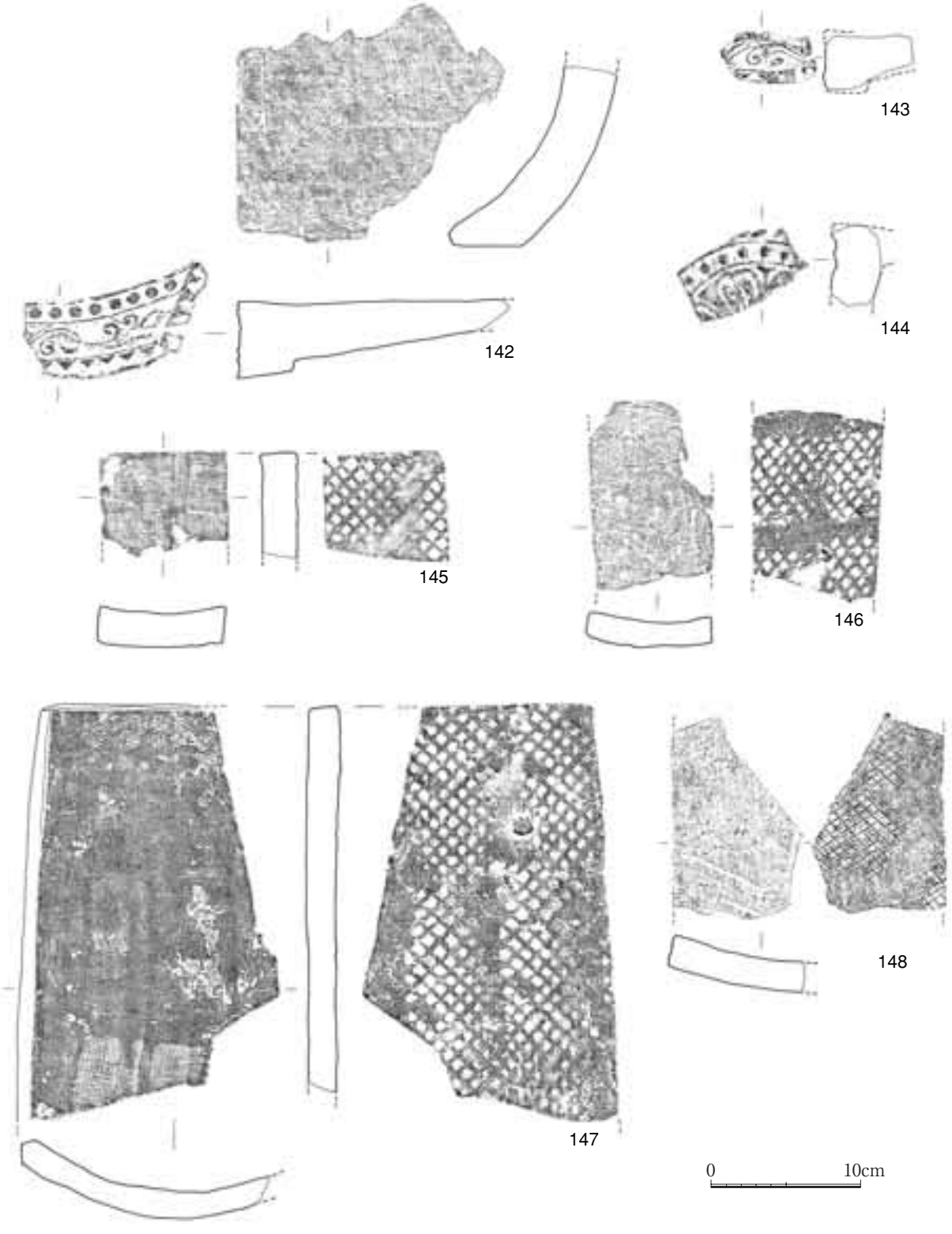


Fig.41　軒瓦・道具瓦・平瓦（1/4）

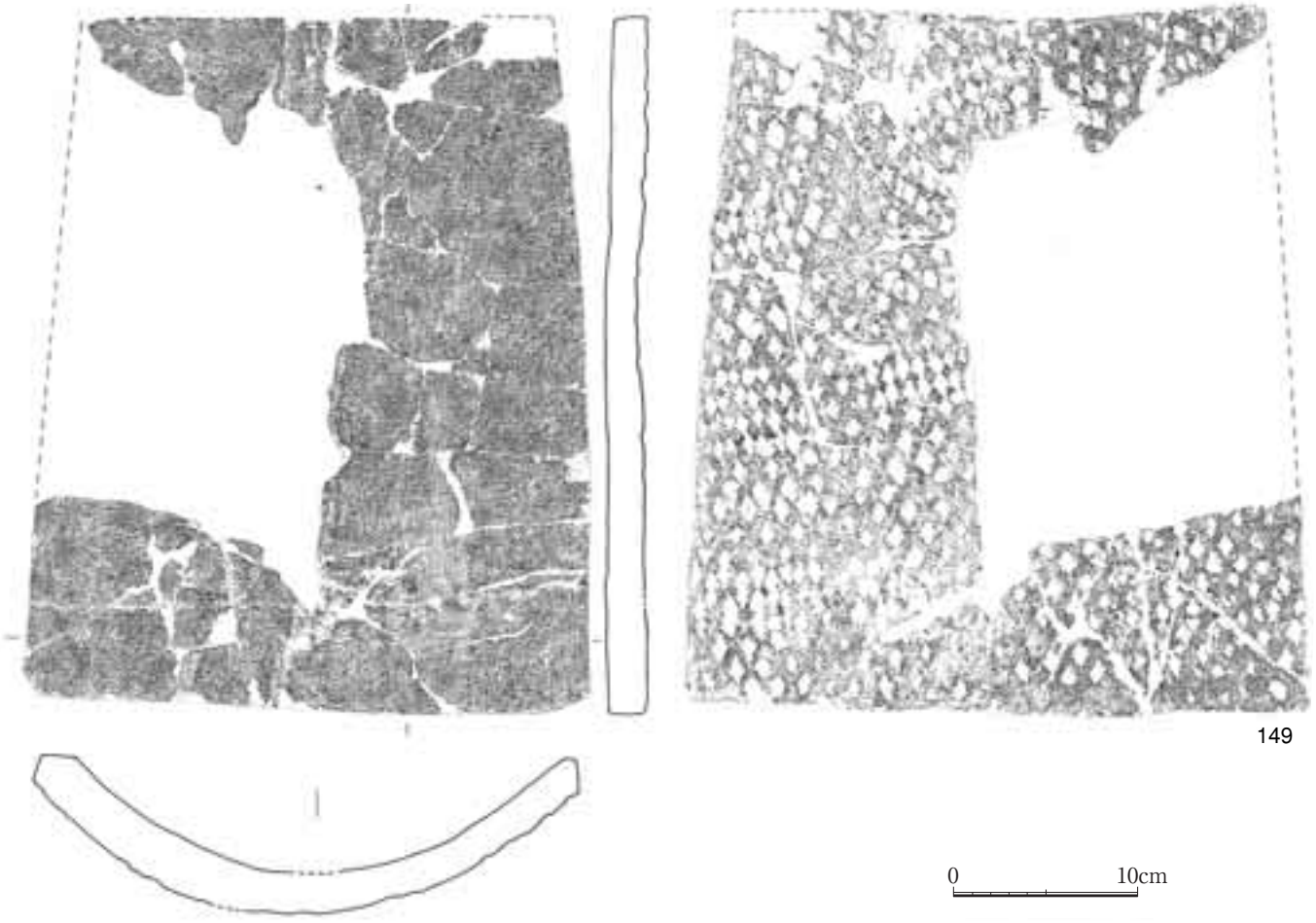


Fig.42　平瓦Ⅰ（1/4）

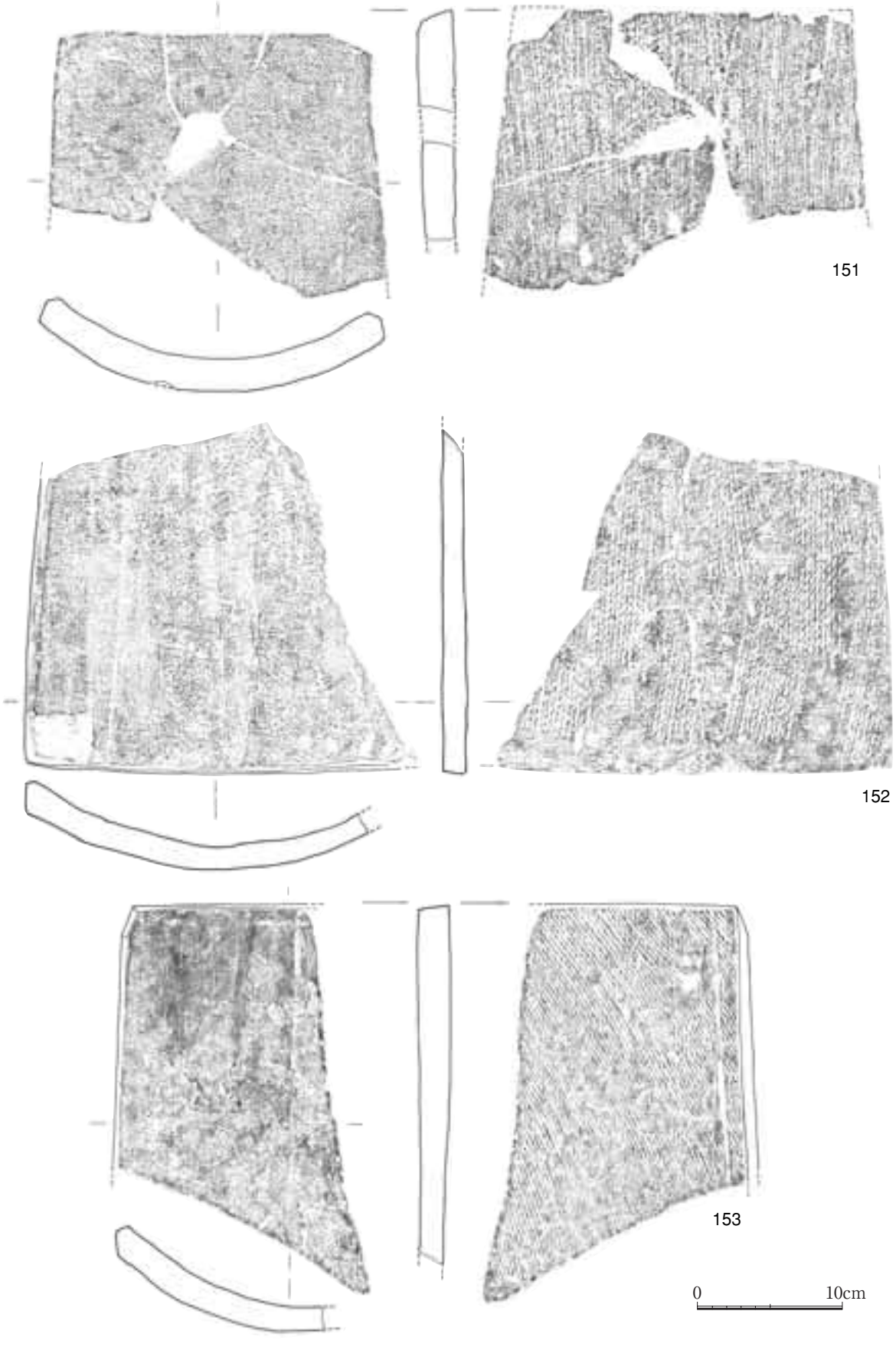


Fig.43　平瓦Ⅱ（1/4）

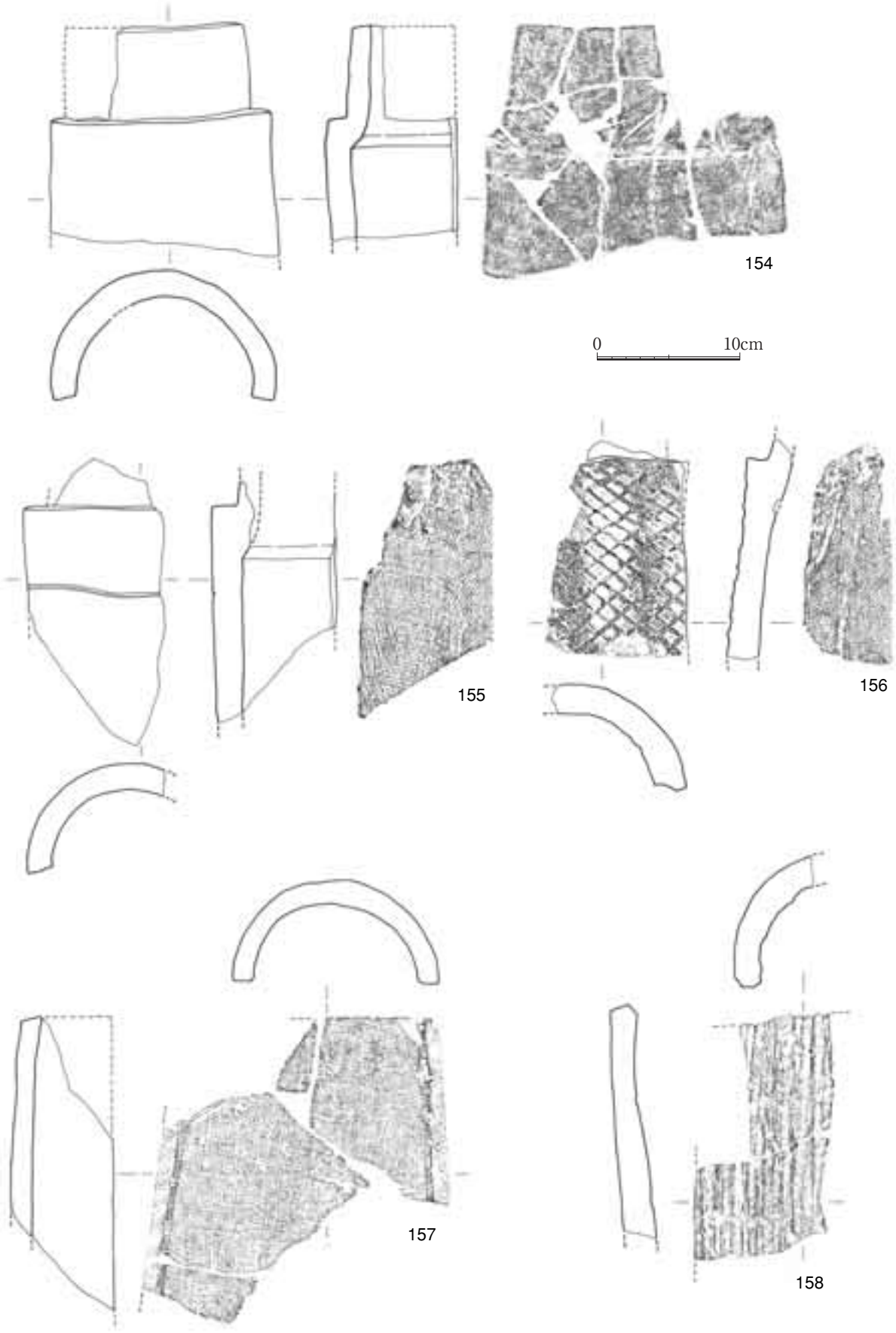


Fig.44　丸瓦（1/4）

側面の面取り後、更に凹凸両面から面取りを加える丁寧な調整を施す。狭端面は無調整である。凹面には布目の下に粘土の継ぎ目が明瞭に残り、瓦製作時に左回り（逆時計回り）に粘土紐を巻き上げたことが分かる。凸面は横位に丁寧なナデを加えており、叩きの痕跡を残さない。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好で瓦質である。凸面の一部に煤が付着する。SK-19出土。158は竹状模骨を用いて製作された丸瓦と思われる。側面調整は157と同じく三面の面取りを施す。狭端面も面取りしており断面が「く」字形をなす。凹面には布目の下に幅1.0cm前後の窪みが並走し、8cmの間を置いて紐状の窪みが横走する。凸面はやはり丁寧にナデ調整され、叩きの痕跡は全く認められない。胎土に砂粒を少量含むが精良で、焼成良好である。

以上の瓦を含め、叩き目が判別できる瓦を抽出して分類した。他に叩き目を完全にすり消したもの（特に丸瓦に多い）や摩滅により不明なものが多数ある。叩き目には以下の種類がある。

A：平行線の叩き目。1点のみ出土した。

B：直交する単線で区画された正方形ないし長方形気味の格子叩き目。格子の大小があるが、その差は僅少である。帯状に叩き目のない空白部分をつくることが多い。

C：斜交する単線により区画された斜格子叩き目。基本的には以下の2種類である。

C-1：区画線が細く、叩きが浅いもの。形と大きさにより3種類以上に分けられるが、点数は極めて少ない。この種の叩きに限り、丸瓦はむろん平瓦の側面にも分割載面と押し割った破面が観察される。他の叩きの瓦は側面を削って面取り調整を加えており、不明である。

C-2：区画線が断面逆台形状に深く太く彫り込まれ、格子が内湾する平行四辺形をなすもの。全体の約1/3強を占める。格子の大きさや区画線の太さによって3種類以上に分けられるが、叩きの食い込みの深いものは格子が大きく線が細く、浅いものはその逆である。すなわち整形時の粘土の乾燥具合や素地土の性質、加える力によって叩きの食い込みの深さに差が生じ、それが文様の大小に現れたと推測される。区画線の定点間（例えば右端～右端）を計測すると概ね1.3～1.5cmの近似値を示し、類似した刻みの叩き板を用いたと考えられる。また、区画線の広いもの（叩きの浅いもの）は叩き目がまばらな印象を与えるが、それを補うためか叩きを重ねて施すことが多く、更に文様を多様化させている。

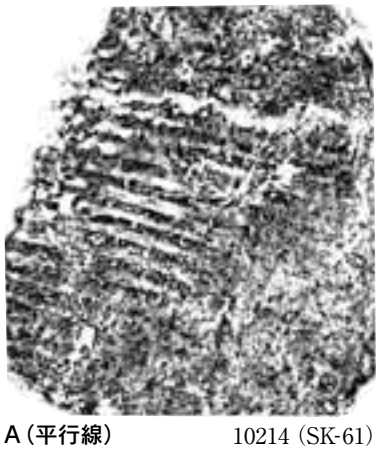
D：細縄を巻き付けた板で叩いた縄目。全体の1/3強を占める。縄の撚り方向に2種類ある。

D-1：左撚りの縄目。縄目の密度に粗密があり、中間的なものもある。縄目叩きはすり消すことが多いので粗密を明確に判別することが難しい。

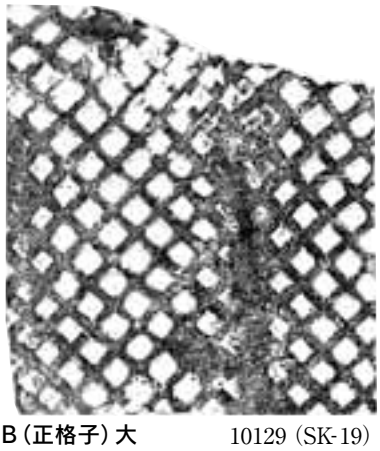
D-2：右撚りの縄目叩き。僅かに出土した。

上記によって分類した各遺構出土瓦の点数をTab.1に示す。明らかに同一個体と識別できるものは1点にまとめた。Aは11世紀初頭のSK-61に伴う1点のみ。Bは9世紀以降に出現するが、9世紀初頭の整地層dからは出土していない。C-1は9世紀代にみられるが少数である。C-2は8世紀前半～中頃のSD-60では大半を占め、かつ摩滅したものがほとんどない。9世紀の遺構からも多数が出土するが、11世紀初頭のSK-61では少ない。D-1は8～9世紀を通じて認められ、D-2は9世紀代に少数ある。今回出土した老司Ⅰ式の軒平瓦には叩き目が観察できないが、第1次調査では縄目叩きを残す老司Ⅰ式軒平瓦が報告されており、Dは当初から使用されていた可能性が高い。以上の分類でみる限り、8世紀代はC-2とD-1が、9世紀にはBとD-1が主体を占める出土状況を示しているが、大橋E遺跡第3次調査報告の入江金之輔氏採集資料[註]の老司Ⅰ式軒平瓦の叩き目は正格子で、やや目が大きいがBに類似するようでもあり、Bも古く位置付けられるのかもしれない。

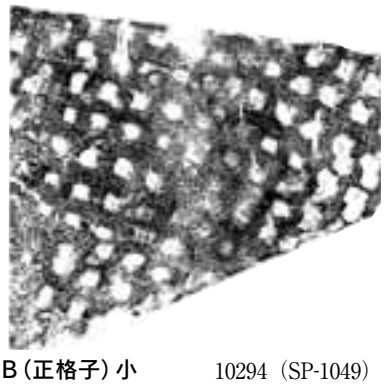
註　大橋E遺跡3次調査の報告　福岡市埋蔵文化財調査報告書第279集　1992



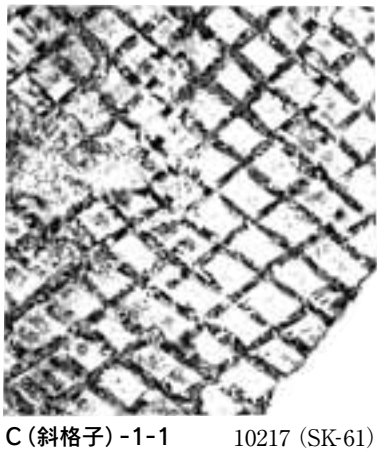
A（平行線） 10214（SK-61）



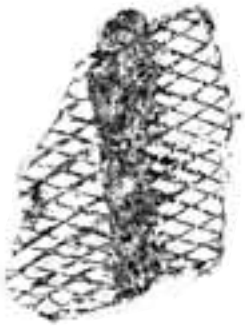
B（正格子）大 10129（SK-19）



B（正格子）小 10294（SP-1049）

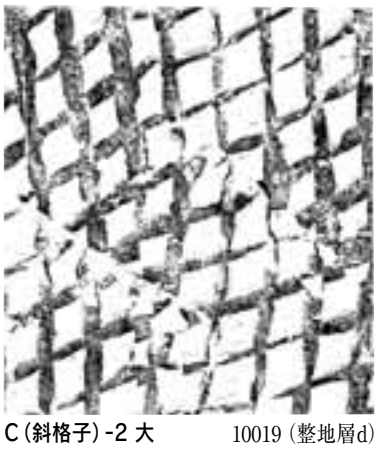


C（斜格子）-1-1 10217（SK-61）

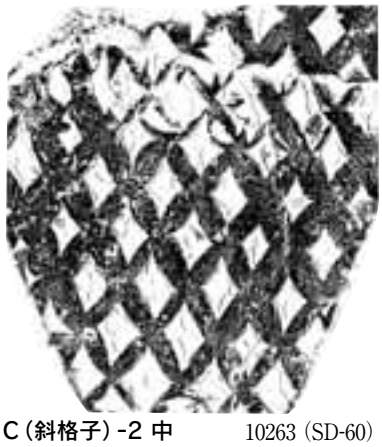


C（斜格子）-1-2 10209（SK-61）

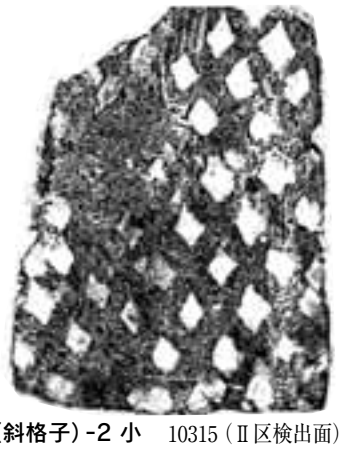
C（斜格子）-1-3 10007（SK-10）



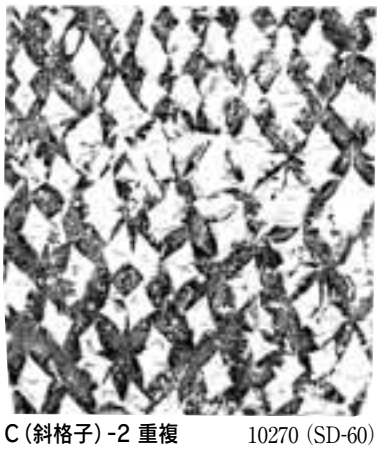
C（斜格子）-2 大 10019（整地層d）



C（斜格子）-2 中 10263（SD-60）



C（斜格子）-2 小 10315（Ⅱ区検出面）



C（斜格子）-2 重複 10270（SD-60）

D-1（縄目左） 10017（SK-55）

D-2（縄目右） 10364（包含層e上層）

※右下の数字は遺物登録番号、（ ）は出土遺構

Fig.45 叩き目の分類（1/2）

Tab. 1 遺構別出土瓦の叩き目分類（個数）

遺構	層	土器の時期（無記入は不詳）	平瓦						丸瓦		
			A	B	C-1	C-2	D-1	D-2	C-1	D-1	計
SB-02						4					4
SK-05		9c初				1					1
SK-07						4	1				5
SK-08				1		5	2				8
SK-09						3					3
SK-10	上	9c～		2	2	1	1			1	7
SD-14						1	7				8
SK-17	上	9c中頃～後半				1	4				5
SK-18				1			1				2
SK-19	上	9c中頃～後半		4			6	1		4	15
SK-28	上	中世					2				2
SB-30	上	9c～		2		2	6			1	11
SD-31	下	8c代					1				1
SK-34	上			2							2
SK-37							1				1
SK-38				1			4				5
SD-39	下	8c代				2					2
SK-43	上	9c		2		1	1				4
SK-44	上			1			2			1	4
SK-45	上					1					1
SB-50上層	下	8c以降					3				3
SK-55	下	9c初		1		10	6				17
SK-57	上					1					1
SD-60		8c前半～中頃				16					16
SK-61		11c初	1	9	2	3	5		1	4	25
SK-62						1					1
SB-65	上			1							1
SK-67				1			1				2
SK-68						1					1
包含層a		古代（8cが主）		1		9	3			1	14
包含層c		古代～中世		3	1	2	7	1		1	15
整地層d		8c後半～9c初頭				12	9			2	23
包含層e		9c初頭～中世		1	1	4	7	1		4	18
攪乱･試掘他				4		4	3		1	1	13
ピット				4		1	2			1	8
Ⅱ区						1					1
計			1	41	6	91	85	3	2	21	250
比率			0.4%	16.4%	2.4%	36.4%	34.0%	1.2%	0.8%	8.4%	100.0%

※他に叩き目を完全にすり消したものや磨滅して不明なものが多数ある。

（4）石器　Fig.46・47

各遺構、包含層などから出土した石器をまとめた。162は古墳時代前期に属する可能性があるが、他はプライマリーな状態での出土ではない。

159～161は磨製石斧である。159は刃部の破片で、表裏は刃部からの加力により破損している。両面に斜方向の擦痕がある。安山岩製。160は基部の破片で、安山岩製。161は刃部付近の破片だが外形を留めない。使用時の衝撃により弾け飛んだ破片か。刃部には斜方向の擦痕が僅かに残る。162は砥石片で上半部を欠く。表裏の平坦面を使用し、先端部には溝状の使用痕が残る。硬質砂岩製。SD-01出土。

163は安山岩製の削器である。背面に自然面を残す縦長剝片の打瘤を除去し、片側縁に樋状剝離を施して背部とする。他側縁には一部に二次加工を施し刃部とするが、使用痕は側縁全体に及ぶ。

164～166は黒曜石製の打製石鏃で、いずれも縄文時代の資料である。164は基部の抉りが深い縄文時代早期の石鏃で、先端と片脚を欠く。165は抉りが浅いタイプで、ほぼ完存する。166は平基式で、先端の一部を欠く。風化が著しい。

167～169は二次加工のある剥片で、いずれも黒曜石製である。167は横長の剥片を用いた削器と思われるが、左端が折れて全容が不明。168は平坦打面を有する縦長剥片を素材に用い、一側縁にのみ二次加工を施し刃部とする。長3.4cm。169は使用痕のある剥片で、自然面打面の横長剥片を用い、下端部は刃潰しし、一側縁に使用痕が残る。

170は黒曜石製のつまみ形石器である。上下両設打面の石核から作出した縦長剥片を用い、両側縁から抉りを入れ、折っている。第１次調査では剥片鏃が出土している。

171・172は黒曜石製の石核である。171は打面移転を繰り返して剥片剥離を行った後の残核で、最終剥離作業面を中央にして図示した。この面は主に上方向からの剥離を繰り返しており、打角は約50°と狭い。最後は正面上端に複数の階段状剥離痕を残して石核を放棄している。剥片剥離は左面・右面にも及ぶが、正面を含めた各面にはそれ以前に行われた別方向からの剥離も観察できる。打面は最終面の直前に剥片剥離を行った作業面である。節理や不純物を多く含む黒曜石で、剥離作業がそれに阻害されていることが多く、石核には不向きな素材といえる。172は小礫を用いた石核で、側面・背面には一部自然面を残す。単設打面で、打角は約80°。主に正面側を作業面として剥片剥離を行っているが、最後には階段状剥離を繰り返して石核を放棄している。多条の節理が剥片作出を阻害しており、やはり石核には不適切な素材といえる。

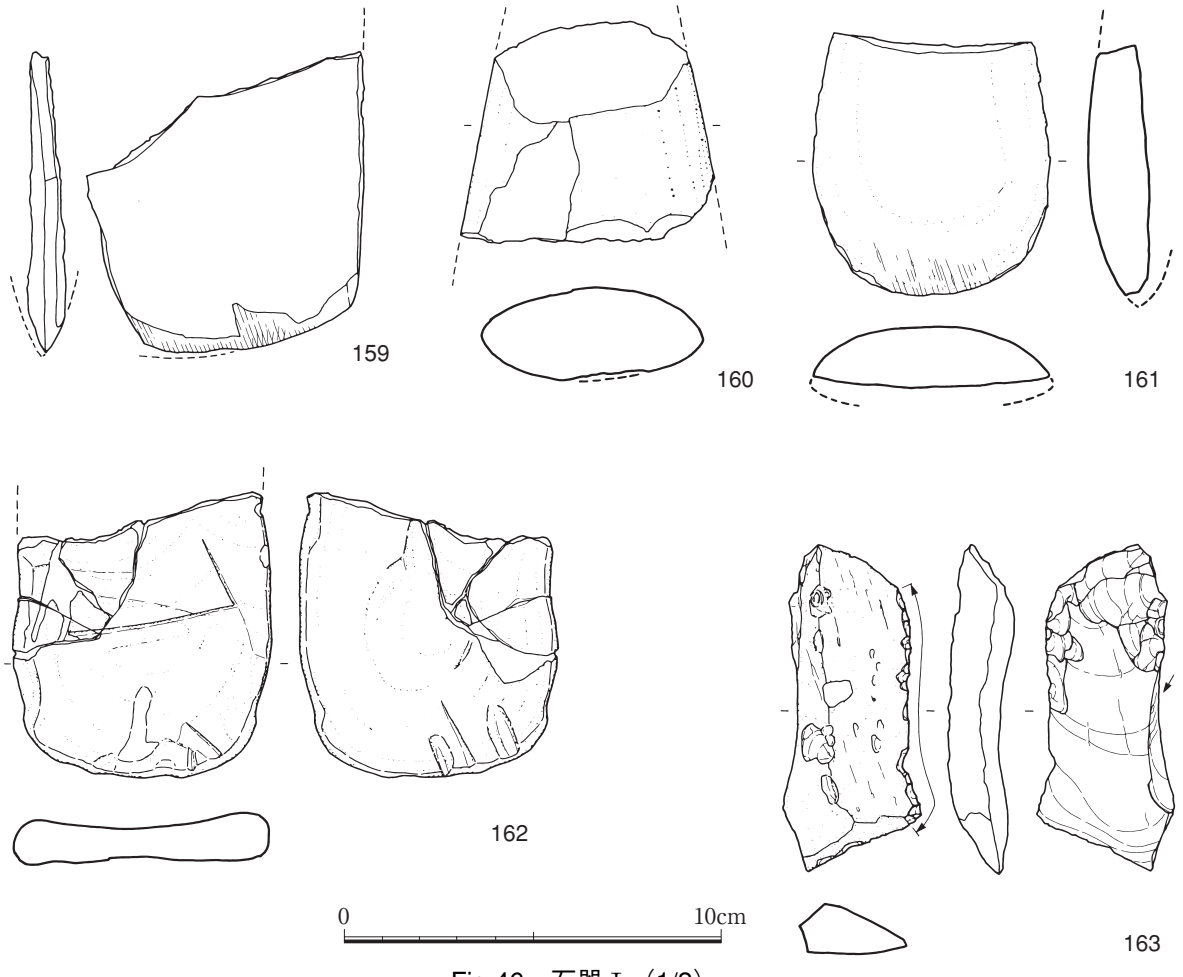


Fig.46　石器Ⅰ（1/2）

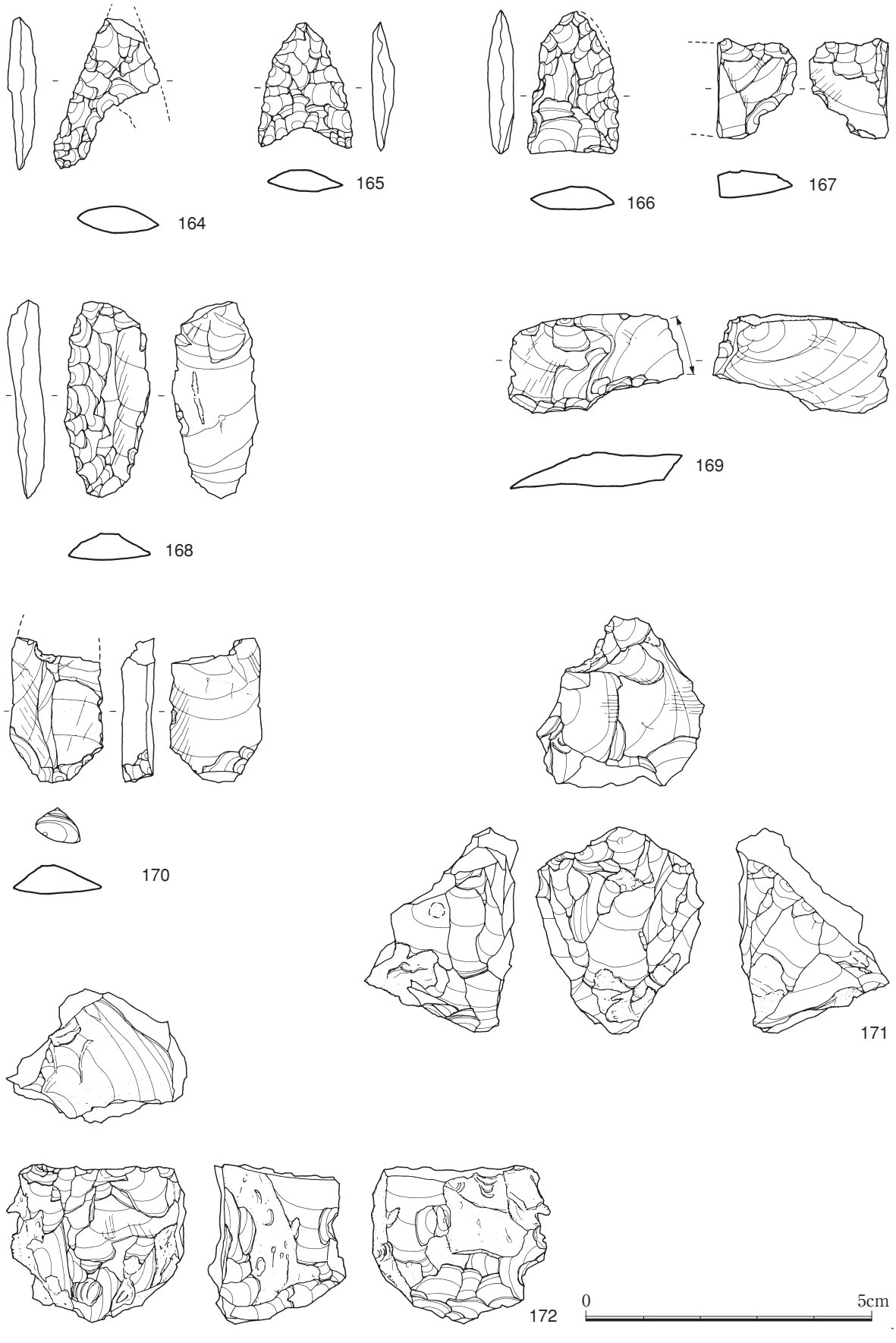


Fig.47　石器Ⅱ（1/1）

第三章　おわりに

今回の調査で確認した遺構は、古墳時代前期の溝１条、奈良～平安時代の掘立柱建物６棟、溝８条、土坑29基、中世の土坑１基で、他に時期不詳の小溝や土坑、ピットがある。ここでは古代の遺構について若干のまとめを行う。古墳時代前期の溝は奈良時代末頃には湿地状の窪地となっていたようで、古代に整地を受けている。この古代整地層はⅠ区の南側を中心に残っており、これによって遺構を層的に２時期に区分することが可能である。また、整地層の上下で遺構覆土が異なっており、整地層が削平された部分に検出した遺構にも上下に区分可能なものがある。整地層出土土器が８世紀後半～９世紀初頭にほぼ限られることから、上・下層の遺構は９世紀初頭を境とし、この時期に大規模な建物の建て替えがあったものと考えられる。上限については７世紀以前の遺物が少量出土しているものの全て８世紀以降の遺物と混在しており、下層遺構はほぼ８世紀代におさまる。SB-20・40・50、SD-27・31・32・60、SK-55などが含まれる。上層遺構はSB-30・65、SK-10・17・19などを中心とし、11世紀初頭前後とみられる土坑SK-61を除くと９世紀後半を下限とする。SB-02は時期の決め手を欠くため両方に図示した（Fig.48）。これらの遺構には切り合いがあり、土層断面から複数の遺構掘り込み面も確認できたが、出土遺物が少なく時期的な細分は困難であった。遺構の主軸方位は調査区が幅狭なため正確な数値が得にくいが、明らかに方位が異なるSD-31を除くと磁北から2～14°東偏し、特に８～9°に集中する傾向にあり、整地層の上下で変化はない。第１次調査の遺構主軸も基本的に真北から4°（磁北から約10°）東偏することから、当遺跡の古代遺構の基準方位を示すものといえよう。

SD-60は遺構説明でも述べたように、東へ延長した位置にⅡ区SD-70が位置し、Ⅰ区西辺へは延びてこないので、途中で折れると考えるとⅠ区南辺のSD-27もしくはSD-32に連結する可能性が強い。SD-60の出土土器は８世紀前半～中頃の特徴を示すが、SD-70は８世紀後半代まで下る可能性がある。今、これらを一連の区画溝と考え、第１～５次調査（以下「調査」は省く）の関連遺構をあわせて示したものがFig.49である。第１次では公共座標が導入されていないため、方位（真北）と周辺地形を手がかりに縮尺1/500の都市計画図上で合成した。上記の区画溝の東の延長上には第１次６号溝（８世紀後半）が位置しており、ここで南へ屈曲しているように見える。第１次では南北方向の10号溝より東には方位を違える11号溝しかなく、溝を中心とする遺構群が10号溝を東限としている状況が窺える。そこで10号溝を南へ延長して先のSD-27、SD-32との距離を測ると、外法でそれぞれ113.7m、108.9mで概ね一町に相当しており説得力がある。同時期の建物群は溝の外にも配置されているので、主要建物を囲む区画であったと考えられる。また、大正末～昭和初期の地形図を見ると北西側に周囲と１～２mの比高差を持つ高まりとして示された平坦地があるが、第１次で外区を囲む施設と推定された瓦溜（雨落溝）を西に延長すると約33mでこの高まりに突き当たり、約80m先では花崗岩丘陵に阻まれることになる。従ってこの瓦溜は外区ではなく特定の建物を取り囲む可能性が強く、位置的に区画溝の中軸線付近にあたることから中心的な建物に伴う溝であったと考えられる。Ⅱ区で検出した溝SD-69と柱根が残っていた柱穴SP-1079がこれに伴う可能性もあるが、調査範囲が狭く判断しかねる。

第１次では掘立柱建物、溝、瓦溜等の遺構や、黄銅製匙・箸、石帯、木簡などの特殊な遺物とともに「造寺」「寺」「佛」「堂」等を記した墨書・刻書土器などが出土したことから、それまでの研究史を基に当遺跡が古文書に見える「醍醐寺円光院末寺筑前国三宅寺」（初出は寛治五年（1091）醍醐雑事記）の前身となる７世紀後半創建の古代寺院跡と推定するに至った。第２次では区画を示すと考えられる溝やヒノキ・コウヤマキを柱に用いた掘立柱建物などを検出し、老司Ⅰ式軒平瓦を始めとする多

量の瓦や「寺」銘の墨書・刻書土器が出土し、また須恵器・土師器が少ない中でも須恵器坏蓋の転用硯・土師器坏の灯明皿の割合が目立った（図版扉参照）。寺院跡である可能性はますます高まったと言えるが未だ不明な部分が多い。今回調査対象外となった分譲住宅地や周辺の宅地の地下にはなお遺跡が広がっており、今後とも開発行為に対する細かい注意と調査の積み重ねが必要と考えている。

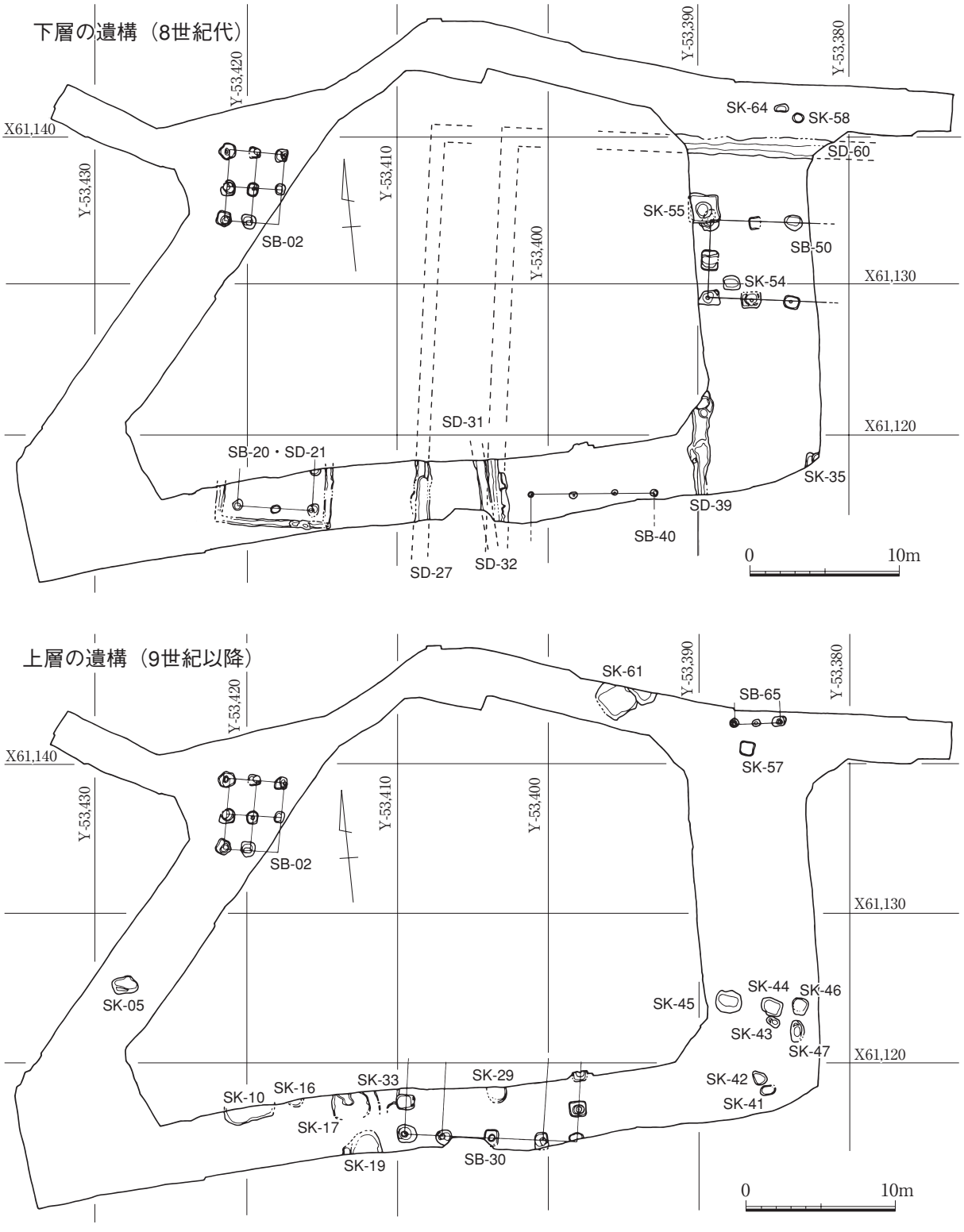


Fig.48　上層と下層の遺構配置（1/400）

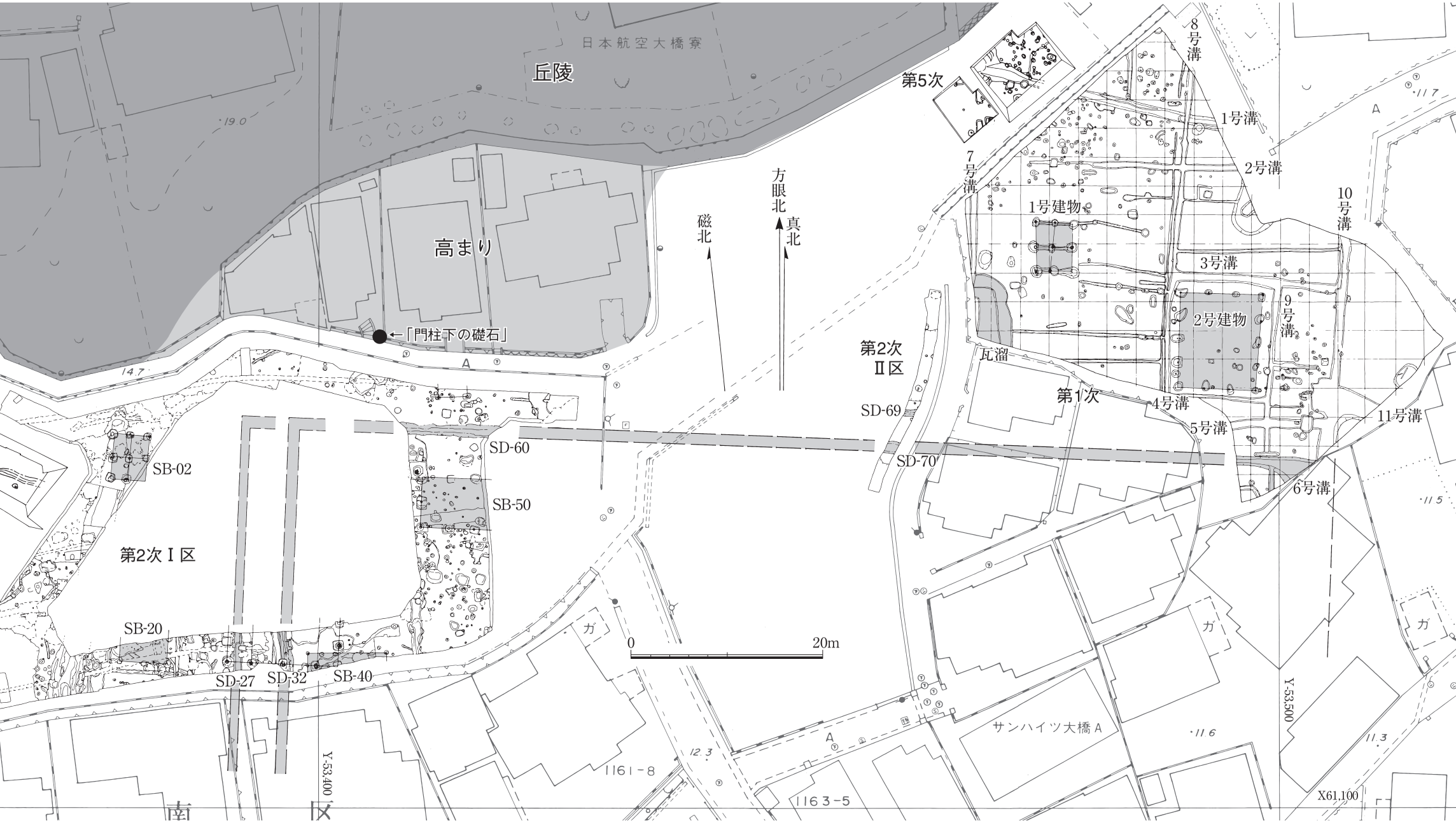


Fig.49　区画溝の推定線と8世紀代の建物（1/500）

付１．柱根の樹種と年輪年代法による柱根の年代測定

独立行政法人奈良文化財研究所　光谷拓実

年輪年代法の基本は、年代を割り出すときに基準となる長期の暦年標準パターンの作成にあることは言うまでもない。現在、もっとも進展している樹種は、ヒノキとスギである。ヒノキが現在から紀元前912年まで、スギが現在から紀元前1313年までできており、その先端はいずれも縄文晩期に到達している。

九州地方においては、これまでに福岡市内に所在する３ヶ所の遺跡（十郎川、井相田Ｃ、博多遺跡群）から出土した木製品７点（いずれもヒノキ材）、特別史跡大野城跡出土柱根１点（コウヤマキ材）、雀居遺跡出土木製品４点（机の天板、机の脚、槽）とについてのみ応用事例がある。このように九州地方において年輪年代法の適用例が少ないのは、ヒノキ材、スギ材、コウヤマキ材の出土例が少ないからである。

柱根の樹種同定

測定に充分な年輪層を有する柱根は４本である。これらの柱根が年輪年代法に適用できる樹種かどうかを判断するために、樹種同定をおこなった。試料は吉武　学氏によって小ブロック片が採取され、研究室に送られてきた。試料からカミソリ刃を用いて木口面、柾目面、板目面の３断面の切片を作成し、生物用顕微鏡で観察し、同定をおこなった。その結果、下記の３樹種が同定された。

1. ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.

早材から晩材への移行はゆるやか。晩材幅は狭い。垂直・水平樹脂道はなし。樹脂細胞は晩材部に偏在。分野壁孔は典型的なヒノキ型で１分野に２個存在する。これらの特徴が認められたので、SB-30の柱根2本はヒノキと同定された。

2. カヤ　*Torreya nucifera* S.et.Z.

垂直・水平樹脂道および樹脂細胞を欠く。仮道管の内壁にらせん肥厚が２本ずつ対をなして存在する。分野壁孔はヒノキ型で１分野に通常４個存在する。以上の特徴から、SB-02の柱根はカヤと同定された。

3. イスノキ　*Distylium racemosum* S.et.Z.

散孔材で小道管がおおむね単独で平等に分布する。階段穿孔が有る。チロースが有る。幅方向柔細胞がほぼ一定の間隔で２～３細胞幅の接線状に配列する。多室結晶細胞が顕著で、放射組織は異性で１～２列、４～20細胞高である。これらの特徴を有しているところから、SP-1079の柱根はイスノキと同定された。

試料

4本の樹種同定の結果は、上記の通りヒノキ－２本、カヤ－１本、イスノキ－１本であった。従って、年代測定の対象となる柱根は試料SB-30の建物に使われていた２本の柱根で、いずれも原木を半截したものである。２本の柱根の遺存状況はいずれもあまりよくない。その大きさは高さ32cm×短径16.5cm×長径30cmである。普通、柱根類から年輪幅を計測する場合は、その底部下面から、あるいは直径５㎜の棒状標本を抜き取ってから年輪読取り器で計測することが多い。今回は、いずれの方法もおこなえない形状のものであったから、やむなく１本を切断してから、木口面で年輪幅を計測することとした。

結果

計測した年輪層数は210層、さらにこの外側には未計測の年輪が20層分残存していた。この年輪パターンと、ヒノキの暦年標準パターンとの照合は、高い類似度（ｔ値＝6.6）で合致し、その残存最外年輪の年代は624年と判明した。この柱根には心材部に続く辺材部が全く残存していないので、この年輪年代に失われた外周部の年輪を加算することによって伐採年を求めることになる。しかし、その算出はきわめて難しい。あえてここで、この柱根の伐採年代を推察するとなると、少なくとも50～60層分の年輪層数を加算することになるであろうから、原木は700年代以降となろう。

付２．三宅廃寺第２次調査における樹種同定

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試料

試料は、三宅廃寺第２次調査において出土した木材７点である。

３．方法

カミソリを用いて、試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本的三断面を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結果

結果を表１に、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

カヤ　*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.　イチイ科　　図版１

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～４個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し２本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には２本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

スギ　*Cryptomeria japonica* D. Don.　スギ科　　図版２

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.　コウヤマキ科　図版3

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。

放射断面：放射柔細胞の、分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高であるが多くは10細胞高以下である。

以上の形質よりコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.　ヒノキ科　図版4

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

タブノキ　*Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc.　クスノキ科　図版5

横断面：やや小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔または、数の少ない階段穿孔が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりタブノキに同定される。タブノキは、本州（暖地）、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、家具、土木、器具、楽器、船、彫刻、薪炭などに用いられる。

イスノキ　*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.　マンサク科　図版6

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく15前後のものが多い。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、ほとんどが1～3細胞幅であるが、2細胞幅のものが多い。

以上の形質よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

5．所見

同定の結果、三宅廃寺第２次調査で出土した木材は、カヤ１点、スギ１点、コウヤマキ１点、ヒノキ２点、タブノキ１点、イスノキ１点であった。

参考文献

佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

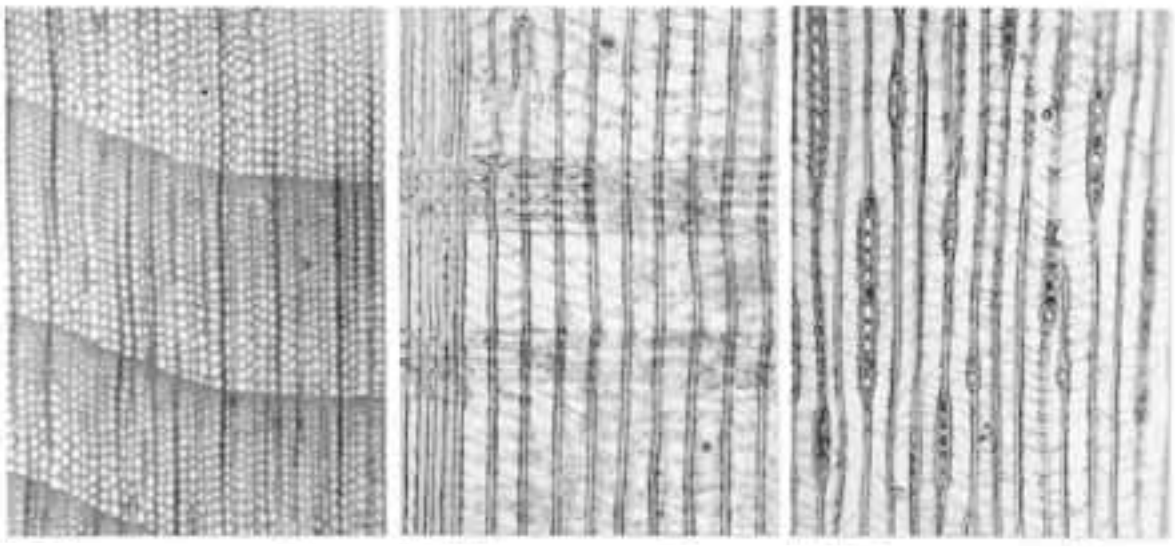
佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242

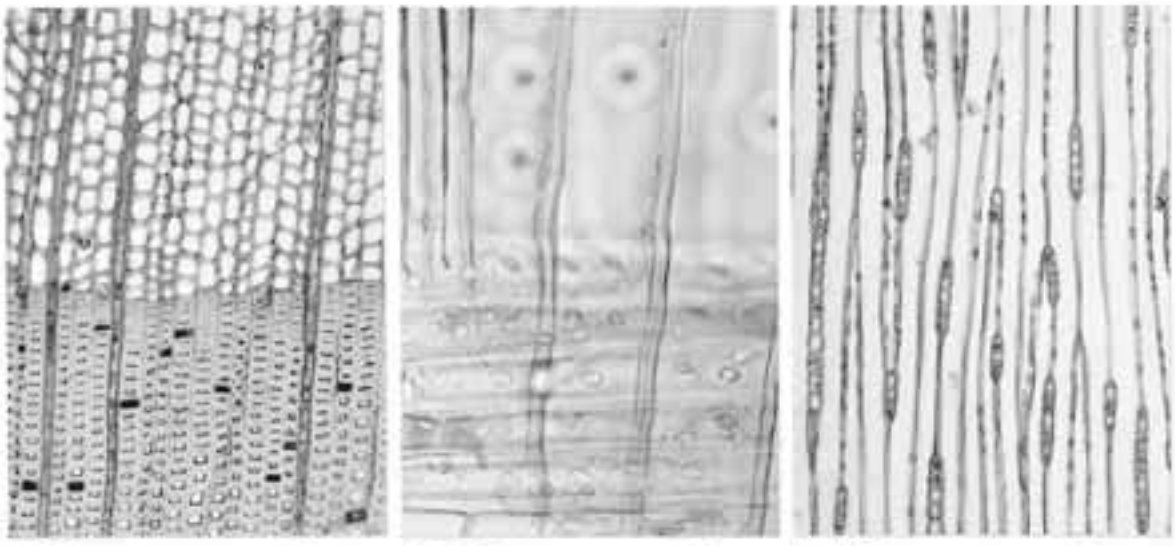
表１　三宅廃寺第２次調査における樹種同定結果

	試料		結果（学名／和名）	
1	Ⅰ区	SP-1003 (SB-02)	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.	カヤ
2		SP-1020 (SB-30)	*Cryptomeria japonica* D. Don.	スギ
3		SP-1023 (SB-30)	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
4		SP-1025 (SB-30)	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
5		SP-1026 (SB-30)	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
6		SP-1043 (SB-50)	*Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc.	タブノキ
7	Ⅱ区	SP-1079	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ



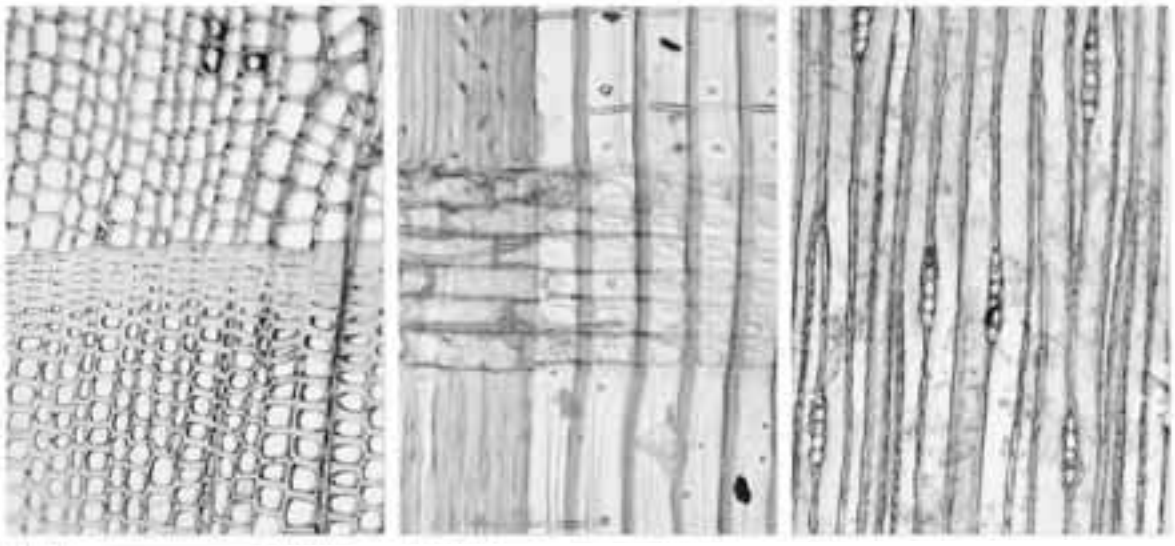
横断面 ――――：0.5mm　放射断面 ――――：0.2mm　接線断面 ――――：0.2mm

1. 1）Ⅰ区　SP-1003（SB−02）カヤ



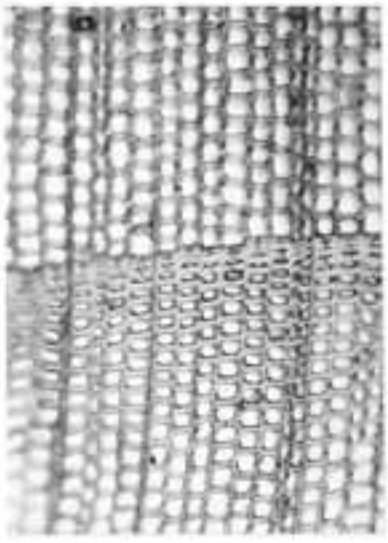
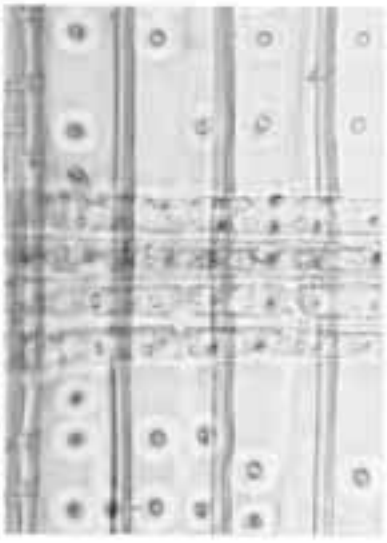
横断面 ――――：0.2mm　放射断面 ――――：0.05mm　接線断面 ――――：0.2mm

2. 2）Ⅰ区　SP-1020（SB−30）スギ



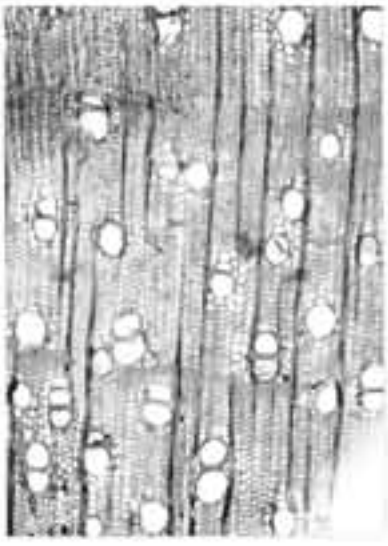
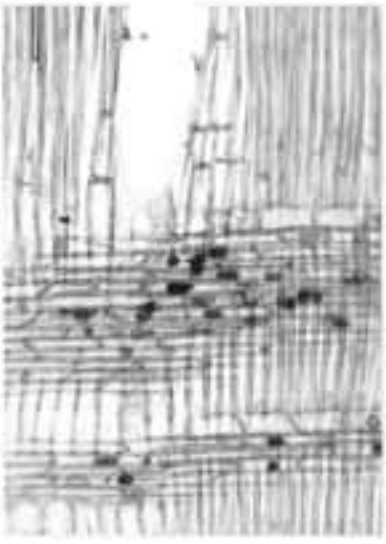
横断面 ――――：0.2mm　放射断面 ――――：0.1mm　接線断面 ――――：0.2mm

3. 3）Ⅰ区　SP-1023（SB−30）コウヤマキ

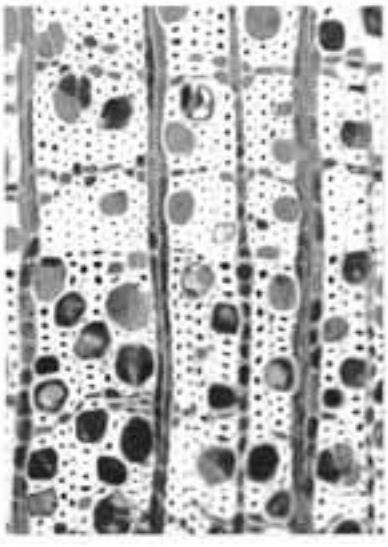
横断面 ――――：0.2mm　放射断面 ――――：0.05mm　接線断面 ――――：0.2mm

4. 4）Ⅰ区　SP-1025（SB−30）ヒノキ

横断面 ――――：0.5mm　放射断面 ――――：0.2mm　接線断面 ――――：0.2mm

5. 6）Ⅰ区　SP-1043（SB−50）タブノキ



横断面 ――――：0.5mm　放射断面 ――――：0.2mm　接線断面 ――――：0.2mm

6. 7）Ⅱ区　SP-1079　イスノキ

付３．三宅廃寺出土丸瓦の製作技法再考

福岡市埋蔵文化財センター　瀧本正志

1. はじめに

福岡平野の東南部を北流する那珂川の西岸には油山山塊から派生した低丘陵が展開しており、三宅廃寺は標高11～12mを呈する丘陵裾部に所在する。同廃寺から北北西へ約150mほどの背面に位置する丘陵斜面では瓦類の生産が行なわれていたことを物語る瓦窯の発見が既に昭和初期に報告されるとともに、近辺の礎石の存在や採集遺物、さらには発掘調査や文献資料等からの検討による三宅廃寺の存在も報告されている。また、昭和52年11月～53年3月にかけて実施された第1次発掘調査では掘立柱建物・瓦溜・溝などの遺構とともに「寺」と墨書された須恵器を始めとする多種多様な遺物が出土したことから、三宅廃寺は伽藍配置や規模などについては不明ではあるものの、同地に7世紀後半～8世紀前半期に創建され9世紀前半まで存続したとする調査報告がなされ、先の所見を裏付けることとなった。

その後、第2次調査が平成14年1月～翌年5月にかけて第1次調査地の西隣りで行われ、掘建柱建物や溝などの遺構とともに瓦類が出土した。出土資料を整理段階で実見する機会を得て第１次調査報告書に収載されている資料との比較を行っていたところ、観察報告とは差異が存在することが判明した。このため、本市埋蔵文化財センターに収蔵されている第1次調査出土瓦を観察したところ、報告書の所見において若干の誤認に基づく記述が存在することが判明した。

本稿では、市内出土の鴻臚館式軒瓦や老司式軒瓦、および付随する瓦類についての研究を進める中での検討資料として、紙面の関係から第1次調査出土丸瓦の観察途中の一部を報告するものである。

なお資料の掲載箇所や当該資料の混乱を防ぐため、本稿掲載資料においては「図○」、第1次調査報告書の掲載資料を示す場合は「報Fig.□」で表記することとし、遺物登録番号も併せて記載した。ただし、遺物登録番号で調査番号を示す上4桁の7703は省略している。また、文中での「報告書」は特段の断りがない限り福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集『三宅廃寺』である。

図版中の実測図・拓影はすべて福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集『三宅廃寺』から転載した。さらに図版キャプションにおける（　）の報Fig.□-□は当該資料が報告書で記載された箇所・番号を示すものである。

2. 形状と模骨（筒型台）

丸瓦は、玉縁式丸瓦と行基式丸瓦の二種類が出土している。玉縁式に用いられている模骨は、大きさの異なる円筒台を重ねた形状のもの（図13･10019、報Fig.18-2）や上段が裁頭円錐形に似たものが復元されるもの（図10～12、14～16・10018、10020、報Fig.18-1･3）で、丸瓦凹面に凹凸痕跡が認められないことから、丸太材もしくは一木を削り出した、いわゆる一木造りの原体が推定される。これらの中で図13･10019（報Fig.18-2）は玉縁の形状および成形技法などから古い様相が指摘される。

これに対して行基式は、広端部と狭端部との径の異なりから裁頭円錐形状の円筒台が復元されるが、丸瓦凹面の痕跡から円筒台が丸太材もしくは一木削りなどを原体とするもの（図5～9・10022～10024、報Fig.19-1～3）と径0.6～0.8cmを呈する棒を細紐で簾状の裁頭円錐形状に編み上げた、いわゆる竹状模骨を原体とする（図1～4・10025～10026、報Fig.20-1～2）二種類が存在する。

3. 素材形状

模骨に巻き付ける粘土素材の形状は、粘土紐と粘土板の二種類がある。報告書ではすべての丸瓦が粘土紐によるとされていたが、痕跡が明瞭な10022・10023（図6～9、報Fig.19-1～2）および可能性の高い10019（図13、報Fig.18-2）を除く他は粘土板を用いている。形態別では、その割合は別としても、10019を（図13、報Fig.18-2）粘土紐とした場合には玉縁式と行基式のいずれにも粘土紐と粘土板の両者が存在することになる。

粘土紐と粘土板との区別は、凹面に残るいくつかの痕跡で判別される。粘土紐の場合は、布を被せた模骨（筒型台）に粘土紐を巻き付ける技法の特徴から、図6～9に示すように粘土紐の合わせ目が広端面に並行してほぼ等間隔で凹面に残る。これは、丸瓦と平瓦とでは機能箇所が異なり、丸瓦の場合は凹面が風雨などと接することや外観に影響を与える要素を持たないため、模骨から抜き取り、粘土円筒分割後に更なる工程を加える必要性が無いことにより、成形時の状況（技法）を痕跡としてそのまま残すと推察される。反対に平瓦の機能箇所である凹面の場合は、雨水の流れに代表される第一義的機能の更なる向上や副次的な装飾効果・強度等を高めることを意図ととしたと推察される整形技法のヘラ磨きやナデ消しなどにより看取するに足り得る痕跡を残していない例も数多くある。粘土紐巻き付けにより成形された10022・10023（図6～9、報Fig.19-1～2）は行基式で良好な資料である。

粘土板を用いた場合の痕跡は、模骨に粘土板を巻き付けた際に生じる粘土板合わせ目痕と粘土角材から粘土板を切り離す際の痕跡である糸切り痕である。三宅廃寺出土資料における粘土板合わせ目痕は玉縁式と行基式の形状の違いや模骨の構造の違いなどに関係なく残り、いずれも合わせ目痕が玉縁式では広端部から玉縁端部、行基式でも広端部から狭端部まで途切れることなく認められることから、両者とも一枚の粘土板を巻き付けて成形していることを示している。

糸切り痕跡においても、玉縁式と行基式の形状の違いや模骨の構造の違いなどに関係なく明瞭な痕跡を看取できる。玉縁式では10018・10020（図10～12、14～16、報Fig.18-1・3）、竹状模骨を用いた行基式では10025・10026（図1～4、報Fig.20-1～2）、一木造りなどの模骨を用いた行基式では10024（図5、報Fig.19-3）が良好な資料といえる。特に10024（図5、報Fig.19-3）の糸切り痕跡は、同心半円形を縦に二分したものであることから、一枚の粘土板を巻き付けて成形していることも裏付けるものである。

4. 粘土円筒分割

焼き物の弱点箇所は種類に関係なく素材の接合部であり、瓦もその例外ではない。巻き付け技法による粘土紐の場合は合わせ目や継ぎ目であり、粘土板の場合は合わせ目である。粘土円筒の分割と粘土板の合わせ目の位置の関係については、全資料を観察した結果ではないものの、玉縁式については10018・10020（図10～12、14～16、報Fig.18-1・3）をはじめとして大半が側縁近くに位置しており、製作技法が内包する技術的問題である合わせ目の破損の回避を意識して分割していることは明白である。これに対して竹状模骨を用いた行基式では、観察資料数が少量ではあるものの10025・10026（図1～4、報Fig.20-1～2）に見るように位置が一定していない。

粘土円筒の分割手法は、側縁調整により消滅して全ての資料において明らかではないが、行基式の場合には竹状模骨を用いた10025・10026（図1～4、報Fig.20-1～2）、一木造りなどの模骨を用いた10024（図5、報Fig.19-3）に見るように模骨の構造に関係なく凸面側の粘土円筒の外側から分割裁面を入れている。10025（図1～3、報Fig.20-1）の凸面には、分割裁面を入れる際の目安（あたり）と考えられる直線の刻み目が側縁に平行して残っている。

玉縁式の場合は10018・10020（図10～12、14～16、報Fig.18-1･3）に見るように丸瓦の凹面にあたる粘土円筒の内側から分割裁面を入れている。

5. 小　結

製作技法などの共通点から、主体を形成する幾つかの群を可能性としてまとめてみた。①は行基式丸瓦（粘土板巻き付け手法+縄叩き目整形+凸面ナデ消し調整）だけで平瓦を伴わない群である。該当資料としては10024～10026（図1～5、報Fig.19-3、29-1･2）である。②は行基式丸瓦（粘土紐巻き付け手法+縄叩き目整形+凸面ナデ消し調整）・平瓦（粘土紐巻き付け手法+縄叩き目整形+凹面一部ナデ消し調整）の群である。該当資料としては丸瓦は10022･10023（図6～9、報Fig.19-1･2）、平瓦は10013･10017（図20～21、報Fig.16-1、17-1）である。③は玉縁式丸瓦（粘土板巻き付け手法+縄叩き目整形+凸面ナデ消し調整）、平瓦（粘土板巻き付け手法+縄叩き目整形+凹面一部ナデ消し調整）の群である。該当資料としては丸瓦は10018・10020（図10～12、14～16、報Fig.18-1･3）、平瓦は10015（図17～19、報Fig.16-1）である。④は玉縁式丸瓦（粘土紐巻き付け手法+縄叩き目整形+凸面一部ナデ消し調整）、平瓦（粘土紐巻き付け手法+縄叩き目整形）であるが、該当資料と考える10019（図13、報Fig.20-1）の玉縁凹面に僅かに残る痕跡を粘土紐の合わせ目痕跡と判断する消極的根拠であり、この群については今後の資料検証を待って再検討する必要がある。

①の行基式丸瓦の群は模骨構造に違いが見られるものの、強い歪みを呈した青灰色の焼締った須恵質、成形手法や凸面調整手法、分割手法など共通する点が多い。創建期もしくはそれ以前に使用された可能性はあるものの、あくまでも甍を構成する中において補完的な使われ方もしくは先駆的施設での使用であったと考える。この一群の瓦の供給地としては、三宅廃寺から北北西方向へ約150mに位置し、昭和8年に福岡県から報告されている三宅瓦窯が考えられる。同瓦窯の報告書を見ると、詳細は不明であるが出土した丸瓦はいずれも行基式で強い歪みを呈している点は興味深い。今後さらなる検討が必要であることは当然であるが、寺院建立の主体となる工人組織とは異なる組織が創建期もしくは以前に存在していたことが考えられる。

②と③の群が伽藍瓦の主体を成し、複数の供給地が同時もしく僅かな時間差で稼働していたと考える。それらの生産地は三宅廃寺から南方向2kmの丘陵に位置する老司瓦窯群やその全容が不明ではあるが南西方向150mの丘陵斜面に位置する岩野瓦窯群が考えられる。

今回の報告では軒先瓦との関連、格子叩き目を有する丸平瓦、大宰府との関連など、三宅廃寺の基層を構成する事象については触れていない。現在進めている調査がまとまりしだい別敲で報告したい。

参考文献

1. 玉泉大梁　福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書第八号　「筑紫郡三宅廃寺址　傳三宅廃寺址並に瓦窯址」1933年
2. 二宮忠司　福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集　『三宅廃寺』「瓦類」,「まとめ」,「平瓦・丸瓦一覧表」1979年
3. 大脇　潔　奈良国立文化財研究所学報第49冊　『研究論集Ⅸ』「丸瓦の製作技術」1991年

図1　丸瓦10025（報Fig.20-1）

図2　丸瓦10025粘土板糸切り痕・模骨痕

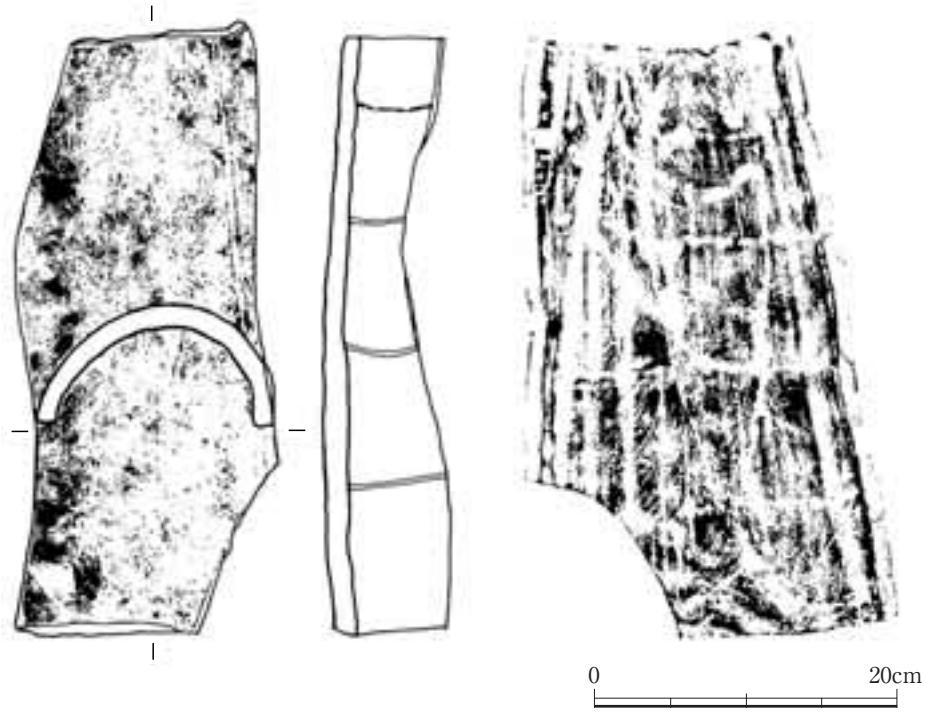


図3　丸瓦10025拓影・実測図（縮尺1/5）

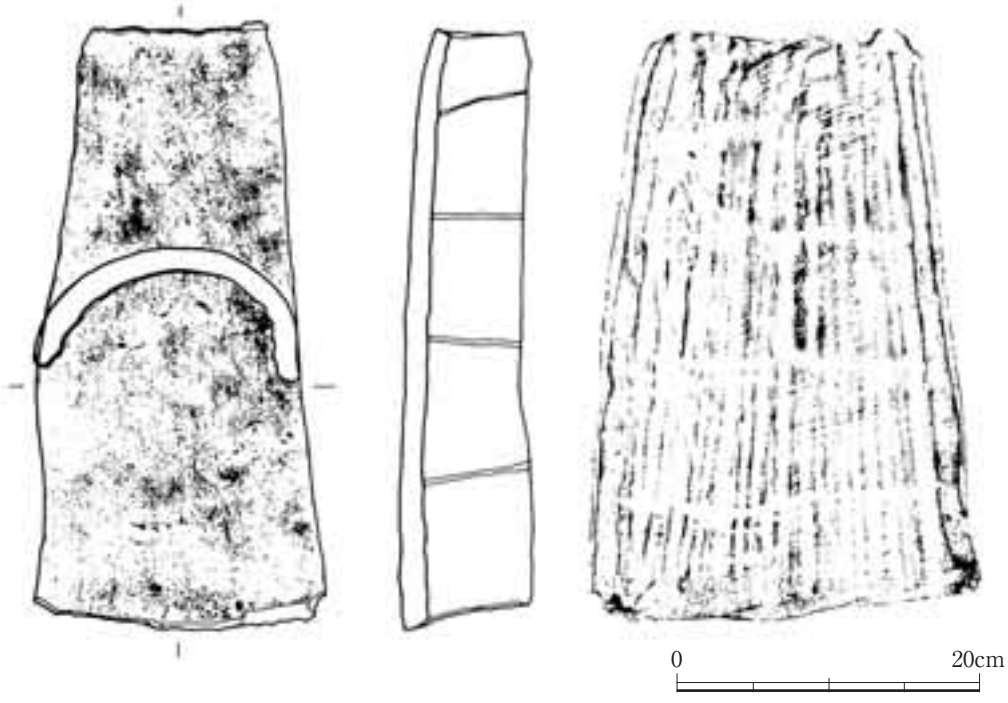


図4　丸瓦10026（報Fig.20-2）拓影・実測図（縮尺1/5）

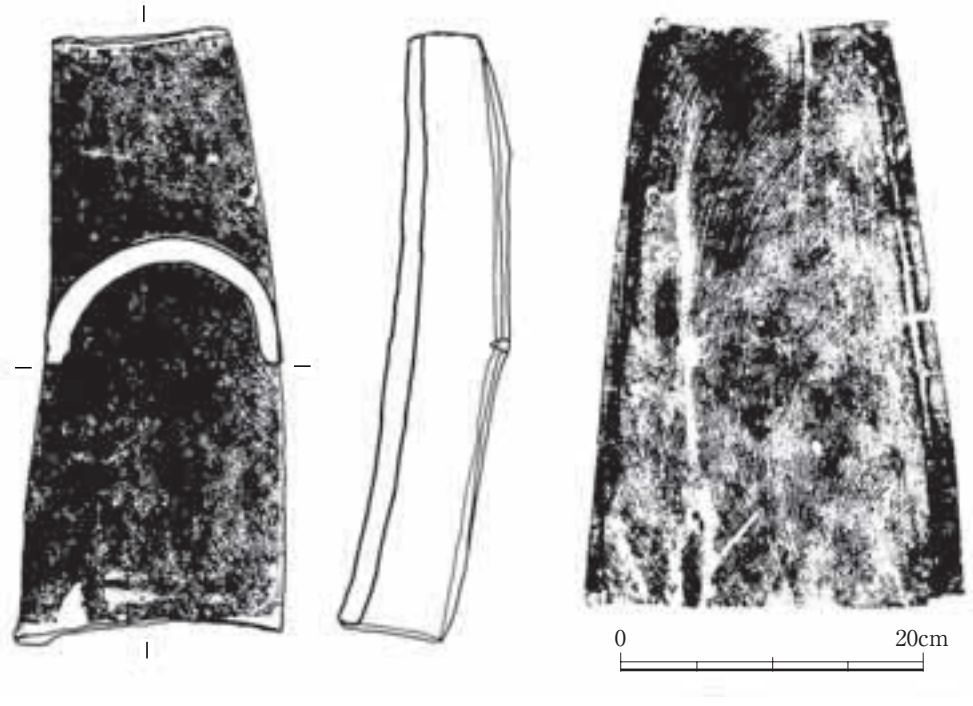


図5　丸瓦10024（報Fig.19-3）拓影・実測図（縮尺1/5）

図6　丸瓦10022（報Fig.19-1）

図7　丸瓦10022粘土紐合わせ目痕

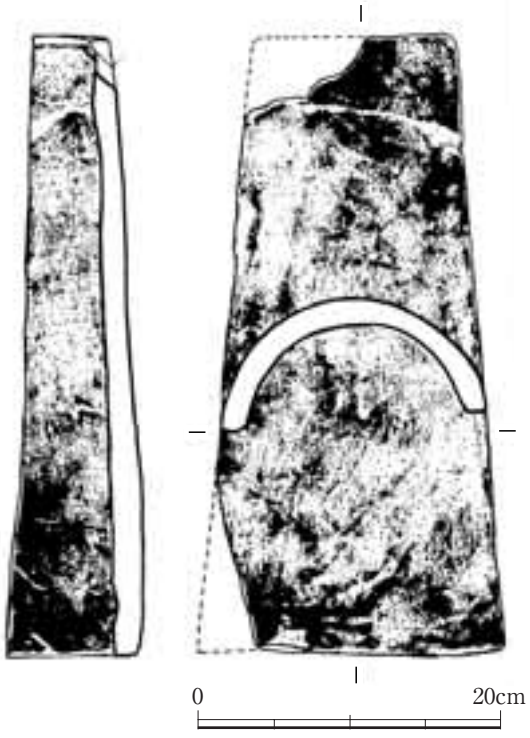


図8　丸瓦10022拓影・実測図（縮尺1/5）

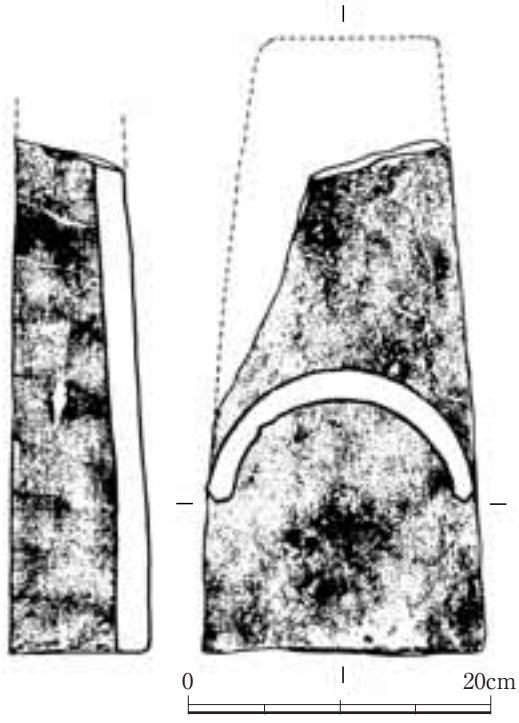


図9　丸瓦10023（報Fig.19-2）拓影・実測図（縮尺1/5）

図10　丸瓦10018（報Fig.18-1）

図11　丸瓦10018粘土板合わせ目痕

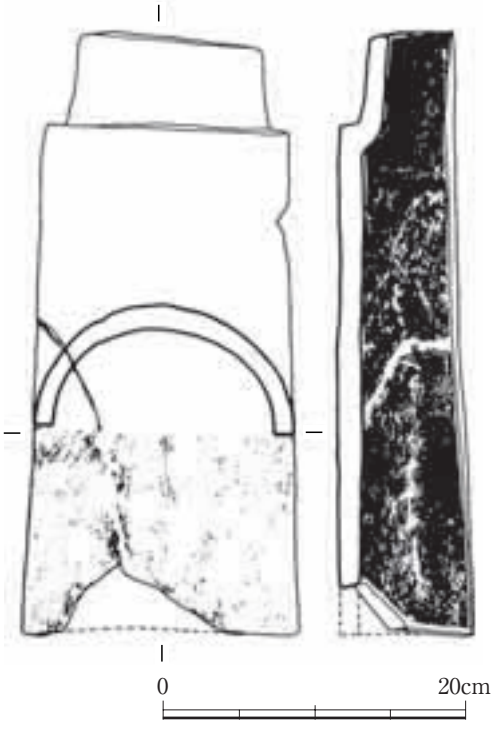


図12　丸瓦10018拓影・実測図（縮尺1/5）

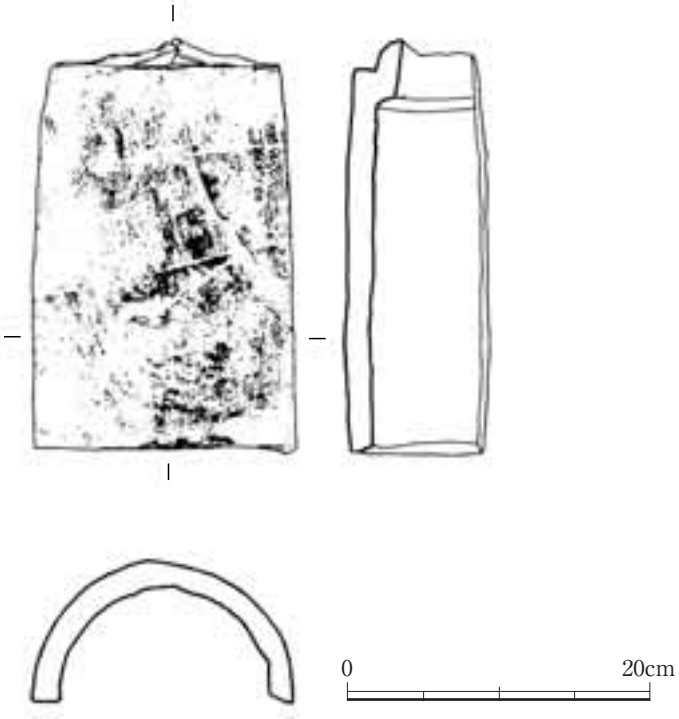


図13　丸瓦10019（報Fig.18-2）拓影・実測図（縮尺1/5）

図14　丸瓦10020（報Fig.18-3）

図15　丸瓦10020粘土板合わせ目痕

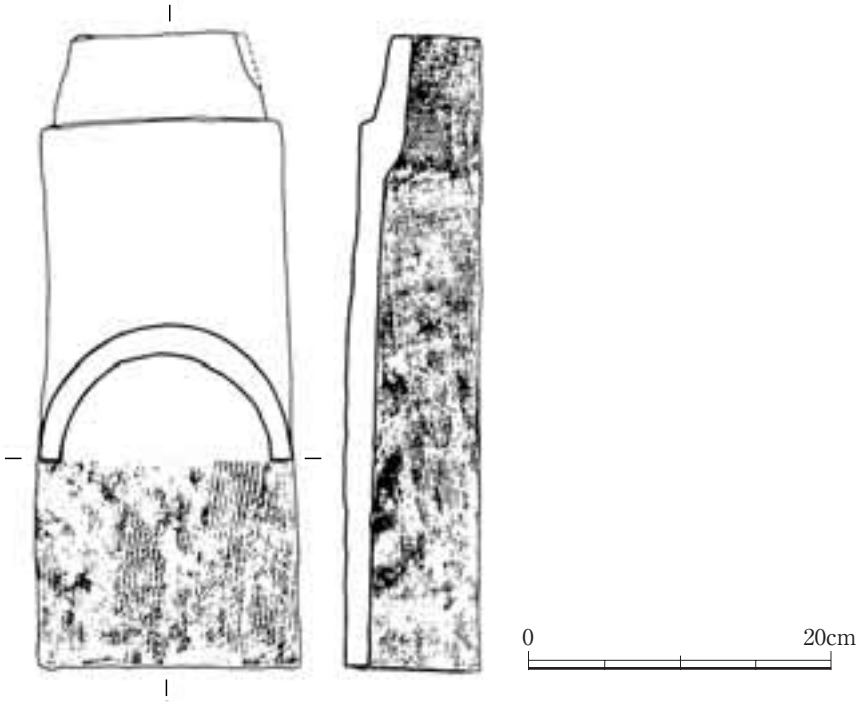


図16　丸瓦10020拓影・実測図（縮尺1/5）

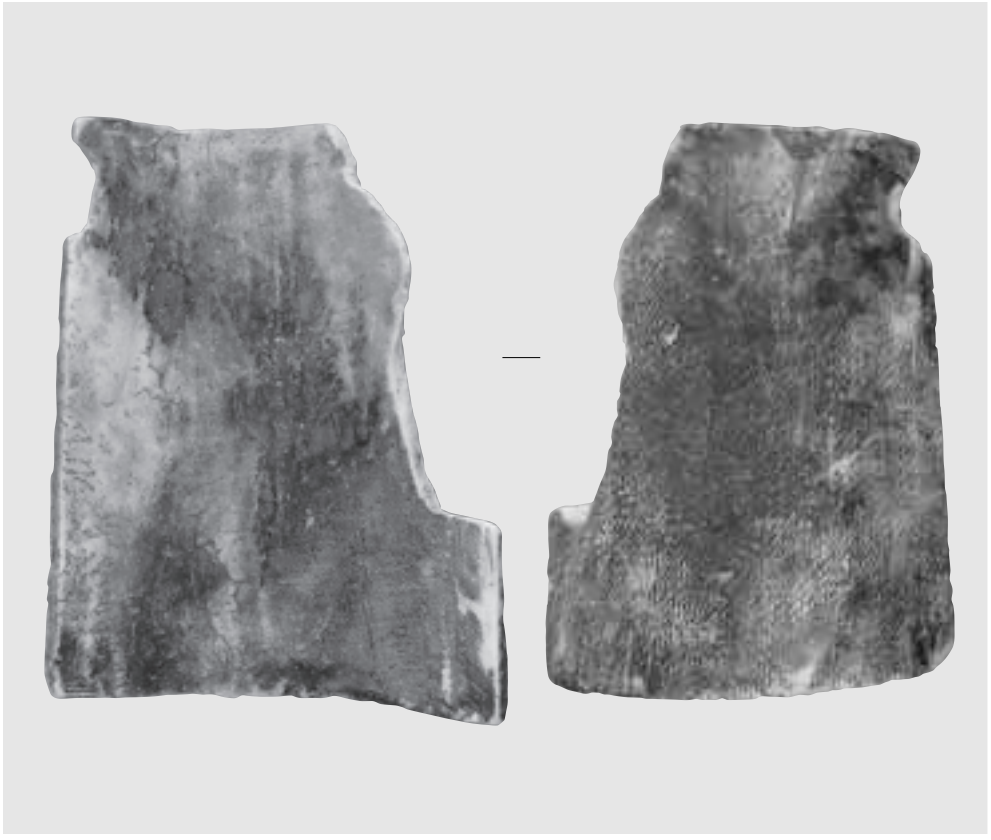


図17　平瓦10015（報Fig.16-1）

図18　平瓦10015粘土板合わせ目痕

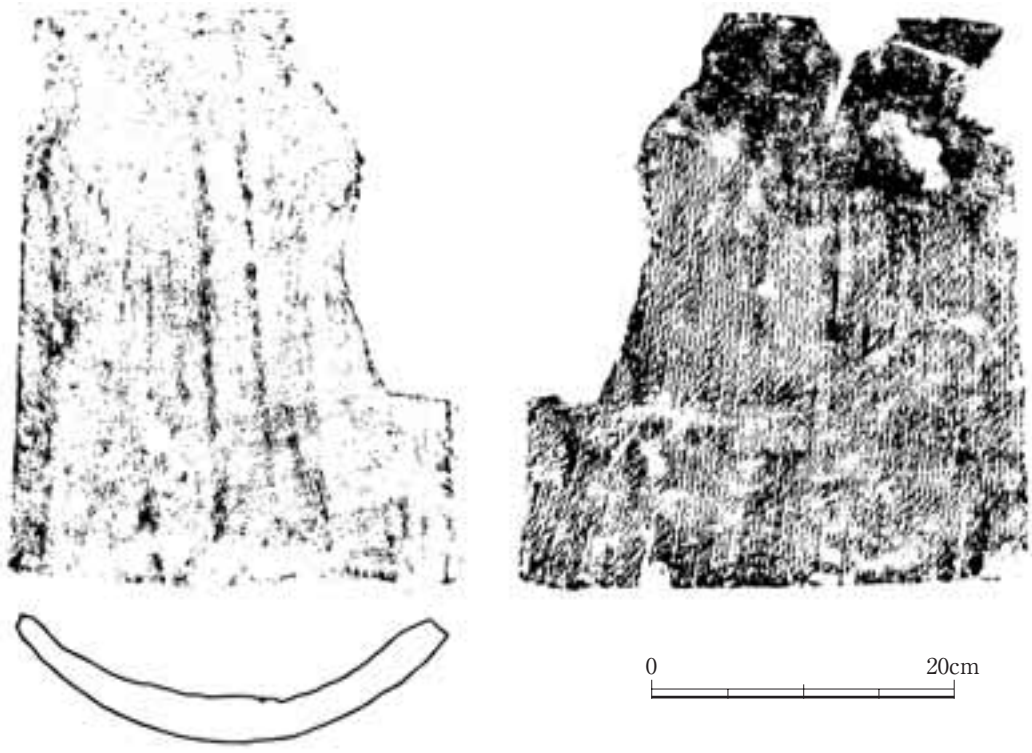


図19　平瓦10015拓影・実測図（縮尺1/5）

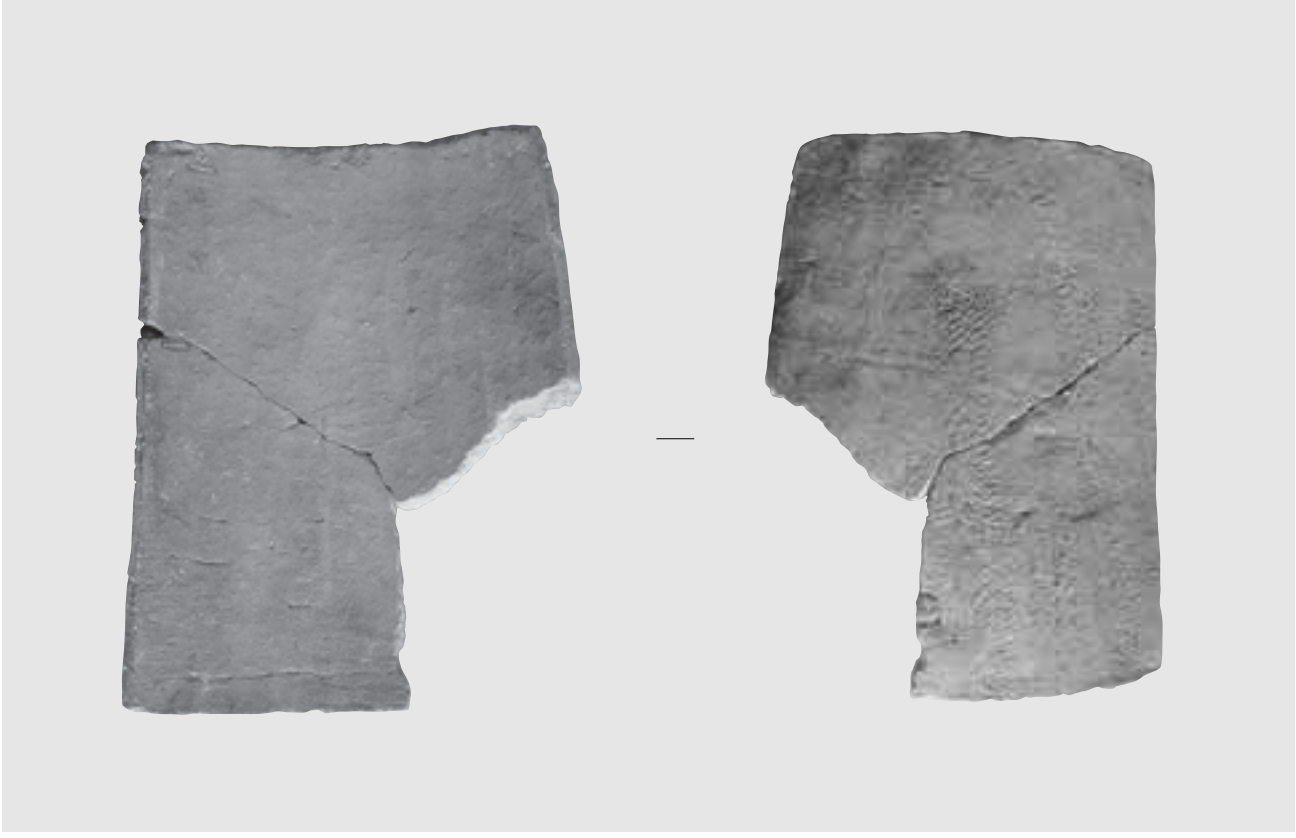


図20　平瓦10013（報Fig.15-1）

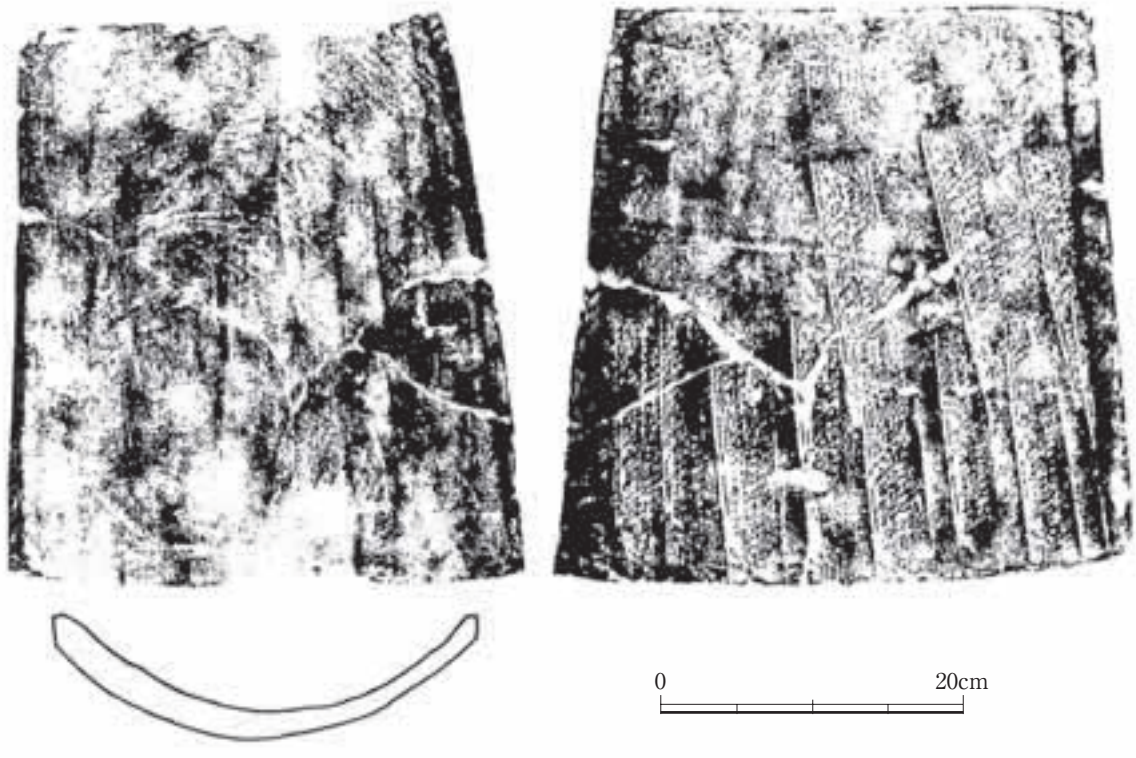


図21　平瓦10013拓影・実測図（縮尺1/5）

PLATES

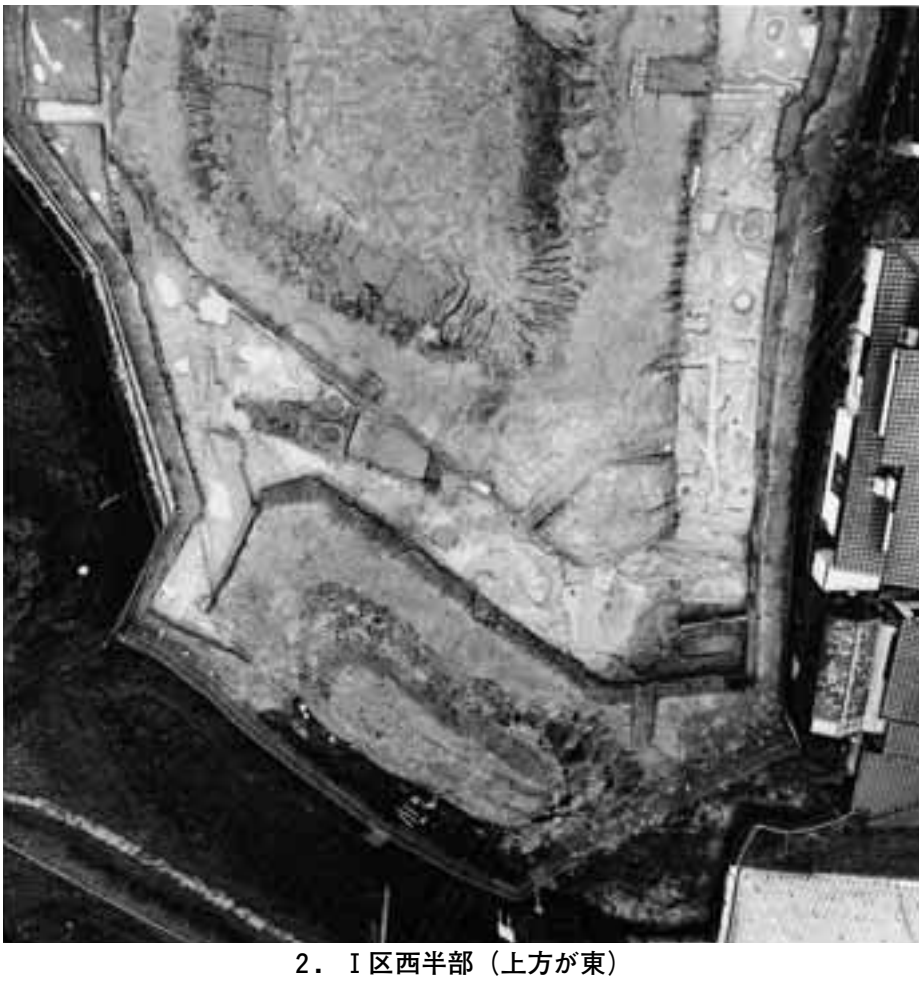
（図　　版）

灯明皿と転用硯

1．Ⅰ区調査前（西から）

2．Ⅰ区調査風景（南西から）

1．Ⅰ区東半部（上方が東）



2．Ⅰ区西半部（上方が東）

1．Ⅰ区全景（北東から）

2．Ⅰ区南辺部（東から）

3．Ⅰ区西辺部（北東から）

1．Ⅰ区東辺部（東から）

2．Ⅰ区北辺部（東から）

3．Ⅱ区全景（北東から）

1．Ⅰ区南壁中央部の土層（北西から）

2．Ⅰ区南壁中央部の土層（北東から）

PL.6

1．SD－01全景（北から）

2．SD－01ｅ区完掘後（北東から）

1．SD－01 c 区北壁土層断面（南から）

2．SD－01 e 区南壁土層断面（北から）

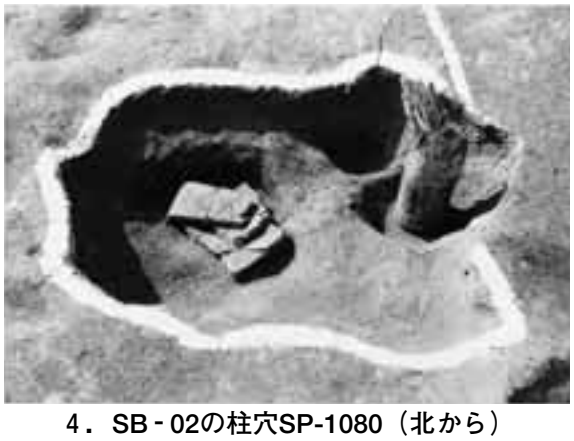
3．SD－01 e 区遺物出土状況（南から）

PL.8

1．SB－02（東から）

2．SB－02の柱穴SP-1002（西から）

3．SB－02の柱穴SP-1003（北から）



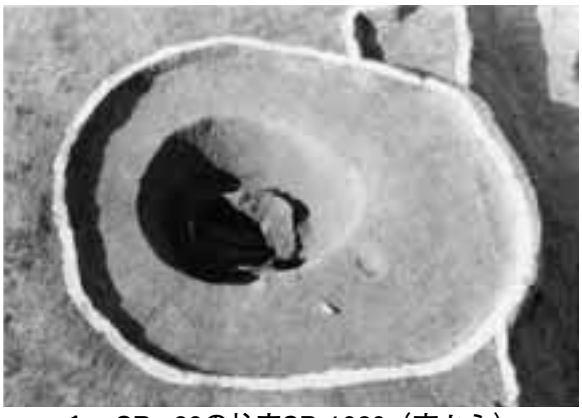
4．SB－02の柱穴SP-1080（北から）

5．SB－02の柱穴SP-1081（北から）

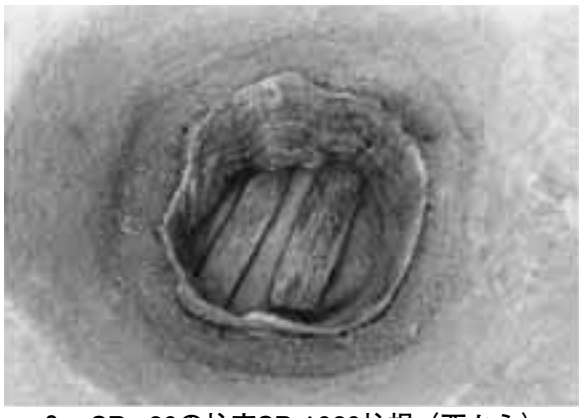
1．SB－20・SD－21（北から）

2．SB－30（東から）

PL.10



1．SB－30の柱穴SP-1020（南から）



2．SB－30の柱穴SP-1020柱根（西から）

3．SB－30の柱穴SP-1020礎板（南から）

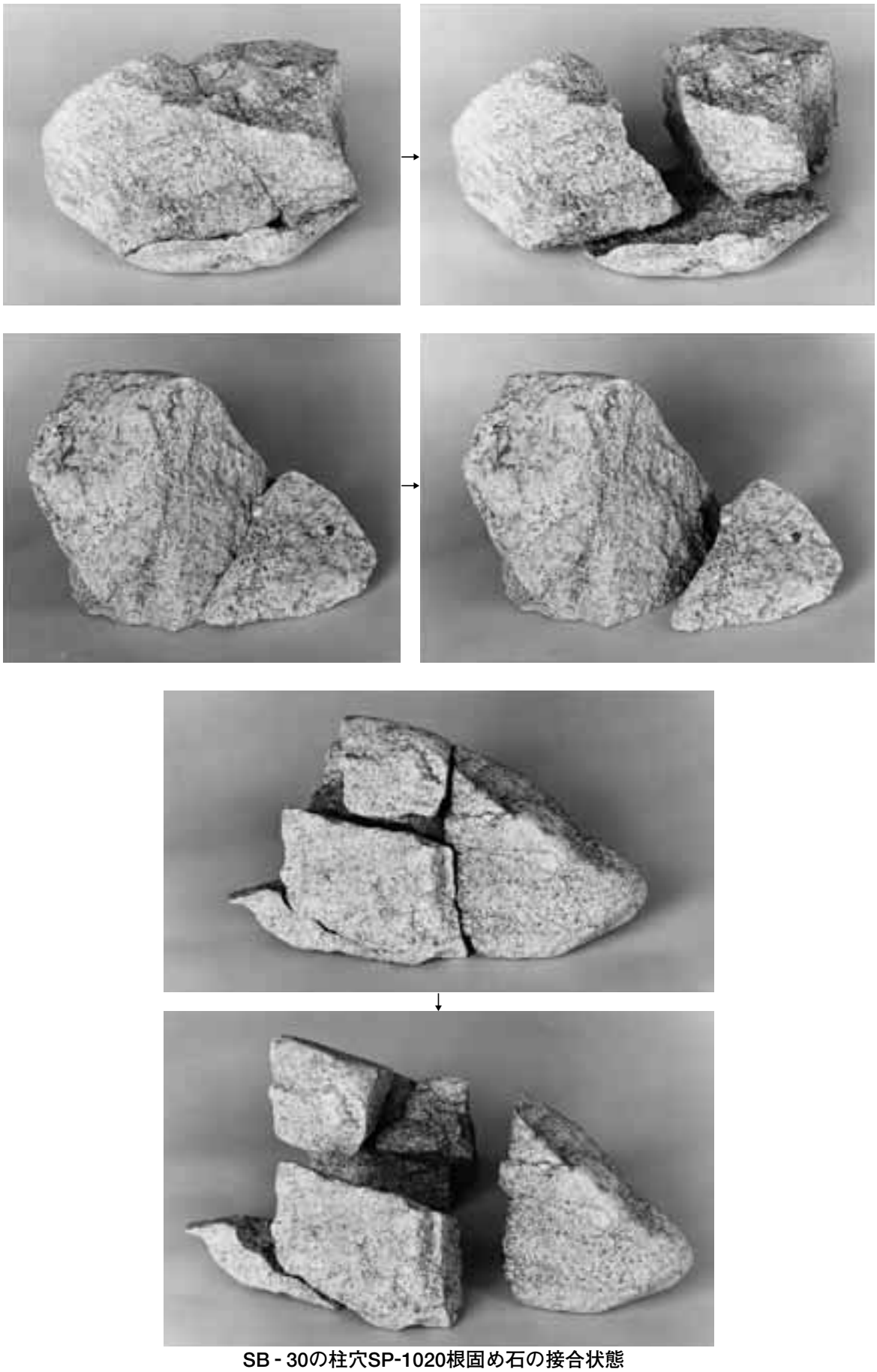
4．SB－30の柱穴SP-1022（北西から）

5．SB－30の柱穴SP-1023（北から）

6．SB－30の柱穴SP-1023（西から）

7．SB－30の柱穴SP-1025（南から）

8．SB－30の柱穴SP-1026（南から）



SB - 30の柱穴SP-1020根固め石の接合状態

PL.12

1．SB－50（東から）

2．SB－50の柱穴SP-1043（東から）

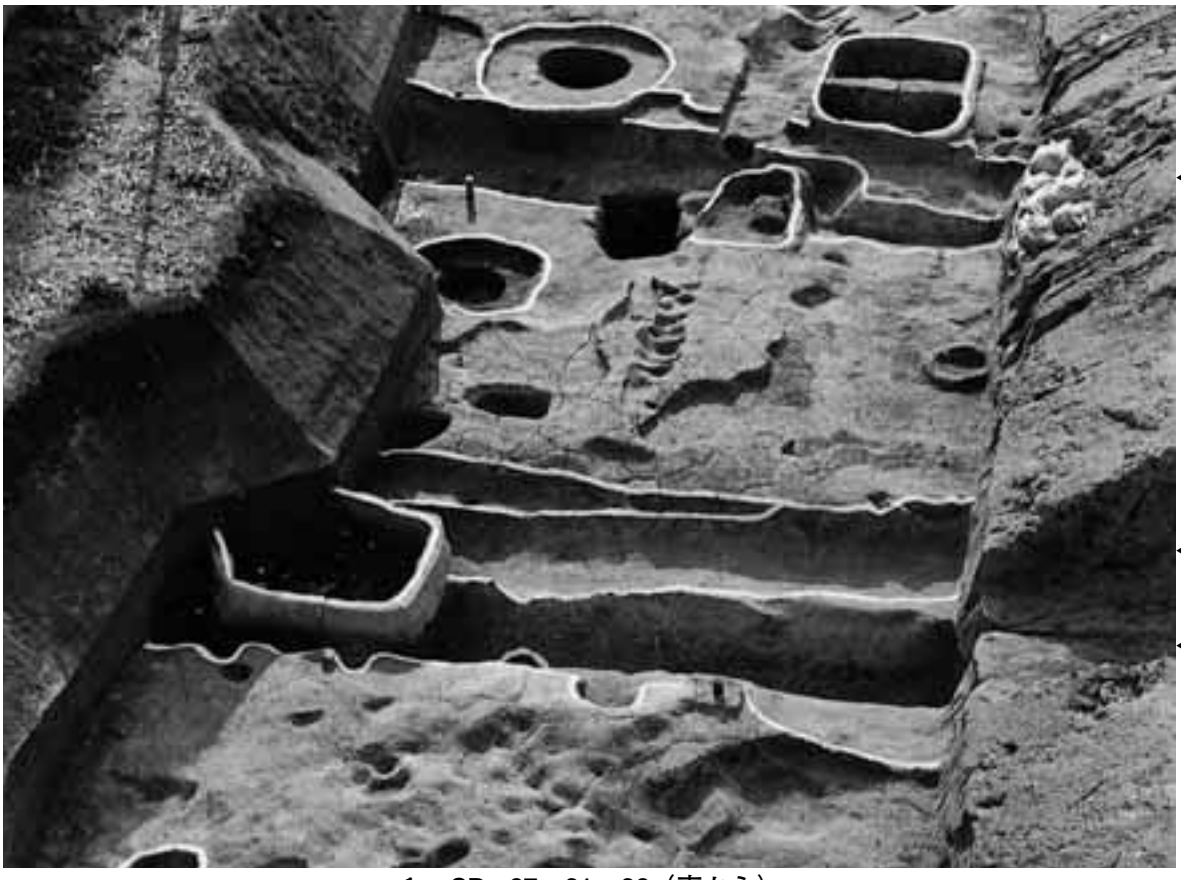
1．SD－14南半部（北から）

2．SD－15南壁土層（北から）

PL.14

1．SD－60（東から）

2．SD－60土層断面（東から）

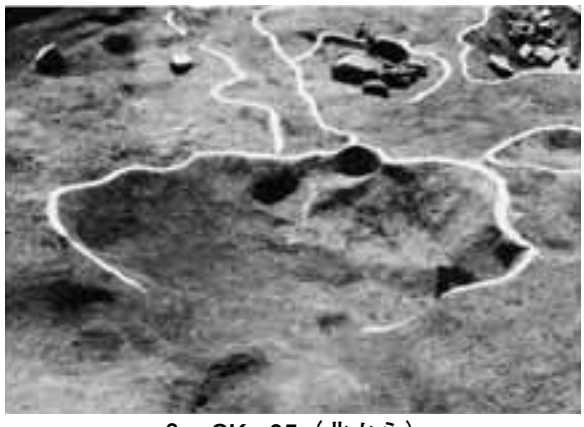


1．SD - 27・31・32（東から）

2．SD - 69・70（北東から）

PL.16

1．SK－06～09（北西から）



2．SK－05（北から）

3．SK－07（東から）

4．SK－08（北西から）

5．SK－09（南東から）

1．SK－10（南から）

2．SK－19（北から）

PL.18

1．Ⅰ区南東隅の土坑群（北東から）

2．SK－55（東から）

1．SK－61全景（南西から）

2．SK－61遺物出土状況（西から）

PL.20

1

20

21

23

15

29

30

溝・土坑出土土器（縮尺不同）

39

40

44

45

46

47

57

61

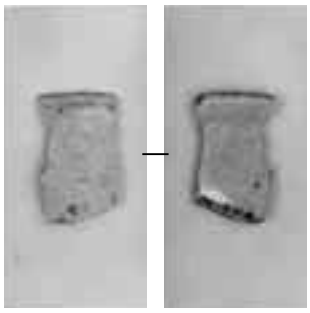
60

63

66

土坑出土土器（縮尺不同）

PL.22


75

76

81

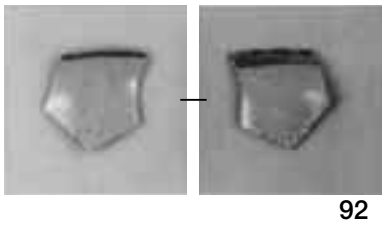
84

85

86

90

88


92

96

97

98

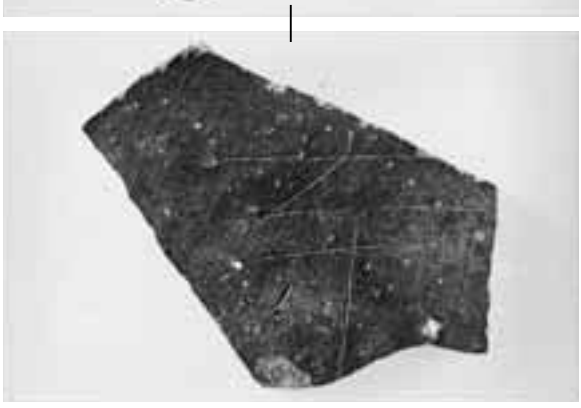
100

101

102

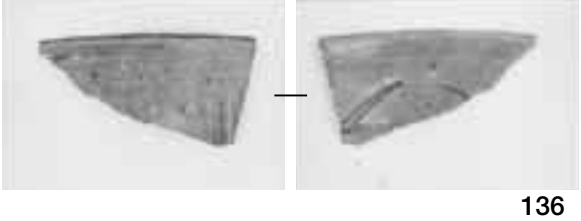
その他の遺構・包含層・整地層出土土器（縮尺不同）

113



124

131



136

111

123

125

126

138

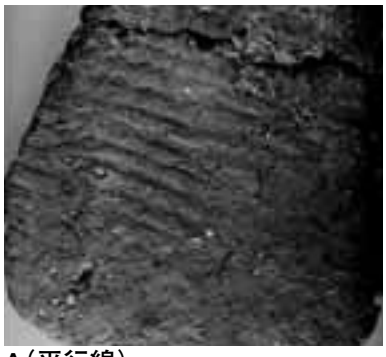
整地層・包含層・試掘出土土器（縮尺不同）

PL.24

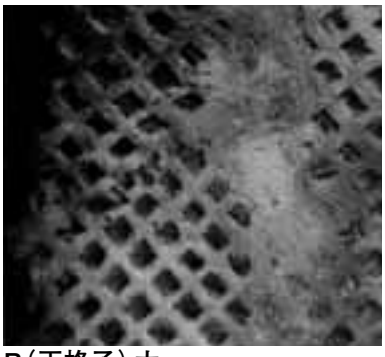
142

143

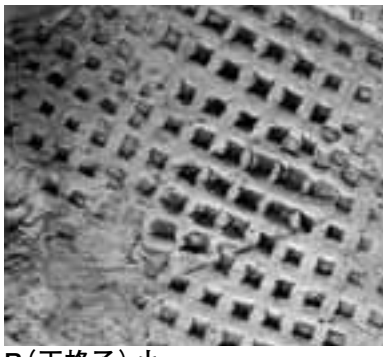
144



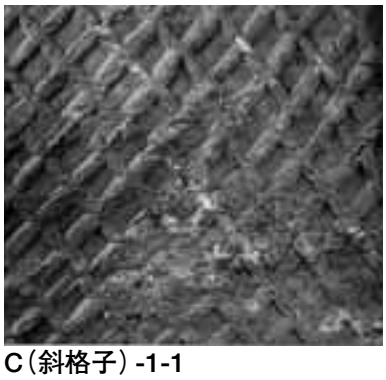
A（平行線）



B（正格子）大

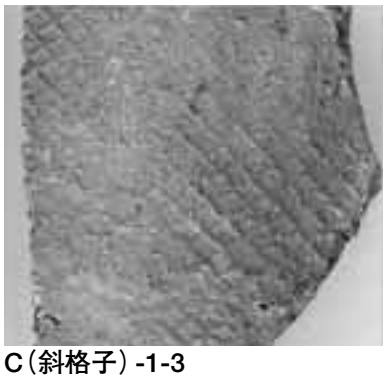


B（正格子）小

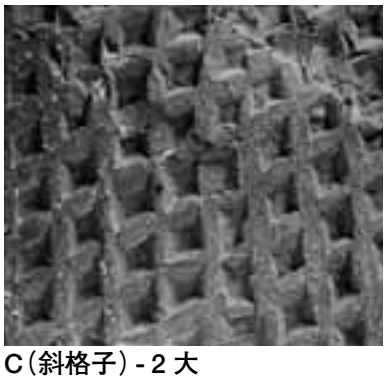


C（斜格子）-1-1

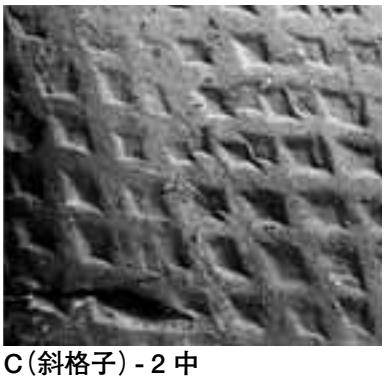
C（斜格子）-1-2



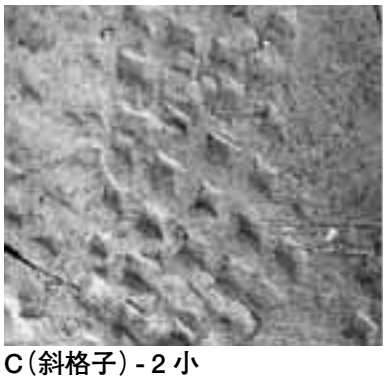
C（斜格子）-1-3



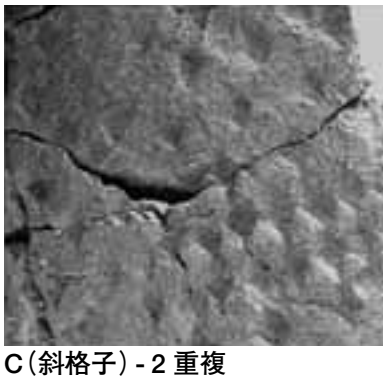
C（斜格子）- 2 大



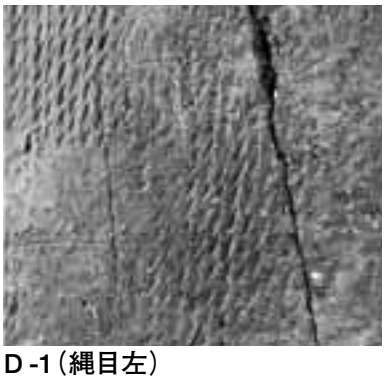
C（斜格子）- 2 中



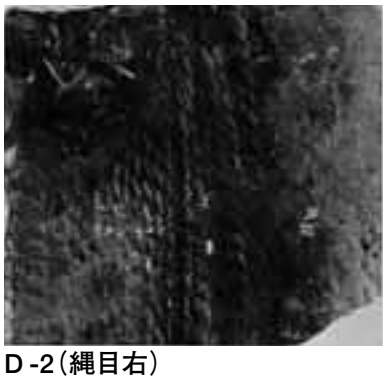
C（斜格子）- 2 小



C（斜格子）- 2 重複



D -1（縄目左）



D -2（縄目右）

軒瓦・瓦の叩き目（縮尺不同）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みやけはいじ 2
書　　名	三宅廃寺 2
副 書 名	三宅A遺跡・三宅廃寺推定地の第 2 次調査報告
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第826集
編 著 者 名	吉武　学、田中　克子
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　　在	〒810-8621　福岡市中央区天神 1 丁目 8 － 1
電 話 番 号	092-711-4667
発 行 年 月 日	2004年03月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 遺跡所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
みやけはいじだいじ 三宅廃寺第2次	ふくおかしみなみく 福岡市南区 みなみおおはしちょうめ 南大橋1丁目 1157ほか	40134	0144	世界測地系 33°33′12″	130°25′21″	20020115 ～ 20020527	1023.5	分譲住宅 地造成
				日本測地系 33°33′00″	130°25′30″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三宅廃寺第 2 次	水田？ 古代寺院	古墳時代前期、 古代	古墳－溝、 古代－掘立柱建物・溝・土坑	古墳－土師器 古代－須恵器・土師器・ 瓦・中国陶磁器 中世－陶磁器	古代寺院の区画溝？ 「寺」銘墨書・刻書土器

三宅廃寺 2
－三宅Ａ遺跡・三宅廃寺推定地の第２次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第826集
2004年（平成16年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神１丁目８－１
印　刷　㈱ゼネラルアサヒ
　　福岡市東区松田３丁目777